

『人間関係研究』 第25号の刊行にあたって

今年の夏は、厳しいにもほどがある...と言いたくなる程の暑さでした。みなさま、お変わりなくお過ごしでしょうか。秋風が心地よい毎日となりましたが、夏の疲れが一気にやってくる頃かもしれません。どうかくれぐれもご自愛くださいませ。

さて、南山大学人間関係研究センターは、今年、設立25周年を迎えることができました。まずは、ここまで人間関係研究センターの営みを支えてくださった方々へ、また、このセンターを創りあげてくださった先人のお一人おひとりへ、心からの感謝を申し上げます。本当にありがとうございます。

去る7月5日には、センター設立25周年と、昨年刊行した『人間関係の学び方』の出版をお祝いし、南山大学にて記念イベントを開催いたしました。当日は36℃を超える暑さでしたが、そんなことも顧みぬ多くの方が、各地よりお集まりくださいました。イベントの中では、様々な形で、南山大学人間関係研究センターのこれまでとこれからに思いを馳せながら、みなさまとわかちあう時を過ごすことができました。

その一つは、「教育の冒険と人間関係の学び方：南山大学人間関係研究センター25年の軌跡とこれから」と題した全体会（座談会）でした。元センター員であり南山大学名誉教授のグラバア俊子先生をお迎えしてこの座談会を開催できたことは、本当に大きなよこびだったと感じています。長きに渡ってラボラトリー方式の体験学習と共に歩んでこられたグラバア先生のお話は、“25年の軌跡”を大きく超えた時間と空間の繋がりの中で、この学びが紡がれてきたことを実感するものでした。この全体会（座談会）の内容は、本紀要の特集記事として掲載されております。ぜひご一読いただき、ラボラトリー方式の体験学習という学び方を通して生まれた様々な「教育の冒険」の軌跡と、そこで脈々と受け継がれてきたこと・大切にされてきたことについて、じっくりと味わっていただければ幸いです。

本号にはこの他にも、研究員による論文等と、昨年度に開催した公開講演会の記録を掲載することができました。講演者の御代田太一さんには、『「よるべない100人のそばに居る。」：救護施設での出会いと人間関係』というテーマでお話いただきました。一般的にあまり知られていないという救護施設の存在や役割の重要性が、御代田さんの温かな語りを通して豊かに伝わってくるご講演でした。講演録に触れていただくと、御代田さんのご著書も読んでみたい！というお気持ちが湧いてくるのではないかと思います。ぜひご覧ください。

本号もまた、本センターのミッションである、多様なあり方を尊重すること、また、人間性豊かな社会の実現に少しでも貢献できることを願いながら、みなさまのもとへお届けいたします。

南山大学人間関係研究センター長 中 尾 陽 子

人間関係研究 vol.25(2025)

巻頭言

『人間関係研究』第25号の刊行にあたって 中尾陽子

特集「人間関係の学び方：その先にあるもの」

教育の冒険と人間関係の学び方：南山大学人間関係研究センター25年の軌跡とこれから

..... グラバア俊子・土屋耕治・楠本和彦・中村和彦… (1)

「今ここ」と「共にある」ことが育む在宅診療のまなざし

— ラボラトリー方式の体験学習が日常実践に与えている影響 — 堀越洋一・楠本和彦… (23)

ラボラトリー方式の体験学習における精神力動的視点の変遷：個人・集団の無意識の扱い

..... 土屋耕治… (27)

Article

ワークショップ形式によるプロテスタント教会の修養会に関する実践報告と検討（その2）

— CRCIによる2009年修養会 — 榊原康成・楠本和彦・丹羽牧代… (45)

実習集

実習「借り人競争」 .. 中尾陽子・磯崎未来・重岡紬杏・鈴木舜・鈴木樹・高原昂希… (92)

実習「NGワード×おしゃべり大会」

..... 中尾陽子・新野春日・玉越響・富田真鈴・横田翔… (97)

公開講演会

「よるべない100人のそばに居る。」：救護施設での出会いと人間関係 御代田太一… (101)

事業報告 (129)

The Nanzan Journal of Human Relations vol.25(2025)

Commentary Yoko NAKAO

Special Issue : Learning Human Relations: What Lies Beyond

Educational Adventures and Learning Human Relations: The 25-Year Journey of Nanzan University's Center for Human Relations Studies and Beyond Toshiko GLOVER, Koji TSUCHIYA, Kazuhiko KUSUMOTO, Kazuhiko NAKAMURA... (1)

A Perspective on Home-Based Medical Care Natured Through Being 'Here and Now' and 'Witness' : How Laboratory Method Experiential Learning Influences Daily Practice Yoichi HORIKOSHI, Kazuhiko KUSUMOTO... (23)

The Evolution of Psychodynamic Perspectives in Experiential Learning Using the Laboratory Method: Approaches to Individual and Group Unconscious Koji TSUCHIYA... (27)

Article

A Case Study and Evaluation of Workshop-Style Retreats in a Protestant Church : The 2009 CRC Retreat Yasunari SAKAKIBARA, Kazuhiko KUSUMOTO, Makiyo NIWA... (45)

Exercises

Karibito (Scavenger Hunt) Race Yoko NAKAO, Mirai ISOZAKI, tsumugi SHIGEOKA, Shun SUZUKI, Tatsuki SUZUKI, Koki TAKAHARA... (92)

NG Word ×Free Talk..... Yoko NAKAO, Kasuga NIINO, Hibiki TAMAKOSHI, Marin TOMIDA, Sho YOKOTA... (97)

Lectures

Standing by 100 People with Nowhere to Turn: Encounters and Human Relationships at a Social Protection Facility Taichi MIYODA... (101)

Reports (129)

■■ 特集「人間関係の学び方：その先にあるもの」

教育の冒険と人間関係の学び方 南山大学人間関係研究センター25年の軌跡とこれから

日 時：2025年7月5日（土）13:00～14:30
「南山大学人間関係研究センター設立25周年＆
『人間関係の学び方』出版 記念イベント」
場 所：南山大学D棟5階D51教室
登壇者：**グラバア俊子**
土屋耕治、楠本和彦、中村和彦

センター長：

本日は本当にお暑い中を、ちょっと大げさですが、命の危険も顧みず、この記念イベントにご参加いただきありがとうございます。今日は南山大学人間関係研究センターの25周年と、それを目指してというわけではなかったのですが、昨年私たちセンター員が力を合わせてつくりました『人間関係の学び方』の出版記念イベントを開催させていただきたいと思います。これからの半日の時間の中で、私たちが受け取ってきたバトンを、それはどんなものだったのかなというのをふりかえりながら、また次にどんなふうにつなげていくといいのかなということを、皆さんと一緒に考えて次に向かっていけるような、そんな時間になるといいなと思っています。ぜひご協力をよろしくお願いいたします。

では早速、こちらの皆さまにバトンを渡してよろしいでしょうかね。

では、全体会1を始めていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

土屋：

ありがとうございます。

それではバトンを受け取りまして、座談会の担当をします土屋です。よろしくお願いいたします。

「教育の冒険と人間関係の学び方：南山大学人間関係研究センター25年の軌跡とこれから」ということで、今から90分ほどの時間を過ごしていけたらと思っています。

まず、この時間をどのように過ごしていくかということですが、チェックイン、いろいろ小グループでのレビューという時間を、間に挟んでおります。これは、一方的に何か聞いていただくというよりは、周りの人と話しながら、こうだったかな、ああだったかな、こんなことを考えたよということも紹介し合

いながら進めていく、そんなことができればよいかなと考えております。最初にそのような周りの方と自己紹介する時間があり、これまでの歩みを少し紹介します。グラバア先生をお迎えしていますので、グラバア先生のこれまでの時代観とか、このような流れの中で体験学習が育まれてきたんだよという話をお伺いできればと思っております。

では、まずチェックインとしまして、ちょっと周りの方々と、椅子を動かしたり向きを変えたりしていただいて、2～3人で少し声を出していただければと思っております。お名前でありますとか、「何があなたをここに連れてきましたか」ということについてです。何かこういうきっかけでとかこんな思いがあったとか、こういう機会があったとか、そのようなことを少しご紹介し合うような、そんな時間になればなと思っております。時間は5分弱取っていきたいと思います。よろしいでしょうか。周りを見渡していただきながら、1人になっていそうだったらちょっと声をかけていただきながら、過ごしていけたらと思います。ではどうぞ。よろしくお願いします。

土屋：

この座談会の概要ですけれども、お配りしたファイルの中にも挟み込んであるところです。私たちが長年取り組んできたラボラトリー方式の体験学習の実践は、2000年に南山大学に心理人間学科と人間関係研究センターが設立されたことにより、さらに発展してきました。本全体会では、人間関係科の教育から心理人間学科、また人間関係研究センターの実践に長年携わってこられたグラバア俊子先生をお迎えし、体験学習の実践の軌跡を振り返ります。また『人間関係の学び方』の編集を務めた3名の編者とともに、これまでの役割とこれからの時代に求められる視点というものを見通していこうと思っております。そして、今回の話に関しましては録音をとらせていただき、文字起こしをして、紀要に掲載できればなと考えているところです。

では、まずグラバア先生にマイクをお渡しする前に、少しこの人関センターの歩みを紹介したいと思います。

これはホームページにあるところですが、私たちの研究目的は、「広く学際的視点に立った人間関係研究」として、人間関係に関する理論的研究、またアプローチ方法の実践研究、人間性豊かな関係性と社会の創生に向けた応用研究に取り組んでいくこと、そして、研究のみならず、左上にありますように公開講座の開催、また右上にありますように公開講演会の開催、さらに『人間関係研究』という論文雑誌を刊行しております。

今回25周年ということなのですが、実は左後ろにあるもの、あれも休み時間などにご覧いただければと思います。あれは、公開講座が何年に、どういうタイトルの、どういう講座があったのかを全部記録が残っておりますので、それをまとめたものです。参加人数と担当講師などもありまして、昔はこ

ういう名前のこういう講座もやっていたんだとか、そのようなことも見ていただければと思います。また、右後ろにあります、今、中尾先生がいらっしゃるところは、人間関係研究の論文としてあるもの、これはもうフリーでPDFでウェブ上でご覧いただけるものがほとんどですけれども、冊子としてあるものです。あとこちらの講座に関するカタログなどもありますので、ぜひぜひご覧いただければと思います。

では戻ります。人関センターにまつわる歴史ということで、3枚ほどスライドがあります。

1973年に南山短期大学に人間関係科が新設されたことがスタートです。そして、1977年に人関センターができていきます。そのときの大庭先生が「医学部の教授が大学での研究教育と大学病院での臨床活動の両立により素晴らしい研究成果をあげるように、生きた人間関係を研究する人間関係科のスタッフも大学内にとどまらず社会現場とつながる研究の場が必要である」という趣旨を述べられ、社会人向けのいろいろな研修の場だったり、その中で私どもも学んでいく形ができていったようです。

下のほうを見ますと、1987年にその一環として東海地区では初めてTグループによる人間関係トレーニングが実施され、84年には研究紀要ができるということがあります。

2000年に人間関係科と南山大学人文学部教育学科が統合発展し、人文学部心理人間学科ができました。そのときに、それまで短大のほうにあった人間関係研究センターが南山大学人間関係研究センターという名前になりまして、新たなスタートを切ったということです。また、2004年には大学院ができました。

2017年についてもここに書かれているのですけれども、実は短大のときからスタートをカウントするのか、2000年以降にカウントするかでちょっとダブルスタンダードがあって、2017年のときには創設から40周年ですねという紀要のテーマが実はあったりしながら、だけど今回は2000年のときからカウントした25年ということで、今回の機会があります。南山大学人間研究センターの歩みについてでした。

公開講座については、この下にある数字はホームページに出ていたこの段階での数字だったのですけれども、9587名の方にご参加いただいたということでした。今はさらに人数も増えまして、累計262講座、延べ9657名が修了し、公開講演会も45回開催したということです。ミッションは「多様なあり方を尊重する、人間性豊かな社会を創り出すために」ということで、引き続き歩を進めているところでございます。

次のスライドは、『人間関係トレーニング』から『人間関係の学び方』へということです。今回のイベントのもう1つの意味が、この書籍の刊行イベントであるということです。『人間関係トレーニング』は、92年の9月に初版が出たという記録が残っております。その後12年7カ月を経て第2版が出て、私も

本当に長く使っておりました。

そして、ナカニシヤ出版さんからこのたび、2024年の11月に『人間関係の学び方』という、『人間関係トレーニング』第2版から19年7カ月を経て誕生したということであります。準備し始めたのが2021年で、4年とか5年ぐらい前で、途中コロナも挟んだこともあって少し進みがうまくいかなかったようこともありましたけれども、実は今日いらっしゃるナカニシヤ出版の後藤さんにも、編集でも非常にお世話になりながら、何とか完成して刊行することができました。

今回のこの表紙の写真が、実際に左ぐらいのちょっと暗い感じから、色を明るくして右側のこれぐらいになっているのですが、私がたまたま去年研究休暇でイギリスに行く機会がありまして、そのときに撮ったものです。実は裏表紙のところにグリーンパーク（ロンドン）で撮影というのが書いてあります。それをちょっと違う角度から撮ったものがありまして、それが今日、25周年イベントのクリアファイルの写真として使われているものです。

いろいろと紹介をしまいいりましたが、戻りまして、今回25周年ということで、人間関係科からラボラトリー方式の体験学習の実践、その歩みを知り尽くしていられるグラバア先生にマイクをお渡しして、どういう時代であったのか、今またどのように考えるかということをお聞きできればと思います。

では先生、よろしくお願いいたします。

講師（グラバア俊子氏）：

ご紹介をいただきましたグラバア俊子と申します。

懐かしい顔もあれば、初めての方もたくさんいらっしゃるところで、今日、このようなタイミングでお話しする機会をいただき、ちょっと緊張しております。まあ暑くて、クラクラしているということもあるのですが。

皆さん、まず差し上げた資料1をご覧ください。何しろこの年になると話したいことがいっぱいあって、話し切れない、時間がただ延びるということが結構あると、一応自覚しております。ですから、話し足りないところも資料を見ていただければそれなりに分かっていたかなと思って、今日は話せるところまで話したいなと思っています。

本当に緊張していますね、声が。皆さん、お名前を知っていられる方が多いと思うのですが、センター長を長くしていられした津村俊充先生、この東海地区の学校に体験学習という方法を導入することにすごく注力なさって実績を残された先生なのですが、彼からどのぐらい前からかな、「グラバアさん」というふうによく言われるようになりました。まあその通りなのかもしれませんが。今日はこういう機会をいただきましたので、せっかくですので、私の記念としても、はい。今後はこのように（愚楽婆）と名乗ろうかなと思っております。このぐらいの年になりますと、若い頃は一生懸命やってきたわけなのですが、若気の至りというか、自分の足りなかったところとか、そういうことも

次第に見えてきて、反省しきりというところもありますけれども、まあまあそれも許して何とか前に進もうかなという気持ちが、「愚楽婆」というこの名前に表れております。

土屋先生から何かお話をと言っていた時に、2点思ったことがありました。1つはやはりセンターの25周年、四半世紀ということですね。この会というのが今までのセンターの歩みを振り返り、そして、新たな若い方がたくさんいらしていてうれしいなと思っているのですけれども、やはりいろいろ変わっていきますよね。変わっていかないと文明って衰退してしまいますから。だから今は変化の方向性を求める良いチャンスなんだなということが1つ。

そのときに、しっちゃかめっちゃかでもいいから、いろいろな考え、また突拍子もないものでもいいから、いろいろな考えを聞くチャンスがあればいいかなというお話もいただいたので、資料1に書いてあります「私たちは今、歴史の中のどこに立っているのか」ということで、少しくいうトレーニングのできてくる歴史というものを、皆さんに知っていただきたいと思います。そのときに、今の時代でしたらこういうデータというのは簡単に取れるんですよ。今回の資料2-1, 2-2もCopilotにも手伝ってもらいましたけれども。

ですから、私がここでお話しすることは数字的なことよりも、そこにすごくご縁があって、そこで生きてきて、それで体験学習に出会ったからこそその人生だと思っている私なので、そういう人間がどういうふうに出会いながら生きてきたかという、そういうちょっと、皆さんがイメージできるようなお話ができたらいいなと思っています。私的なお話で申し訳ないのですが、まあそれも1つかなと思って、少しお話を聞いていただければと思っています。

“今ここ”で起こっている生のグループ体験を学習素材とするTグループの教育理論を、実際の高等教育に応用するというか、転換していくということで生まれた人間関係科、そして体験学習。そのご縁の始まりは、なんと私の場合は生まれたときからなのですね。というのは、資料1の年表を見ていただいて、一番右側ですね。Tグループ誕生が1947年と書いてありますが、私、1947年9月26日生まれでございます。途中から気が付いたんですね。最初、私数字に弱いものですから全然そういう意識がなかったのですが、「ああ、そうか。本当に私の生まれた年とTグループの生まれた年是一緒だったんだ」と、ちょっと感慨深いものがありました。また、ボストン大学大学院に留学中に、ケネス・ベネから1946年の発端のコネチカットのワークショップの様子を直接お聞きするチャンスにも恵まれました。

では、「体験学習の成立過程」の欄を幾つか選んで見ていきたいと思うのですが、私は立教大学のキリスト教学科で、あとは大学院の組織神学というところを卒業しております。それで、まずどこを見るといいかな。

あっ、そうそう、「1968年 日本にて大学紛争多発」というところがありますよね。それをちょっと下へいきますと「1969年 立教大学ロックアウト」と

書いてあります。

先ほど先生がコロナのときに大変だった、本当は20周年をやりようと思ったけれどもコロナでできなかったという話を聞いたのですが、いや、考えてみるとそれどころじゃないんですよ。私、大学4年間授業料を払いました、でも、大学教育は3年間しか受けられなかったのです。結局大学はロックアウトされてしまって、だから、4年のときは全然大学の授業ってなかったんですよ。入れなかったの、大学に。そういう状況で、それでも一応授業料を払っていたので、卒業式だけはあったんですよ。これって、何ていいでしょうかね。すごくサボった学生さんで、出席時間が足りないから卒業できませんと言うけれども、大学が勝手に、まあ勝手にというのはおかしいかもしれませんが、諸事情で1年間閉ざしていても「はい、大学卒業」という、そういう時代だったわけです。

このときの学生闘争では、本当に、器物破損はもうそこら中でありました。蛍光灯を投げてきたりとかね。爆発するんですよね。樺美智子さんって覚えていらっしゃる方は多いと思いますが、東大の女子学生ですけども、安保のデモの途中で、今回は政治のことは触れていないのですけども、デモで亡くなったのですね。そういうすさまじい時代でありました。

そして、たまたま私の指導教員が柳原光先生という方で、ここにありますように「1962年 立教大学キリスト教教育研究所設立」とありますけれども、その所長をなさっていらっしゃいました。その立教大学でも、団交とかいろいろあったんですよ。

まあ一応教育が再開した、ロックアウトが解消された。その後の收拾、つまりカリキュラム改革が行われました。いろいろな学生からの要求もたくさんあったわけですよ。私から見てもリーズナブルな要求というのがたくさんあったのですね。そういうものを踏まえて、どういうふうにかリキュラムを立て直そうかと考えたときに、柳原先生が立教大学の文学部の部長代理ということで、その任を担ったわけです。そこで柳原先生が打ち出したカリキュラムの1つが、文学部相関カリ、各学科がお互いに関連し合うカリキュラムということで、これが山梨県の清里の清泉寮で行われた第1回の、たぶん日本で初めてだと思うのですが、大学生のTグループだったのです。

私はその時点では全然Tグループを知りませんでした。ただ、柳原先生から「あなたはこのTグループに参加しなさい」というふうに、指導教員からの命令というか指導が入りまして、それで夏、清里で何も分らずに参加したわけです。それが私のTグループ、ひいては体験学習との出会いだったわけです。それは私にとっては、ある意味人生の大きな転換点になりました。どういうことかといいますと、そのTグループの中でトレーナーというある意味権威に対して、グループ全員で反抗したりボイコットしたり、いろいろやりました。わざと小さくなって輪の中に入れないとか、そういうこともしました。

でも、そこで私に指摘されたことは「あなたは考えることはできる、頭では考えているけれども、自分の気持ちに一切気づいていない」ということでした。今でも覚えていますけれども、「あなたは今、何を感じていますか」と聞かれるんですね。「こう思っています」と言うと、「それは考えでしょう。感じじゃない。感じているのとは違うんですよ」というような、そういうやり取りを何度も繰り返した後に、最後に「ああ、もう分からない」と叫んだのです。もう本当に分からなくなっちゃったんです。そうしたら「それが今のあなたの気持ちだよ」と言われまして、私はそれですごくスツと、「ああ、これが私の気持ちなのか、今の気持ちか」と分かった。更に指摘されたのが「あなたの中には理性もあるし感性もある。だけど、あなたは理性しか使っていないじゃないか。もったいない。飛行機の片肺飛行、つまりエンジンが1個で飛んでいるようなものだよ」と言われました。それはすごく私にとっては大きな気づきでした。

それともう1つは、最後のセッションのときに、お互いに一人ひとりのメンバーに自分の気持ちを伝える、それも無言で伝えるという、そういうエンディング、クロージングがあったのです。そのときに、私は1人の同級生の女の子に思わずハグしていたんですね。それまでの自分だったら考えられない行動なんですよ。そのときに、「ああ、何て自然なことなんだろう。そして、なんと温かくてお互いに伝わり合う関わりなんだろう」、と深く感じました。それを契機に、私の研究テーマとして「非言語コミュニケーション」。それまで、私は特にテーマが見つからないうちに大学院に進んでいたのですが、それが私のテーマになって、今の私につながっているのです、すごく大きな体験だったわけですね。

私はそれから立教大学のキリスト教教育研究所（JICE）にアルバイトで関わり、オブザーバーをしたり、コトレーナーをしたり、トレーナーをしたりという経験や研究をいろいろさせていただきました。私の恩師の一人であるリチャード・A・メリット先生が非言語的な関わりやいろいろな実習を教えてくださいだったので、私はすっかり夢中になりました。2年で修士卒業のところ、もうちょっと経験を積んで修論を書きたいということで、3年かけて卒業することにしました。それもまあご縁といえばご縁なのです、実は。

その期間に初めて私は大人のTグループに参加しました。そのときのメンバーが、女性が2人だったんですね。そのお1人が吉川房枝先生という方でした。実は吉川先生は「人関の生みの母」といわれている方なのですね。彼女は当時カテキスタ会という在俗修道会のトップを務めていらしたのです。もともと立教大学キリスト教教育研究所のトレーニングにはいろいろな宗教の方々が、キリスト教でもカトリックから、いろいろな教団や教会の方、それから立正佼成会とか、ほかの宗教団体、仏教系の方もいらしていたんですね。カテキスタ会からも参加メンバーがいらしたわけです。

彼女はトップとして、いったいそれはどういうトレーニングかちゃんと把握

していなければいけないというお気持ちが強かったようなのですけれども、それで参加なさったのです。

丁度その頃、吉川先生が教鞭をとっていた南山短期大学では、創立5周年をめざして英語科に加えて新しい学科を創設しようと検討中だったようです。Tグループを体験した吉川先生は意見を求められて、ではこういうもの、こういう人間関係の教育を短大でやったらどうでしょうかということになり、清里での教育計画ラボラトリー・トレーニングの時に、こういう計画があるということを経験のところで柳原先生にご相談していたのですが、ちょうど私もそのときに居合わせたのです。それから、副学長の大庭先生も池袋のJICEまでいらっしやまして、その話がどんどん進んだわけです。結果として、1973年に南山短期大学人間関係科というものができました。

でも、文科省（当時は文部省）としてはこの名称は初めてだったのです、「人間関係科」というのは初めてだったのです。さらに輪をかけて、これ「学科」じゃないんですよ。普通はみんな、心理学科とかそういうという名称になるのですけれども、そこでこの教育の冒険をやろうとしていた方々は、学科を学ぶのではない。つまり、人間関係について知識を得る、学ぶということではなくて、「ついて」ではなくて、人間関係そのものを学ぶ。つまり、これを学ぶことによって、人間関係において関わる者として成長をちゃんとするんだ、成長の仕方を学んだという思いがすごく強くて、「学」は拒否したのです。人間関係科という名前になりました。

そして、私は丁度設立の年に卒業となり教務助手としてそこで働きはじめ、2年、3年必死にやって、すごく面白かったのです。楽しかったし、そこに関わっていらっしやる方も、沢田慶輔先生なんて日本のカウンセリング界の本当に重鎮なわけですが、そういう方々も夜遅くまでみんな熱心に関わって、カリキュラムを考えたわけなのです。時には、出席は取るべきかどうかということで本当に涙が流れるような討論をなさったり、本当に真剣に。そういう熱があったので、もう楽しくてしょうがなかったです。だけれども、やはり2年まるまるやってみて私としては楽しいんだけど、教育という広い世界から見たらどういう位置付けなんだろう、どういう意味があるんだろう、そこをちゃんと見てみたい、外から見てみたいという気持ちが出てきて、ボストン大学に留学をさせていただきました。

そのときも、私はあまり考えがないのか、「留学したい。行きます」と言っていたのですけれども、大庭先生が、南山大学のほうには教員が留学するという制度もあるから、短大にもそれを導入しようということで、ありがたいことにサポートをしてくださるということで、約2年間留学しました。

そして、あっ、そう、大事なことを言わなきゃいけない。

だいたい前に戻りますが、私の指導教官で、JICEの所長として新しい人間関係科を立ち上げるサポートをしてくださった柳原先生は、科ができてからも南

山短大に来て講義をしてくださったのですけれども、私はそこで「この教育は民主主義のための教育である。」という発言を、当時はよく聞きました。実際に行った実習も、コンセンサス実習が結構多かったかもしれません。

私はちょうど短大の人間関係センターの、最後のセンター長ということになったのですが、そのときにちょうど非常勤で平山恵先生という方がいらっしゃいまして、その方の関係で国際医療センターのほうから協力してほしいという申し出がありまして、一応それを受け取ることにいたしました。JICAとも協力をして、中村先生も、パキスタンにもバングラデシュにも行かれましたよね。

この年表を見ていただいたら「国連の活動とアメリカの社会活動」とありますが、このアメリカというのを「米国」にしたほうがよかったですね。アメリカというのちょっと広過ぎるので。それから左側のライフスタイルの変化というのを見ていただくと、1950年あたりがちょうど大きな転換点になっていまして、そこまでは「生存指向ライフスタイル」ということで世界は動いてきたと。そこでこのホーソン実験が本当に象徴的だなと思うのですが、「生産性」という言葉を矢印の中の「経済力」「学歴」の上に書き足していただきたいのですが、まさに生産性を求めているわけですね、ホーソン実験でも。それを求めるんだけれども、そこにはすでに「成長指向ライフスタイル」、「私が私であること」、「個であること」、「共にあること」、そういう精神的な豊かさというものも求められるという流れが生まれていたわけですね。

両者を見てみますと、そういう流れと、いわゆるマイノリティに対するいろいろな国際年がありますが、結局パキスタンやカンボジアなどへの援助、そこに人間関係トレーニングを導入してほしいということで導入をしたわけなのですが、センターの活動はそういう流れに合っているなど、私は考えているのです。そうした活動を大学の人間関係研究センターに引き継げたことは、私にとって大きなことでした。

もう時間がないので、もう1つだけ私のことでお話をさせていただきたいのですが、はじめに名前のことを申し上げましたね。私は「グラバア」と名乗っています。国際結婚をしたということなのですが、夫はNASAのエンジニアで、ちょうど当時アポロ計画に携わっていて、アームストロング船長に、月面探査機に関してちょっと指導をしたと誇らしそうに言っていました。そういう時代だったわけですね。では皆さん、社会活動のところに「国際婦人年」と書いてありますが、女性の方、あまりピンとこないかもしれないのですけれども、なぜ私がグラバアと名乗っているかということと関連があるのですよ。

実は、国際結婚してみて初めて分かりました。私は子どもが2人いるのです。しかし、国際結婚しても女性は子どもに日本国籍を渡せないんですよ。渡せなかったのね。男性はできるんですよ。でも、女性はできない。だから、それを正そうと「国際結婚を考える会」に入り社会党の土井たか子委員長を通じてい

ろい働かけたけれども、埒が明きませんでした。結局どうして変わったかという、国際婦人年で、婦人の権利条約を日本国が批准したんですよ。そうしたら、国内法を変えないといけない。外圧です。外圧で、やっとうちの子は日本国籍が取れました。名前もどうするか、選べるようになりました。

私は子どもを保育園に入れたときに、子どもが「自分はグラバアで、お母さんは藤岡って呼ばれてる」と言う。それも私は仕事をしているから、よく藤岡と呼ばれるわけですね。それって子どもには理解できないじゃないですか。だから、そういう混乱を避けるために、グラバアと仕事の上では名乗らせてくださいという呼称願いをつくって提出して、それでグラバアというふうに名乗らせていただいていたわけです。

いざ法律が変わって、子どもに「どっちの姓、グラバアにする？藤岡にする？」と聞いたら、「僕は日本で生活するから藤岡がいい」と言われて、私はちょっと困ったのですが、まあ今のところそういうことになりました。

ということで、どういう時代だったかというお話については、これで終わりたいと思います。あとのことについては、またチャンスがあればお話ししたいと思います。

どうもありがとうございました。

土屋：

ありがとうございます。

ここまでグラバア先生からいろいろお話を伺いました。いろいろな資料もありながら、聞いてみたいこととか、こんなことを考えたんだとか、こんなことが印象的だったんだとか、いろいろ思い浮かんでいらっしやるかと思います。そのようなことも、少しまた5分ほど小グループで過ごす時間を取りますので、こんなことを感じたんだとか思ったとか、ちょっと言葉を交わしながら過ごしていただければと思っております。では、5分ほど取ります。どうぞ。

土屋：

では、少しここまでの話を聞きまして、中村先生と楠本先生から、そして私からも、ちょっと補足だったりコメントだったり質問だったりということを投げかけていけたらと思っております。

では、中村先生からお願いいたします。

中村：

人間関係科の話をグラバア先生がされていて、2つの「文科省初」なんです。1つは「人間関係」という名前が付いたこと、もう1つは「学」が取れたこと、この2つ。その後、人間関係学科はいくつか設立されましたが、「人間関係科」と名乗る学科は存在していません。そういうところがあって私も最初に人間関係科に採用していただいて先輩から言われたのが「学問を教えるな」ということでした。それまで社会心理学を一生懸命研究してきたのに、学問を教えるな、

体験から学生とともに学びなさい、そして、いいトレーナーになりなさい、と言われたことが印象的でした。

当時、人間関係科は「何々学」って、心理学とかいろいろな授業があったのですが、それを全部非常勤にお願いしていて、専任は体験学習をチームでつくるといって、夜遅くまでスタッフミーティングをして、授業をやって、またふりかえりのミーティングをするという連続だったなと思っていますが、当初も専任は学問を教えずに、体験から学ぶ場をつくるというふうなことが徹底されていましたか。

グラバア：

はい。最初の頃、一番苦労したのが、みんなに伝えたい内容をどういうふう
に体験学習の形に組んでいけるのかということがすごく大変でした。だから、
最初の頃は、例えば本を読んで分かち合うとか、私たちもあまりバラエティー
がなかったんですね、やり方の。そういう意味では、この内容をどうやったら
体験学習という形に組めるんだろうかということを本当に模索、探し、失敗も
しました。例えば、学生からは「ふりかえりが書けない」とまず出てきました、
1期、2期は。だから、研究法という時間にふりかえりの書き方を教えましょ
うというようなことをやっていました。そういうことでいいのかな。

中村：

研究法でふりかえりの書き方を教えたんですか。

グラバア：

そうなんです。

中村：

これも本当に、今でもやっているフィールドワークという授業は、研究法と
してフィールドワークがあるんですけど、私たちはそれを違う解釈をして、学
生さんが現場で体験から学んでいくのがフィールドワークだみたいなね、そ
ういう独特の名前の付け方をしていた、なんていうのも関連が深いなと思いま
したね。

グラバア：

はい。

中村：

もう1つ、私がグラバア先生から昔聞いたのは、前の『人間関係トレーニング』
の本の中で、体験学習のサイクルの話、「イヤハ (EIAHE)」というサイクル
が出ていましたね。体験する、指摘、分析、仮説。NTLは「イヤグ (EIAG)」だ
ったんです。最後の「G」が「Generalizing (一般化する)」だったのですけれど、
イヤグがイヤハに変わったのは、実は南山短期大学の当初、グラバア先生たち
が勝手に変えたというエピソードがあるのを聞いたことがあるんですけど。

グラバア：

そうですね。というのは、現実問題として、あの年代のお嬢さんたちと

2年間一緒に学んでいって、Generalizeというところまでいきつくのか、ということが1つ。また、Generalizeしてそこからどうするのか、どう成長につながるのかという問い。体験学習の循環過程をじぶんで回していく力をつけるにはどうしたらよいかということを考えると、それにはやはり、こうしたらいいんじゃないか、ああしたらいいんじゃないか、もしかしたらこれがいいかもしれない、というように選択肢を豊かに発想することが大切。だから、本当に小さな、よく言われる、できそうな次の一步を探すということは、Generalizationよりは仮説化、こういう仮説を立ててやってみた、失敗しても、こういう仮説だったから、じゃあ違う仮説を立ててみたらいいんじゃない？と。学生にとっても気軽に取り組みやすいですね。中にはもっとちゃんと考えた方もいらっしゃると思うんですけど、でも、私的にはそんな感じで取っております。

中村：

南山短期大学のスタッフの人たちが生み出したモデルの名前は、今回40年を経て『人間関係の学び方』では新しいモデルにさせていただいてバージョンアップをしています。

グラバア：

私も最初に目が行きました、そこに。「おおっ」と思って。

中村：

私からは以上です。

土屋：

ありがとうございます。

楠本先生、お願いします。

楠本：

楠本です。よろしくお願いします。

僕はグラバア先生に質問というよりは、グラバア先生が以前、南山短期大学人間関係研究センター紀要に書かれたことを取り上げながら、ラボラトリー方式の体験学習におけるカウンセリングの位置付けについて、ちょっと話してみたいなと思っています。

グラバア先生は「そんなこと私、書いたっけ？」とさっきおっしゃっていましたが、南短の人間関係研究センターの紀要で、2号と3号の合併号なんです、かなり初期の頃のお話でグラバア先生が書いていらして、人間関係科における人間関係各論という授業に援助法というのがあって、援助法の中の実際の授業名としては「カウンセリング」という授業が一番長く続いたんだということを紹介してくれているんですね。そんな中で、1970年代から80年代ぐらいにかけての人間関係科におけるカウンセリングの位置付けについてグラバア先生は書いていらして、ちょっと読むと、グラバア(1985)は、「創設期、人間関係科の目指すことの1つとして変革体(change agent)の育成ということが

あり、これが大上段に構えたものならば、カウンセリング的なかわりができる人の育成というのはそれを下から支える構造であったのではないかと思われる」というふうに言っています。チェンジ・エージェントとして、「今ある関係のあり方を切りくずし、変化させ新しい形をもたらし力と、カウンセリング的関わりということで、あるがままを受容し共感的に理解するという、今ある関わりそのものを支える力の、以上2つの働きがカリキュラムの中に同時にあることに意味があったのではないだろうか」というふうに書かれていらっしゃるんですね。

グラバア：

はい。

楠本：

僕もこのグラバア先生の本を読んだことを読んで、僕の実感ともフィットするなというふうに思ったので引用させてもらったんですけど、やはり人間関係科の体験学習はすごく幅が広くて、中村さんは組織開発が一番の専門だと思んですけど、僕はカウンセリングなので、個人の尊重だったりお互いの関係の尊重だったり、せいぜい小グループによる体験学習であるTグループまでが僕の専門、守備範囲なので、そういう中で人間関係科の学び、あるいは体験学習の学びにおいて、カウンセリングってどういう位置付けなんだろうということや、やはり考えざるを得なかったところがあるんですけど。まさに一方でチェンジ・エージェントとして環境を変えていこう、社会を変えていこうというような動きを、たぶんグラバア先生の方々は、本気でそれを目指していたという印象があって、僕はそこまで（筆者注：同じ熱量では）ようせんわと思っているところがあるんですけど、あの年代の人たちって本気でこれを思っていたんだよなというようなことは、後から入った人間として、つくづく思うんですね。そういう力があって、熱があった、動きがあった。その一方で、それを補完するものとして、本当に今の個を大事にする、あるいは目の前にいるその人を大事にする、自分を大事にしてもらうということを身に付けてもらう、あるいは1対1の丁寧な関係の中で相手の人が成長していく、それをサポートするというような、そんなカウンセリングの発想というか大事にしているものというのが、やはりラボラトリー方式の体験学習においても人間関係科においても心理人間学科においても、大事な要素の1つなんじゃないかなと僕は思う、ということをお話したくなっています。

グラバア：

チェンジ・エージェントを一番真面目に一生懸命語られたのは、私の理解ではメリット先生だと思うんです。でも、メリット先生は同時に、色紙によく「一隅を照らせ」と書いていらっしゃるんです。まさにそういうことなんじゃないかなと、両方ともメリット先生は本気だったと思います。

楠本：

ありがとうございます。

中村：

ちょっと付け加えさせていただけると、Tグループ自体のスタート、アメリカでTグループが始まったときのトレーナーたちの目的は、チェンジ・エージェントの育成だったんですよね。グループの中で、そのグループでどんなプロセスが起こっているかということを診断して働きかける、そういう力をTグループの中で付けた人が、社会とか組織とかでより良い民主的な社会や組織をつくっていく、みたいなことがあったんですけど、短大の初期って、チェンジ・エージェントを私たちは育てているんだということがかなり合言葉になっていたというか、メリット先生を中心に語られていた感じですか。

グラバア：

そうですね、人関通信のタイトルに「チェンジ・エージェント」とメリット先生が書いたものがありますし、メリット先生は本当にフィールドワークというか、もっと本当に外に行って、実際の社会の中で、ということはおっしゃっていたので。

中村：

短大を、特に初期に卒業した人たちは、チェンジ・エージェントの役割を担いながら社会で苦労したんだろうなとちょっと思いながら。でも、そののね、どういう人たちを育てたいのかというようなことをベースに、Tグループの中の価値観というのがつながってきたんだなということを改めておっしゃって。ちなみに、うちのゼミの目的は「チェンジ・エージェント力を高める」ということで、一応歴史につながっております。

土屋：

ありがとうございます。

どうコメントしたらまとまるのか、まとまらないのか、まとまらなくてもいいかなと思いながらおりますけれども、私からも少しコメントをさせていただきたいと思います。

「人間関係論」という言葉とか「人間関係」ということが、すごく前に出て語られていたなと思っています。その一方で、中野清先生がどこかで書かれていたものを読んだんですけど、すごく模索して進んできたけれども、最終的にこういう人間関係が良いんだという形を提示できなかったというような書き方をされているシーンがあって、それがすごく印象的だったんですよね。

では、人間関係科とか人関センターが取り組んできたことは何なんだろうという話です。「学ではない」というのもそうだなと思ったんですけど、その中で実はこういうことかなと分かったのが、「人間関係の学び方」というのをずっと模索してきたんだということなんですよ。言葉で言う人間関係学習、漢字で言う人間関係学習論とか、どういうふうに人間関係を学んでいくのかと

いうことを非常にたくさん模索してきたし、それは今でも有効だしというようなことにハッと気づいた瞬間があり、今もそうだなと思っております。その中で今回新しい本を書いていこうというところ、それこそ津村先生、山口先生、お二方が鬼籍に入られた中で、今いるセンター員でひとつ本をつくっていくということが大事じゃないかということで、やってきました。

そのときに、やはり書けたこともあれば、書けなかったことというものすごくあるなというのはあるんですよね。その中で1つあるのは、直接的にスピリチュアリティのこととか宗教性に関することとかというのは、それぞれには残っているし大事だと思うんですけど、すごく中心に据えて書くというメンバーが、今は人間関係センターにはいなかったなあという話は意識しているし、そのことは新しい本には書けなかったけど大事にしていることとして持っていたいなと思います。

人間関係トレーニングの本の「はじめに」の初版のところを見ると、もう、すぐに「キリスト教的価値観に基づいて」というのがバーンと出てくるんですよね。そういうことがある中での営みということなのか、そうではないのかというのは、意識しないといけないだろうなと思ったりしています。その中で今の時代をどんなふうに捉えるかということなんですけども、2000年以降だったりいろいろなことの中でアメリカを見ても、分断であるとか格差であるとか、そういったことが中心になってきたり、今のいろいろなことがまたどんどん進んでいっていると思います。

そのときに思い出すのが、グラバア先生と何かお話ししていたときに、ラボラトリーの体験学習ですごく大事なだとそれに取り組みながら思ったりするのは、人ってこんなに違うんだ、一人ひとりというのはこんなに違うんだということを感じるんだと話されていたことです。例えば、ある人が大事にしているものも、ある人にはそうじゃないとか、そういうレベルだけではなくて、もっとそもそもの見方とか捉え方とか、そのレベルからこんなに違うんだという、想定もしていなかったことに、この場があることによって触れていくことができるという、そんなことを話されていたのがすごく印象に残っています。

先生、よければ何か話されますか。

グラバア：

いいですか。

土屋：

はい、どうぞ。

グラバア：

今の、スピリチュアリティということと関連があるかなと思って、ちょっと話をさせていただきます。

皆さんに差し上げた資料の2の1を見ていただきたいんです。ここに「ジル・ボルト・テイラー博士のTEDの講演から得た体験学習への新しい光の当て方」

というのを書いてみました。どんなものでもいいかなということで書いてみました。

突然ですが、ちょっと読んでみます。「そのような右脳優位の状態を」と書いてあって、突然ですよ。これはどういうことかということ、彼女はハーバードの新進気鋭の脳科学者なのですが、彼女自身が脳梗塞をやって、左脳の機能をどんどん、どんどん喪失の奔流に流されるわけです。つまり、言葉もしゃべれない、言葉も理解できない、認知もできない。そういう状態になって、左脳の機能が本当にシャットダウンした状態なんです。しかし、彼女はこう言うんです。「なんて幸せなの。素晴らしい。至福のとき。ただ唯一感じられるのは、周囲の大きなエネルギー。そして、自分はそのエネルギーとつながっている」。自分の手の境界と壁の境界やなんかが混じって分からなくなっている状態なんです。「人間という兄弟姉妹、頭のおしゃべりはやみ、静かで平安。今までの何十年のストレスや心の重荷から解放され、仏教だったら悟りの世界、極楽浄土と言うでしょう」と表現して、さらに、こうした体験がどんなに人々の役に立つかと気づいて、彼女はそれをエネルギーとして、8年間懸命にリハビリに励みました。そして、彼女は言語を取り戻し、TEDの講演に至ったわけですね。「さて、私たちは何者なのでしょう。私たちはこの世界でどんな人間でいたい。瞬間、瞬間、今ここで選ぶ力があります。右脳意識に歩み寄ると、そこでは私は宇宙の生命力です。私をつくる50兆の細胞の美しい分子が一体となった生命力の塊です。あるいは左脳に行って、1個の人間としてあることを選べます。大きな流れや他の人とは別個の存在です。私はジル・テイラー。理知的な神経解剖学者です。この2者が、私たちの中にある私たちなのです。皆さんはいつ、どちらを選びますか」。それで、ここがすごく盛り上がるところで、「私たちがより多くの時間を、右脳にある深い平安の回路で生きることを選択すれば、世界はもっと平和が広がり、私たちの地球はもっと平和な場所になると信じています。そして、これは広める価値のある考えだと思うのです」ということで、もうすごいスタンディングオベーションだったのです。そして、ここで私も感動しました、彼女の言葉を直接映像で見て。しかし、多くの人は、本当に拍手をした人は、「でも、右脳意識に歩み寄るというのはどういうことか、具体的にどうしたらいいの？」とすごく考えたに違いないと思ったんです。

それで私の答えなのですが、それはまさに1973年からやってきた教育の冒険そのもの、人間関係研究センターでやり続けていることそのものだ。そうか。そして、この私たちがやってきたことは、平和教育でもあるんだと。そのときに本当に、私には新しい光が差したような気がしたんですね。もっと具体的にどういうことかというのは、資料2-2にCopilotに要約させているので、皆さんどうぞそれを読んでみてください。

スピリチュアリティということも書いてあるのですが、やはりそれは精神性と理性との素晴らしい懸け橋になっているという言われ方をしています。

最後に一言だけ。私としては、提案できるものとして「今ここに」というキーワードを、もう一度大切にさせていただいたらどうかと。それはTグループの中でということでは全然なくて、教育全体としてということです。意外かもしれないんですが、今回のセンターのカタログには「今ここ」というフレーズはないんですね。「今ここに」、これは人関の卒業生のキーワードのアンケートを取ったときに、絶賛第2位でした。

第1位は「ふりかえり」です。そして、3位は「フィードバック」。まだまだありますけど、「人間の尊厳」とか、そういうものがあります。

以上です。

土屋：

ありがとうございます。

そろそろお時間ですが、今振り返ると、私も人間関係の学び方の中で、ラボラトリー方式の学び方って何だろうというふうなことを振り返ったときに気づいたのが、リフレクションとふりかえりということだけだと、ほかでもあったりするんですよね、看護教育だとか、やったことに関して個人で振り返るとかいうことがあったりするんですけど、一緒に過ごした、関わりを持った、その人たちと一緒にふりかえる、ともにふりかえるというのは、なかなかほかではない枠組みだったなと思っています。まさに、「今ここ」で体験したことに関して一緒にふりかえっていく、そこにはフィードバックも入ってくるでしょうし、その中でともに生きるということを探っていくんだ、そのようなことの実践が、今も、これからも続いていくことになると思っています。

では、これで座談会の時間は終了としたいと思います。皆さま、本当にどうもありがとうございました。

私たちは今、歴史の中のどこに立っているのか

(資料1)

ライフスタイルの変化	年	国連の活動と アメリカの社会活動	体験学習の成立過程
●生存指向ライフスタイル (Survive oriented Life-style) キーワード：衣・食・住 経済力・学歴 転換点 ●成長指向ライフスタイル (Growth oriented Life-style) ＜人間の尊厳のために＞ キーワード：自己実現 A.マズロー 自己開示 S.ジェラート 対話 M.ブーバー 私であること 個であること 共にあること 物質的な豊かさ 精神的な豊かさ ●いのち指向ライフスタイル (Life oriented Life-style) キーワード：公害・環境破壊 レイチェル.カーソン 共生 黒川紀章 宇宙船地球号 R.バックミンスター・フラー ホリスティック アプローチ	1914 1939 1940 1945 1948 1950 1960 1968 1970 1975 1879 1981 1993 1998 2001 2009	第一次世界大戦開戦 大恐慌 第二次世界大戦開戦 国連発足 世界人権宣言採択 <u>黒人解放運動</u> <u>学生運動</u> 国際人権年 キング牧師暗殺 ローマ会議「成長の限界」 <u>女性解放運動</u> ウーマンリブ フェミニズム 国際婦人年 国際<u>児童</u>年 国際障害者年 <u>マイノリティー</u> 障害者・少数民族 セクシュアリティ (LGBT) <u>先住民</u> 世界の先住民族国際年 世界人権宣言50周年 国連文明間の対話年 オバマ氏大統領就任	(1924~32 ホーソン実験) 1941 日本参戦 (対米) 1946 K.レヴィン・K.ベネ コネチカットにて ワークショップ 1947 Tグループ 誕生 1958 日本における 第1回 Tグループ 1962 立教大学キリスト教 教育研究所 (JICE) 設立 1968 日本にて大学紛争多発 1968 南山短期大学 英語科 創設モットーとして 人間の尊厳のために 「HOMINIS DIGITATI」 が掲げられる 1969 立教大学 ロックアウト 1971 日本における 第1回学生 Tグループ 1973 南山短期大学 人間関係科創設 1977 人間関係研究センター 設立 1998 国際医療センター JICA に協力 1999~ パキスタン(4回)・ カンボジア・バングラ ディシュに、HRT の導入 2000 南山大学 心理人間学科創設 人間関係研究センター 設立

2025.7.05

南山大学人間関係研究センター25周年記念 & 『人間関係の学び方』出版記念 座談会
(資料 2-1)

ジル・ボルト・テイラー博士の TED 講演から得た体験学習への新しい光の当て方

そのような右脳優位の状態を「なんて幸せなの。素晴らしい。至福の時、唯一感じられるのは周囲の大きなエネルギー、そして自分はそのエネルギーと繋がっている。人類という兄弟姉妹。頭のおしゃべりは止み、静かで平安。今までのストレスや心の重荷から解放され、仏教だったら悟りの世界、極楽浄土というでしょう」と表現し、更に続ける。

この体験がどれほど大きな恵みとなるか、生きている人たちに、どれほど深い、強い洞察を与えうるか気づき、それが回復の力になりました。(1996 年発症、8 年のリハビリ)

さて私たちは何者なのでしょう。私たちはこの世界でどんな人間でいたい瞬間瞬間、今ここで選ぶ力があります。右脳意識に進み寄ると、そこでは私は宇宙の生命力です。私を造る 50 兆の細胞の美しい分子が一体となった生命力の塊です。

あるいは左脳に行って、一人の一個の個人としてあることを選べます。大きな流れや他の人とは別個の存在です。私はジル・テイラー、理知的な神経解剖学者です。この二者が私の中にある“私たち”なのです。皆さんは、いつ、どちらを、選びますか？

私たちがより多くの時間を、右脳にある深い平安の回路で生きることを選択すれば、世界はもっと平和が広がり、私たちの地球ももっと平和な場所になると信じています。

そしてこれは広める価値のある考えだと思ったのです。

Q 多くの人は「でも、どうやって右脳意識に歩み寄るの？」と思ったに違いない。

A：私は答えを知っている。それはまさに、1973 年からやってきた「教育の冒険」

そのもの、人間関係センターでやり続けていることそのものだ。

そうか、そしてこれは 平和教育でもあるんだ。

大切にしたいキーワードの一つ「今ここ」

1, ジョーゼフ・キャンベル： 神話学者

人間が本当に求めているのは【今生きているという経験】だ

J. キャンベル、B. モイヤーズ著 『神話の力』 早川書房 1992 年

2, ジョン・カバト＝ジン： マサチューセッツ大学医学部名誉教授

ストレス低減クリニック創設者

「今」に精神を集中させる

3, エックハルト・トール：

いま、この瞬間、ここにあるとき、愛、喜び、平和を経験します

エックハルト・トール著『さとりをひらくと人生はシンプルで楽になる』

徳間書店 2002 年 原題 The Power of NOW

*参考文献 グラバア俊子 『五感の力』 創元社 2013 年 152 頁～157 頁

2025.7.05

南山大学人間関係研究センター25周年記念 & 『人間関係の学び方』出版記念 座談会
(資料 2-2)

グラバア俊子のリクエスト

『2008年2月にジル・ボルト・テイラー博士がTEDで講演した内容を整理し、彼女が、彼女の体験から広める価値のある考えだと思った内容の要約を作成して下さい。』

Copilot の発言

ハーバード大学の脳科学者ジル・ボルト・テイラー博士がTEDで行った講演は、彼女自身が脳卒中を経験したことに基づく、非常に個人的かつ深遠な内容でした。以下に、その講演の要点と、彼女が「広める価値がある」と考えたメッセージをまとめます。

講演の要点

- **脳卒中の体験** 博士はある朝、脳卒中を発症し、左脳の機能が徐々に停止していく過程を、脳科学者として冷静に観察しました。言語、運動、自己認識といった機能が失われていく中で、彼女は右脳の意識だけが残された状態を体験します。
- **右脳の世界の感覚** 左脳の「内なる声」が沈黙したとき、彼女は自分の身体の境界が曖昧になり、周囲のエネルギーと一体化するような感覚を得ました。それは「ラ・ラ・ランド」と彼女が呼ぶ、深い平安と幸福に満ちた世界でした。
- **左脳と右脳の違い** 左脳は言語、論理、過去と未来を扱い、「私」という個の意識を生み出します。一方、右脳は現在の瞬間に生き、感覚とエネルギーを通じて世界とつながる意識をもたらします。

博士が広めたいと考えたメッセージ

テイラー博士は、より右脳の意識に歩み寄ることで、私たちは内なる平和と他者との繋がりを感じながら生きることができ、世界はもっと平和になると提案しました。

この講演は、科学とスピリチュアリティの橋渡しとも言える内容で、今も多くの人に深い感動と気づきを与えています。

テイラー博士が伝えたかったのは、人間の脳には異なる視点をもたらす回路があり、**どの視点に身を置くかによって、世界の見え方も、自分自身のあり方も変わる**ということです。たとえば…

- **左脳モード**で生きれば、過去や未来を考え、分析し、自己を区別して判断する日常が中心になります。これは社会生活に欠かせない一方で、ストレスや不安、孤独感を抱えやすい側面もあります。
- 一方、**右脳モード**で生きると「今ここ」に意識が集中し、感覚やつながりを強く感じられます。自己という枠を超え、内的な平安や愛、喜びを感じ易くなるのです。

博士は、脳卒中を通じて右脳の意識だけになったとき、「私は生きている」という深い安らぎを体験しました。だからこそ、**意識的に右脳の回路を活性化**することが、私たちの人生に調和と意味をもたらすと考えたのです。

これは、目の前の現実が変わらなくても、**自分の捉え方と反応は自分で選べる**ということでもあります。

*参考文献 ジル・ボルト・テイラー「奇跡の脳」 新潮社 2009年

2025.7.05

南山大学人間関係研究センター25周年記念 & 『人間関係の学び方』出版記念 座談会
(資料3)

★いのち指向ライフスタイルにおける、ホリスティック・アプローチ

ホリスティック教育とは、人間を「知的・感情的・社会的・身体的・創造的・精神的な存在として総合的に育む」教育アプローチです。

特徴

- ・ **全人的成長**：学力だけでなく、社会性や自己肯定感、協働スキルなど多面的な成長を重視
- ・ **体験学習重視**：教室の枠を超えた自然体験やプロジェクト学習で「現実の課題解決」を学ぶ
- ・ **統合カリキュラム**：STEAM教育(科学・技術・工学・芸術・数学の統合)など、複数領域を横断的に学ぶモデルが代表的



「育む今ここに」

人間関係科が共にあった記念として、南山短大の中庭に建てられた像（現在はR棟横に）

■■ 特集「人間関係の学び方：その先にあるもの」

「今ここ」と「共にある」ことが育む在宅診療のまなざし

ー ラボラトリー方式の体験学習が日常実践に与えている影響 ー

堀 越 洋 一

(堀ノ内病院 在宅診療科)

楠 本 和 彦

(南山大学)

要 旨

本稿では、在宅診療の現場においてラボラトリー方式の体験学習が果たす役割について、実践者の立場から論じた。「今ここ」に生まれる感情への気づき、他者と「共にある」という実感、死にゆく人から力を受け取る経験などを中心に、体験学習の視点が日常の臨床実践や人間関係の質に与える影響を具体的に考察した。また、これらの体験と実践を山口真人の『人間関係の変革』の理論的枠組みと照らし合わせながら、在宅診療がいかに関係性を中心とした学びと変容の場となるかを明らかにした。

キーワード

在宅診療、ラボラトリー方式の体験学習、今ここ、共にある、終末期ケア、関係性、社会的感受性

1. 「今ここ」に生まれる感情への気づきと尊重

ラボラトリー方式の体験学習（以下、体験学習）では、グループの中で自らの内に生じる思いや感情、身体感覚に注意深く意識を向け、それを言語化し共有することが重視される。このプロセスを通じて、自らの反応の根にある意味や価値に気づくとともに、他者の存在をより立体的に感じる感性が養われていく。

在宅診療の現場では、死が間近に迫る状況にしばしば立ち会う。例えば、苦しみや不安を抱える患者や家族と向き合うとき、私（堀越）はまず自らの胸に生まれている感情に気づくよう努めている。それは悲しみ、戸惑い、無力感、あるいは温かな共感のようなものであり、それに気づくことで自分のまなざしが定まり、相手の存在に対してより真摯に向き合うことが可能になる。

このような感情の動きや場の雰囲気への気づきは、山口（1989）が述べる「社

会的感受性」¹、すなわち「関係のありように気づく能力」に通じている。在宅診療のチームにおいては、こうした感受性の豊かさが信頼形成の基盤となり、患者・家族へのまなざしにも深みを与える。

2. 「共にある」という関係の質

体験学習においては、グループメンバー同士が互いをケアし、ケアされる体験を通じて、関係性が深まっていく。その過程で「共にある」という関係の質が育まれる。役割や立場を越え、相手の存在にまっすぐ向き合い、自らもそこにさらけ出されるという経験は、深い信頼と安心感をもたらす。

在宅診療の現場においても、この「共にある」という実感はしばしば立ち上がる。あるがん末期の患者が、身体的な治療がほとんど尽きた状態で、私の訪問時に「あなたが来てくれると安心する」と語ってくれたことがある。そのとき私たちは、言葉を多く交わさなくとも、静かな時間を共に過ごし、互いにその場に存在しあっていた。

これは医療行為というよりも、人と人との共に在ることそのものの力を感じた瞬間であった。ブーバー（1923）が述べる「我—汝」的な関係性、すなわち相手を対象ではなく存在として迎えるまなざしこそが、この在宅診療の場で立ち上がっていたのだと私は感じている。

3. 生き切る姿から力を受け取る

私が在宅診療を通じて学んだ大きなことの一つは、「支援する者が支援されることがある」という事実である。死にゆく人の生き方に触れることで、自らの在り方が揺さぶられ、照らし出される経験を幾度となくしてきた。

たとえば、ある認知症で寝たきりの母を長年介護していた75歳の男性の姿がある。その献身的な介護の背景には、母がシングルマザーとして彼を懸命に育てたという深い感謝の思いがあった。母の死に際して、家族が語ってくれたその物語に私は強く胸を打たれた。

死の近くにある時間は、存在の本質に触れる時間であり、それゆえにこそ支援する者もまた深く影響を受け、人間としての在り方を問い直される。終末期における関係性のあり方は、山口（1989）が強調するように、人間が「関係として」生きているという実存的な事実を明らかにするものであり、それゆえ死は、関係を深める時間として立ち現れる。

¹ 山口（1989）は、感受性とは“気づき”の3領域（外部世界、自分の内部世界、空想活動、Stevens, J.O., 1971）で得られる事実（データ）に気づく能力であるとする。特に、チームで仕事をしたり、対話をしたり、他人と共に時を過ごすといった社会的な相互作用のある場での自分自身や他者の言動や感情や想像など、人間関係のプロセスの中で生じるさまざまなデータにありのままに気づく能力を社会的感受性と呼び、節のタイトルを「社会的感受性＝関係のありように気づく能力」としている（p.163）。

4. チームの「生きた学びの場」としての在宅診療

在宅診療は多職種によるチームで提供される。医師、看護師、ケアマネジャー、薬剤師、事務職など、それぞれが異なる立場に関わりながら、一人の患者の生活を支えていく。

私は、チームの中でそれぞれの「持ち味」に意識を向けることを大切にしている。相手の特徴や感性、その人にしかない関わり方の魅力やくせを味わうように関わることは、チームの関係性をよりしなやかで有機的なものに変化させると感じている。このことは、Tグループやエンカウンター・グループなど「グループ・アプローチ」における人と人の相互作用に通じており、在宅診療の現場もまた、相互的な気づきと変容が起こる「生きた学びの場」として機能していると言える。

5. 「今ここ」にひらかれた日常の営み

日々の暮らしにも、「今ここ」に身を置く実践は息づいている。私にとってそれは、例えばチェロを弾く時間であったり、誰かのために料理をつくる時間などである。チェロに向き合うとき、音程やリズムに加えて、弓の圧や角度、肘の高さといった身体感覚を意識する。微細なずれが生じていると感じると、それを手がかりに自らを調律し直す。音が定まらない瞬間に未熟さを防衛するのではなく、気づきへの入口として内に生じた感情や感覚を否定せずに尊重しようとする。料理もまた、「今ここで」私が食べたいものと相手が食べたいであろうものの双方を思い浮かべて、自分の思いを抑圧はしないものの相手の喜ぶ顔を優先するという微妙なバランスも味わいつつ、完成した一皿と一緒に味わうという「共にある」時間である。趣味や生活の時間は、「今ここ」の自己内プロセスを意識したり、自己中心から関係中心へと重心を移したりする小さな練習でもあり、「今ここ」にひらかれたまなざしを、日常において反復して身につけていく営みである。

こうした日常の営みは、体験学習を通して培った感性を日々活かす小さな実践と言えるかもしれない。自分自身の内側に生まれた感覚や思いを否定せず受け止め、それを手がかりに他者に開いていく営みは、臨床の場だけでなく、暮らしそのものの質をも変えてくれる。

6. 関係性の変容

山口（1989）は、関係性の変容という用語を使用していない。しかし、関係性の変容と表現することが適する記述が以下に記されている。

- ① Tグループ体験を通じて、一人の学生が他者を“対象”としてではなく、“関係の中にある存在”として捉え直すプロセスが描かれている。山口はこの体験を、「人間関係の本質」への目覚めとして、ブーバーの「我—汝」概念やロジャースの「実存的出会い」の文脈で理論づけている（pp.160-161）。こ

の体験は、関係性の質の変容そのものである。

- ② ブーバーの理論を引きながら、現代社会において人間が「我—汝」的な関係から「我—それ」的な関係へと堕していく傾向を示し、あらためて関係性を再構築すること＝変革として位置づけている² (pp.165-166)。

この視点こそが、関係性の変容の核を成している。山口（1989）における、これらの関係性の変容という視点は、個人の主観的気づきに始まり、他者との相互的関係性においてその質が再構成される過程を意味しており、教育・医療・組織開発において本質的な変革の土台と考えることができる。

7. おわりに

ラボラトリー方式の体験学習は、私にとって技法や知識ではなく、世界との向き合い方そのものを形づくる学びである。「今ここ」に生まれた感情に耳を澄ませ、相手の胸の内に関心を寄せ、「共にある」ことの力を信じること。この姿勢は、在宅診療の実践を支える根幹であると同時に、私自身が人としてどう生きるかを照らし出してくれる羅針盤でもある。

山口（1989）において示された社会的感受性、我—汝的な関係性、関係性の変容といった視点に照らしても、在宅診療は単なる医療技術の提供を超えて、人と人とが深く出会い直す場である。今後も、体験学習で育まれたまなざしと理論的な理解の双方を携えて、丁寧に人と関わる実践を重ねていきたい。

備考：

本論は、堀越が主に執筆した。本論における「私」は堀越を指す。楠本は、堀越が作成した原稿に、意見を述べ、注を挿入し、論文としての形式を整えた。

引用文献：

Buber, M., (1923). *ICH UND DU*, Insel Verlag.

Buber, M., (1932). *ZWIESPRACHE*, Schocken Verlag.

(ブーバー, M., 植田重雄 (訳) (1979). 我と汝・対話 岩波文庫)

Stevens, J.O., (1971). *Awareness: exploring, experimenting, experiencing*, Real People Press.

(スティーブンス, J.O 岡野嘉宏・多田徹佑・リード恵津 (訳) (1982).

気づき—ゲシュタルト・セラピーの実習指導書— 社会産業教育研究所)

山口真人 (1989). 人間関係の変革 人間関係 (南山短期大学人間研究センター), 6, 160-166.

² 山口（1989）は、真に人格的な出会いを求めて、“汝”に対して“我”として応答したいがゆえに、人間関係を変革しようとするならば、それは関係的人間として「汝よ」と呼び掛ける「関係」になろうとする変革の姿なのである、としている (p.166)。

■■ 特集「人間関係の学び方：その先にあるもの」

ラボラトリー方式の体験学習における 精神力動的視点の変遷：個人・集団の無意識の扱い¹

土 屋 耕 治

(南山大学人文学部心理人間学科)

要 旨

本論考は、ラボラトリー方式の体験学習における精神力動的視点の変遷を検討した。『感受性訓練』では精神科医による精神力動的視点が明示されていたが、『人間関係トレーニング』では“枠”の提示に留まり、精神力動的視点は顕在化されていないことが示唆された。一方、エドガー・シャインは対人関係学派の精神分析の訓練を受けており、その視点は『プロセス・コンサルテーション』に反映されていることが伺えた。シャインの影響から氷山図を用いたグループプロセスの表現などが扱われるようになり、『人間関係の学び方』では精神力動的視点が再び明示的に紹介されるようになった。精神力動的視点を持つことで、グループで起こる現象やネガティブ感情をより深く理解できることが期待されるが、その使用には慎重さが求められることが論じられた。

キーワード

ラボラトリー方式の体験学習、精神力動、個人・集団の無意識

1. 背景

1.1 本論考の目的

本論考では、ラボラトリー方式の体験学習において精神力動的視点がどのように変遷を辿ったのかについて、個人、また、集団の無意識はどのように扱われてきたかをふりかえりながら、今後の位置づけについて検討を行う。具体的には、Tグループの理論的検討が紹介されている『感受性訓練』、また、『人間関係トレーニング』における扱いをふりかえる。そのうえで、『人間関係の学び方』における記述を整理する。最後には、精神力動的視点を持ち、扱っていくことのメリットと留意点について、論点を述べる。

¹ 本研究は、2025 年度南山大学パッヘ研究奨励金 I-A-2、ならびに JSPS 科研費 22K03040 の支援を受けた。

1.2 精神力動的視点とは: 精神分析とはどのようなものか

本論考で扱う精神力動 (psychodynamics) 的視点とは何を指すかについて述べていきたい。精神力動的視点とは、精神分析 (psychoanalysis) の概念を用いて、個人や集団の言動や内的過程を理解しようとすることを指す。具体的には、無意識、防衛規制、基本的想定といった精神分析の文脈で用いられる概念を用いて、説明や理解を試みることを指す²。本論考では、無意識の扱い方について最初に論じていく。そのなかでは、氷山図を用いた説明に精神分析的見方が存在することを見出す。

まず、精神分析とは何かについて紹介したい。日本精神分析協会が「精神分析とはどのようなものでしょうか」というタイトルでわかりやすい説明を掲載しているため、長くなるがここに紹介したい。

精神分析は20世紀のはじめにウィーンでジークムント・フロイトによって始められました。それは人間のところが意識的なところと無意識的なところの両方から成り立っているという考えを基礎にしています。私たちは誰でも、ある種の無意識的なとらわれのなかで生きています。そのとらわれが大きすぎると、苦しくなり、ゆとりを失い、ときにはこころの病になります。

精神分析は特別なやりかたで、分析を受ける方と精神分析家とが交流する実践です。分析を受ける方がしだいに自分自身を無意識的な部分も含めてこころの底から理解し、とらわれから自由になり、生き生きとしたこころのゆとりを回復させることをめざしています。

分析を受ける方は寝椅子もしくはベッドのようなものに横たわり、自分のこころに浮かんできたことを思いつくままに話していくように、といわれます。分析家は分析を受ける方から見えないところにいて、いっしょに時をすごし、分析を受ける方のこころのありかたを思いめぐらし、ときにはそこで考えたことを分析を受ける方に伝えます。一回が45分ないし50分のこうした時間が週4回か5回定期的にもたれるのが、フロイト以来の精神分析のやりかたです。

このような時間を積み重ねるうちに、分析を受ける方のこころの世界、無意識の世界がその方のお話の内容や分析家との関係性の中に現れてきます。訓練された分析家はそうした世界に触れ、それを体験し、理解していきます。そうした分析家の力を借りながら、分析を受ける方も、自分の無意識の世界を十分にこころから体験し、やがて人生について本質的な、気持ちのこもった気づきを手にするのです。

お気づきのように、多くの他の心理療法やカウンセリングよりも、精神分析はとても密で深い交流を基本にしています。そのなかで分析を受ける方が動かすところや気持ちはとても大きなものです。分析がうまくいく場合、そのようなことを基礎にして、分析を受ける方はそ

² Psychodynamics (サイコダイナミクス) は、心理力動と訳出されることもある。

れまでのその方のありかたを超えていくことが可能になるのです。

2.『人間関係トレーニング』における無意識の扱い： コンテンツとプロセス

2.1 無意識の扱い

南山大学をはじめとしたラボラトリー方式の体験学習においてテキストとして用いられてきた『人間関係トレーニング』で、木村 (2005) は「成長するための“枠”—ラボラトリートレーニングのひとつの意味—」で、無意識の心的作用について触れている。ユング派の心理療法家カルフが開発した箱庭療法の基本的な治療要因のひとつとして“自由で保護された空間” (freien und zugleichgeschützten Raum) の概念に言及し、「こうした空間的、心理的な枠の守りは、その中で人が普段実現できないようなことを試みてみたり、自分でも気づかない心の深い層を表現することを促進するような機能を果たしている」(p. 17) と述べ、ラボラトリーという“枠”の持つ意味に言及している。

そのうえでTグループについて、下記のように述べている。

(略) これまで生きてきた枠組みでは通じない場におかれるとき、人は今まで気づくことがなかったみずからの未知の部分に動員せざるをえなくなります。つまり、こころの無意識の部分が動き始めるのです。そうしたとき、各人の中に何が起こり、どんな反応をし、どういった動きをとろうとするのかはたいへん興味深いことです。それはその人が未知のみずからへの気づきを深め、成長していくひとつの重大なステップとなるからです。

Tグループトレーニングの仕事のひとつは、参加者がその中で自由に、十分に自分を試し、表現してみることができる新しい“枠”を提供することであるといえます。そうするとき、それは各人の無意識を揺り動かす場となり、その人の新たな可能性が浮かび上がってくるきっかけとなるのです。(p. 19)

このように「無意識」という言葉を用いつつ、Tグループの体験について言及している。

さらに、章の最後においては、ラボラトリー方式における体験学習のことを、無意識が動き出す“枠”を持った治療教育であると述べている。

人間がもつ自己治癒力の力を信じて待つのは心理療法の最も基本的な姿勢です。体験学習の実践は、無意識が動き出す“枠”を用意し、より高次の自己統合へと進んでいく場を提供する、という意味で、治療教育 (治療的配慮をもった教育) であるといえるのではないのでしょうか。(p. 20)

また、他の箇所でも下記の通り、無意識について言及しているものの、心の構造に関する具体的な理論については、下記のように「説明は省略」されている。

人の心の世界を単純に図式化すると、図2のように説明できます。普段われわれは、自分で意識的に把握できており、自分の主体性でコントロールできる範囲での心の部分 (A) に頼って生活しています。これを精神分析の分野では意識の世界とよびます。それに対し、自分が気づいていない、心の深い部分としての無意識の世界 (B) があります。こうした心の構造については精神分析各派の数多くの文献や研究があるのでここでの説明は省略します。(p. 18)

Figure 1.『人間関係トレーニング』における無意識の紹介（木村, 2005, p. 18）

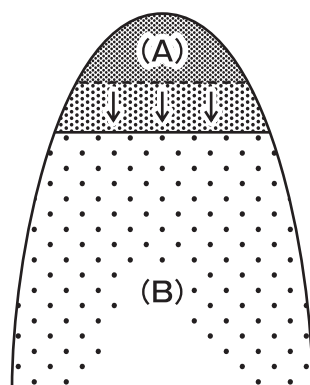


図2 心のしくみ

2.2『人間関係トレーニング』におけるコンテンツとプロセス

もう一点言及しておきたいのは、コンテンツとプロセスの関係と、その表現である。『人間関係トレーニング』では、11章「プロセスとは何か」(津村, 2005) において、コンテンツは、グループの話題とか、課題や仕事などの内容的側面であるのに対し、プロセスは、グループの中で起こってくる人と人との関係的過程、と述べている。実習の例では、実習中の中での出来事と、「実は、…」ということで、記述されるものとしている。

また、12章「グループプロセスで何を見るか」(星野, 2005) では、プロセスを「人と人との間で起こっている事柄」とし、「関わりの中でつくりだしている事柄」として、グループ内のコミュニケーション、リーダーシップのありよう、グループの規範(ノーム)、意志決定の型、グループの目標、時間管理、仕事の手順化(組織化)、グループの雰囲気을挙げている。

近年の人間関係研究センターの講座では、グループにおけるコンテンツとプロセスの対比を氷山図を用いて説明しているが、この書籍において、そのような表現はなされていない。

3.『人間関係の学び方』における精神力動的視点

3.1 臨床心理学からの心的モデル表現の提示

『人間関係の学び方』では、精神力動的観点、また、臨床心理学の心的モデル表現がなされている。楠本 (2024) は、「ラボラトリー方式の体験学習におけ

るカウンセリングの位置づけや影響」という章で、臨床心理学や心理療法、また、様々な理論や概念を紹介するのに先立ち、『感受性訓練』の記述についても言及しながら次のように述べている。

ラボラトリー方式の体験学習は、教育や人間関係におけるトレーニングですので、心理的・精神的治療ではなく、それらとの差異・区別が明確に意識されています（Bradford et al., 1964 三隅訳 1971, p. 17；山口, 2005, p. 12）。

しかし、ラボラトリー方式の体験学習が臨床心理学やカウンセリングや心理療法と無関係かという点、そうではありません。臨床心理学はラボラトリー方式の体験学習の草創期には、研究面で関与していました。その後、ラボラトリー方式の体験学習が継続的な影響を受けてきた社会実践の専門分野として、集団的ないし個人的カウンセリングや心理療法の発展が挙げられます。また、方法論に関して、初期のラボラトリー方式の体験学習でとくに強調された変革に関するアクションリサーチは、後に臨床的モデルによって補強されてきました（Bradford et al., 1964 三隅訳 1971, p. 16, p. 18）。

ラボラトリー方式の体験学習の草創期に記された古典である『感受性訓練』には、二人の精神科医による論文が含まれています（Frank, 1964 池田訳 1971；Whitman, 1964 池田訳 1971）。それらは、T グループについて、精神分析など精神医学や臨床心理学の観点から記された論考です。ラボラトリー方式の体験学習の実践や教育や研究において、草創期から精神医学や臨床心理学の観点が導入されていたことの証左だといえます。（pp. 72－73）

ここでは、『感受性訓練』における精神科医の論考について紹介したい。具体的には、上記で紹介されているWhitman (1964 池田訳1971) の「11 Tグループ過程の基礎にある精神力動的原理」について紹介する。

Whitman (1964) は、「本章では、“過程 (process)” とよぶのが最もふさわしいような、Tグループのいくつかの側面を考察することにしよう。ここで、過程という言葉で意味されるものは、集団の力動的な情緒的發展や、あるいは集団があらわしてくる情緒的な姿のことである」（p. 410）と述べ、そのあとに、投影、不安、反動形成、退行、防衛といった精神力動的視点の言葉を用いながら説明を行っている。

そのうえで、トレーナーの介入について「ときには介入の技法やパターンについての質問が想起される。いろいろな見解の相違はあるにしても、筆者には、これと精神分析療法との間には、ある類似性があるようにおもえる」（p. 426）と述べている。

さらに、トレーナーの教育について次のように述べている。

トレーナーは2つの領域についての経験をもっていなくてはならない。自己の内的生活と集団力学とがそれである。前者は、ある種の精

神分析的あるいは精神療法的経験によって最も容易に得られよう。しかしこれだけが本質的ではない。臨床的な経験は他人の無意識・前意識的な作用を研究することで得られる。

(略) シカゴにおける1956年のアメリカ心理学会 (The American Psychological Association) の集会でなされた表明は (Whiteman, Bach, Watson, Bennis, & others, 1956)、集団心理療法家にとって集団力学を理解することは、患者がそれをするよりもはるかに重要である、という主旨のものであった。これと同じ主旨を主張するとすれば、Tグループのトレーナーにとって人格の力動を理解することは、成員がそれをするよりもはるかに重要である。(p. 428)

ここで述べられている精神力動的視点を持つことの意味は、本論考で後に論じる点と同一である。

3.2 Tグループが誕生した時代背景: クルト・レヴィンと科学

『感受性訓練』が書かれた時代背景とレヴィンに端を発するNTL (National Training Laboratories) の展開について、土屋 (2020) は民主主義・科学・プラグマティズムというキーワードの接合点から考察を加えている。

第二は、集団における人の思考・行動を分析する際に、今ここの、その場に働く力を考慮したという点である。グループでの個人の行動・思考を捉える際、その場で働く力の分析を通して捉えようとしたレヴィンのグループ・ダイナミックスの視点は、個々人の養育歴など、過去の経験をもとに個人の行動を理解しようとするフロイトの精神分析へのアンチテーゼとしての側面も持っていたことが伺える (e.g., Bradford, Gibb, & Benne, 1964 三隅監訳 1971)。この視点は、物事の原因を過去や歴史ではなく、今ここに働く要因に求めるという点で、“プラグマティズム的”、“アメリカ的”であると言えるかもしれない。(p. 27)

1920-50年代のアメリカ心理学は、行動主義・実証主義が全盛であった。1924年には、Floyd Allportが、集団心 (group-mind) を想定することを否定する論考を提出するなど、社会心理学、グループ・ダイナミックスにおいても、実証的な視点が有力視されるなかでは、精神分析的視点を集団に適用するといった考え方は鳴りを潜めていたのかもしれない。

3.3 『人間関係の学び方』におけるコンテンツとプロセス

『人間関係トレーニング』での表現とは異なり、『人間関係の学び方』では、コンテンツとプロセスについて、個人の経験を冰山図を用いて表現した図 (水面上の言動と、その下に思考・感情・願望が配置されている図) が載せてある (p.4)。また、グループプロセスについて、森泉 (2024) は、Reddyのグルー

プ・ダイナミックスの氷山図 (Reddy, 1994 津村監訳 2018)、Minahanの氷山図 (Minahan, 2014 柴田他訳 2018)、津村の発想に基づく氷山図 (2012) を掲載し、グループプロセスの諸要素が表現されている。

氷山図の表現は、目に見える部分とその背後に見えないものがあること、また、目に見える部分よりも、その背後にあるものの方が大きいことを示すときに用いられる。特に、Reddy (1994) のグループ・ダイナミックスの氷山図は、最下部に「無意識」も配置されており、これは、先に挙げた木村 (2005) の図を思わせるものでもある。

Reddyの『インターベンション・スキルズ—チームが動く、人が育つ、介入の理論と実践—』にPhillips (2018) は、この書籍がシャインの発想に基づくことを紹介している。

Edgar Scheinの独創性に富む「プロセス・コンサルテーション」を利用し、グループとチームのダイナミックスに具体的に活用することにし、私たちは水面下に潜んでいるだろうこと—タスクプロセスとメインテナンスプロセス—の違いを示すコアとなるフレームワークを理解するためのいくつかの理論とモデルを、そして問題に取り組む助けとなるいくつかのツールと行動を準備し始めました。(p. i)

4. シャインの持つ精神力動的視点

4.1 津村 (2019) と精神力動的視点

『人間関係トレーニング』では明示的に示されなかった精神力動的視点であったが、津村が後に氷山図を用いてグループプロセスを表現したように、目に見えない力動についての発想は持っていたと考えられる (津村, 2012)。シャインは、NTLが刊行しているReading book: Laboratories in human relation training において、What to observe in a group (Schein, 1971) を執筆し、コンテンツとプロセスについて述べ、この対比は『人間関係トレーニング』の津村による「プロセスとは何か」の下敷きとなっていることが推測される。なお、ここでは氷山図は用いられていない。

津村は後の書籍『改訂新版プロセス・エデュケーション』(2019) でも、シャインの影響を多大に受けていることがうかがえる。書籍の冒頭は、プロセス・コンサルテーションの考え方を引用し、次のように始まる。

シャイン (Schein, E. H., 1999, 稲葉・尾川訳 2002) は、「プロセス・コンサルテーション」という言葉を用いて、支援や援助において、当事者がいかにプロセスに気づき、当事者相互にそれらのプロセスを共有することによって組織改善は行われると考えている。

(略) シャインは、「コンサルタントが組織を支援しようとして行うことの大部分は、人にできるのは、人間システムが自らを助けようとするのを支援することだけだ、という仮定がその中心にあるからだ」と述べている。

(略) このことは、さまざまな教育の場面においても、同様に考えら

れる。本来教育者が行う学習者への支援は、学習者自身が何を学びたいのかを発見し、学習者自らが学ぼう・成長しようとする意欲が生まれる関係づくりを促進・支援することが大切な課題であるといえるだろう。(p.3)

4.2 エドガー・シャインの精神分析的背景

先に挙げたシャインの『プロセス・コンサルテーション』を読み解くと、「第2章 援助関係における心理力動 (サイコダイナミクス)」というタイトルで、精神力動的観点から援助関係について述べられている。具体的には、「(略) その結果、援助を求めている側からの抵抗や防衛が生じてしまう。この抵抗を理解するためには、われわれは援助関係における心理力動を探究し、援助がうまく与えられるためにはどのような条件が満たされなければならないかを調べなければならない」として、精神力動的視点を持つ重要性を示唆している。

『プロセス・コンサルテーション』の略歴には書かれていないものの、『組織セラピー』の著者欄からは、シャインと精神分析の関係が見て取れる。そこには、1952年にハーバード大学大学院社会関係研究科博士課程終了(ゴードン・オールポートに師事)とあり、William Alanson White Institute (NYネオ・フロイト派社会精神分析研究所) Post-Doctoral Program修了(フリーダ・フロム-ライヒマン (Frieda Fromm-Reichmann) に教育分析を受ける)、と続く(なお、ここで挙げられているゴードン・オールポート (Gordon Allport) は、集団心の想定を否定したFloyd Allportの弟である)。さらに、NTL (National Training Laboratory) で、Tグループに、ウォレン・ベニスと初期から関与、と記載され、クルト・レビン (MIT Group Dynamics Research Center) やダグラス・マクレガー (MIT Sloan School、学部長)、リチャード・ベックハート (MIT Sloan School、特任教授) から強い影響を受け、Addison-WesleyのOD Seriesの監修者の一人となる、と続く。

精神分析における教育分析とは、自らが精神分析のクライアントとして分析を受けることを指す。先に挙げたように精神分析は、「一回が45分ないし50分のこうした時間が週4回か5回定期的にもたれるのが、フロイト以来の精神分析のやりかたです (日本精神分析協会)」とあり、これを数年続けたということである。

シャインの教育分析を行ったフリーダ・フロム-ライヒマンとはどのような人物か。1889年にドイツのケーニヒスベルグに生まれ、クレペリン (Kraepelin, E.) やザックス (Sachs, H.) のもとで研究を行った。その後、ベルリン精神分析研究所で、精神分析の訓練を受けたようだ。ハイデルベルグで開業をし、そこにはハイデルベルグ大学の多くの学者が集まり、フロム (Fromm, E.) もそのひとりであった。1926年には、10歳年下のエーリッヒ・フロム (著作『自由からの逃走』(1941)で世界的な成功を収める) と結婚する。このときから、名前をフロム-ライヒマンとし、4年後に離婚した後も、終生その名前で通したという。1934年にフロムとアメリカに渡り、後にホワイต์精神分析研究所 (White Psychoanalytic Institute) の創設に参加して、精神分析研究と教育に打ち込んだとされる (鑑, 2002)。川畑 (2013) は彼女に関して「患者がよくなるのならば、

シャンデリアにもぶら下がる」と言われた人物であり、何よりもまず患者の利益を第一に考え、全身全霊をかけて臨床に臨んだ方だと言う評判を紹介している。

ここに出てくる、ウィリアム・アロンソン・ホワイト研究所とは、どういった研究所であろうか。次には、現在もあるホワイト研究所のHPの記述から、その歴史と特徴を読み解く。

ウィリアム・アロンソン・ホワイト研究所は、1943年にアメリカにおける主流の正統派フロイト派精神分析に対する革新的な代替機関として設立された。国際的に著名な創設者たち—エーリッヒ・フロム、フリーダ・フロム＝ライヒマン、ハリー・スタック・サリバン、デイヴィッド・リオック、ジャネット・M・リオック、クララ・トンプソン—は、情熱的な異議申し立ての精神で結ばれ、アメリカ精神分析学における偏狭な宗派主義と増大する硬直性に挑戦する必要性を認識していた。その一部は1920年代から1930年代にかけてヨーロッパのフロイト学派で研修を受け、全員がニューヨーク市とワシントン・ボルチモア地域のアメリカ精神分析学会の正統派「公式」研究所において、教師として積極的かつ顕著に関わっていた。彼らは臨床実践における柔軟性の欠如、知的閉鎖性、父権的な研修制度、そして精神分析の研修と実践に対する組織化された医学の支配を問題視した。これに対し、彼らはフロイトの伝統に基づき、社会科学の学際的視点によって豊かにされた研究所を創設した。

ホワイト研究所は、治療関係において人間的な存在感を欠いた、距離を置き形式的な「無表情なスクリーン」のような分析家という通説への反論として発展した「対人関係論的」視点で、専門分野において最もよく知られている。人々が互いに影響を与え合い、反応し合う過程の研究は、対人関係治療モデルの核心的な焦点であり続けている。対人関係アプローチは、治療的变化の要因として精神分析医の人間の資質を強調する。患者との関係性を重視することで、同研究所の精神分析医たちは、従来「到達不能」あるいは「不治」とされた重度の障害を持つ患者の治療に先駆的な貢献を果たした。精神分析医の人格が治療過程に及ぼす影響である「逆転移」に関する初期の研究も、対人関係視点から有機的に発展した。

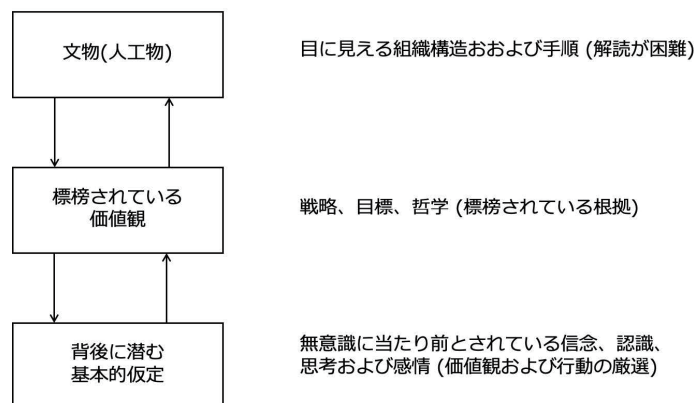
1950年代までに、ホワイト研究所はその明確な学際的視点で知られるようになった。創設者を含む研究所の理論家たちは、人格発達に関するより伝統的な精神分析的理解に、社会と文化の視点を融合させた。この強調は、家族・文化・社会の影響を重要視しないかのように患者を扱う正統派の見解に異議を唱えた。当時、主流の精神分析の正統派実践者は主に富裕層の患者を治療していた。同研究所の臨床サービス部門（1948年設立）は、多様な個人発達を研究し、地域社会に奉仕し、精神分析的手法を十分なサービスを受けられない人々の治療に適応させるという研究所の使命を実現した。

つまり、シャインは対人関係学派の精神分析のトレーニングを受けていた。彼の実践・著作からは、精神力動的視点を有していたことの片鱗が見て取れる。

たとえば、プロセス・コンサルテーションはその後に続く、援助関係を築く哲学と実践と考えられるが、そこには精神分析のあり方も見てとることができるのではないか。プロセス・コンサルテーションでは、課題について最も知っているのは本人であり、本人がその課題を扱っていくことを助けていくことに重点を置く。精神分析も、分析家が行うのはクライアントが語ることにについて気づきを伝えていくことであり、クライアント本人が気づき、理解をしていくことが治療的な意味を持つ。プロセス・コンサルテーションも、相対して本人の気づきを手伝う実践であるだろう。

他にも、組織文化について述べるときに、基本的仮定 (basic assumption) という言葉を用いている (Schein, 2009 尾川訳 2016)。これについては明確に意識をしているようであり、「文化の研究者の多くは、文化のもっとも深いレベルを表現するために、基本的な価値観 (basic values) という言葉を好んで使っている。しかし私自身は、基本的な前提認識 (basic assumption) のほうを好んで使っている。何故なら、後者はグループのメンバーによって当然のこととして、また妥協の余地のないものとして受けとめられているからである」とある³。

Figure 2 シャイン (1985) による文化の3つのレベル
(Schein, 2009 尾川監訳 松本訳, p. 21)



後に紹介するピオンに関する言及もある。『組織文化とリーダーシップ』に

³ この図は、他の者により氷山図として表現されることもあるが、シャイン著作の中には、氷山図を見つけることができなかった。本人は、氷山図として表現することには批判的であるようだ (Badham, Bridgman, & Cummings, 2020)。Badham et al. (2020) は、組織を文化として捉えるイメージは、しばしばエドガー・シャインに帰せられる (Knights and Willmott, 2006) が、シャイン自身は氷山という用語を使用したことはなく、それに批判的であることを紹介している (Schein in Brighton, 2015)。さらにScheinとの私的やりとりのなかで、「私はそれを好まなかった。なぜなら、私が文化のDNAと考える基本的想定は、それほど巨大でも静的でもないからである」という言葉があったことを紹介している。

においては、集団の無意識に関する概念も用いている。

ビオン (Bion, 1959) が名付けたペアを組む現象もこの段階で頻繁に現れる。というのは愛情と親密さに対するニーズが、そのような感情をあきらかに表現するメンバーに対して容易に投射されるからだ。グループの運命をその「ペア」に投射し、さらにそのペアが生み出す脅威的な解決に期待を寄せることによって、グループは結束の意識を保ち続けることができる (p. 243)

4.3 シャインとレヴィンとビオン

シャインの『組織セラピー』の最後に、訳を担当した尾川は、レヴィンとビオンの関係について次のように触れている。

クルト・レヴィンはコーネル大学からボストンに向かう途中で勤務先を失職しましたが、幸運にもMITに職を得ました。その結果として、1945年、MITでグループ・ダイナミクス研究所を創設しました。現在のように企業文化や組織文化といった理論ができる以前である当時、グループを動かすものはその基本的想定であるという考え方には、大きく2つの流れがありました。それがレヴィンのグループ・ダイナミクスと、タヴィストックを中心とする集団精神療法です。レヴィンはこの2つの理論を合体し、精緻化したいと考え、タヴィストックのビオンとの共同研究を試みました。グループ・ダイナミクスの理論は行動的な色彩が強すぎるため、集団精神療法の精神分析的システム理論によって、認知的な面を補完した統合理論をレヴィンとビオンで創りたいと考えたのでした。しかし、レヴィンは志半ばで亡くなり、基本的想定ができた企業の中心度に教化されて行動規範が決まったあと、他者に対するリフレクションがどのようにできあがるかということまでの理論はできあがりませんでした。そこで今回、ビオン弟子のジョン・ストークスを呼んで対話を試みたのです。(pp. 142-143)

尾川によれば、レヴィンのグループ・ダイナミクスにみる行動的な色彩と、タヴィストックのビオンの精神分析的システム理論の対比のなかに、シャインを位置づけている。

5. ラボラトリー方式の体験学習と精神力動的視点

5.1 精神力動的視点の変遷

先に挙げたように、『人間関係トレーニング』について、精神力動的視点はそれほど顕在的に示されていたわけではなかった。『感受性訓練』では触れられていた精神力動的視点は脈々と存在し続けるなか、『人間関係トレーニング』では、“枠”としての場の提示に留まったが、『人間関係の学び方』では、個人・集団の無意識として明示されたと言える。氷山図を用いるようになった津村は、シャインのプロセスの発想、また、Reddyのグループプロセスを捉える氷山図

の影響を受ける形で存在はしていた。ただし、シャインの著作を紐と行くと、精神力動の発想は明確に、むしろ、前面に出されていた。

5.2『人間関係の学び方』における精神力動的視点

ラボラトリー方式の体験学習の現在地を示すことを目指した『人間関係の学び方』では、臨床心理学の考え方とともに精神力動的視点が多数紹介されることになった。

具体的には、Rogers、Gendlin、Pearlsといった人間性心理学的アプローチの考え方の他、臨床心理学やカウンセリングの理論としてユング、フロイト、アドラーの概念が紹介されている。また、集団精神療法のYalom、グループの発達、タビストック人間関係研究所のビオンの基本的想定、投影、投影同一化、スプリットティングといった無意識の心的働きについても紹介している。

5.3 精神力動的視点を持つことの意味

続いて、ラボラトリー方式の体験学習において、精神力動的視点を持つことの意味について述べていきたい。

第一は、トレーナーを含めたグループの関わりのなかで起こってくることを深く理解することができるという利点である。Tグループは治療を目的としたものではないが、治療ではないことと、精神力動的視点を持たないことは同義ではないだろう。個人、また、集団のダイナミックスによって「今ここ」の現象が起こっているのかを多層的に理解していくときに、個人・集団に関する精神力動的視点は有効な視点を与えるであろう。

とくに、ネガティブ感情の理解や取り扱いについて、有効な示唆をもたらすと考えられる。グループのなかで、なぜこのような強い感情を感じるのか、特定の他者に対するネガティブな感情、自己への感情などである。それを個人だけに原因を求めずに扱うには、相互作用のなかで起こってくることを知り、それと個人の課題とを切り離して扱う必要があり、トレーナーはとくにそれが求められるだろう。

そこで再考を促されるのは、「今ここ」で体験されること、経験されることは、どういう意味において探究の素材であるのかということである。関わりの体験において個人の経験したことを個人でふりかえり、また、ともにふりかえる(わかちあう)なかで関係の中で起こっていたことから学びを得るラボラトリー方式の体験学習において、個人が経験したことは、起こっていたことを知るための素材であるだろう。精神力動的視点を持てば、たとえば、自分が感じていた感情は、他のメンバーが持っていた不安が投影(投影同一化)された結果かもしれない。そうであるならば、個人の感情は、相互作用の結果として感じられたことであるとみなされるだろう。力動的視点に立つならば、全てのことが相互作用の一部であると見なせるかもしれない。ただし、この視点に立つには、トレーナーの透明性と自分を用いること (use of self) が必要になってくるだけでなく、精神力動的視点を持っていることもその助けとなると考えられる。

これは、メンバーが関わりの中で探究していく場を支える者としても大事になるだろう。ラボラトリー方式の体験学習では、メンバーが探究できる場をコ

ンテイニングしていくことが必要になる。トレーナーには、“枠”をホールドすることが求められるが、紙に書かれた枠とは異なり、実際のグループでその枠は2人のトレーナーによって保持される。人によって構成されるため、そこでファシリテーターの感情も揺れ動く、それを防衛的にならずに、建設的に用いることができるが、そのときに精神力動的視点は助けになるだろう。

第二は、スタッフ間、スタッフチームで起こってくることも含めて理解ができる点についてである。対人援助職のチームが不可避免的に経験するストレスが、支援職チームの中の関係に影響していくように (Obholzer & Roberts, 1994)、Tグループの進展で様々な経験されることは、トレーナーチームの間でも起こってくることがある。そうしたときに、メンバーを責めることなく、“枠”を維持していくには、こうしたグループにおける力動的視点は、合宿というラボラトリー全体で起こってくることを理解していくときにも必要になるだろう。

5.4 精神力動的視点をを用いる際の留意点

さいごに、精神力動的視点をを用いる際の留意点について述べる。それは、精神力動的視点を持つことと、それをどのように用いるべきかということである。

シャインは、『組織セラピー』のなかで、「無意識をどの程度までコンサルテーションやセラピーの焦点とすべきか?」という節で次のように述べ、コンサルタントの認識に加え、クライアントの選択が必要なことを述べている。

コンサルテーションおよびセラピーは、無意識のプロセスにどの程度まで介入するべきなのだろうか? クライアント自身が無意識の要素(知覚、思考、想定、感情など)を発見するのを支援する場合、それはどのような長所や短所、あるいは理論的正当性があるのだろうか? 洞察が目標なのだろうか? 洞察が行動の変化や精神的健康を生み出すという証拠はあるのだろうか? コンサルタントやセラピストは、共有された無意識という観察された事実、どのように対処すべきなのだろうか?

私たちが考えるいわゆる「無意識」というものを、個人がもっていることに疑いをはさむ余地はほとんどないが、集団や組織にも無意識があるという概念には多くの疑問が生じる。もしそのような状態が存在するとしても、ビオン (W. R. Bion) が集団精神療法について述べたように、無意識を意識させることが有益であるかどうかは明らかではない。この問題は、集団の無意識がいかなるものであれ、それが抑圧されているのか、それともさまざまな社会的防衛機制 (大きくて見逃せない) により単に無視されているのか、という想定を私たちがするのかどうかに依存している。

(略) コンサルタントやセラピストが、無意識であると知覚されるものが、(1) 問題の処理に利用でき、しかも (2) 当該集団が心理的にそれを実行することができるかどうか、(3) 自らの無意識を有する集団に対峙することがセラピー上、望ましいことか否か、であるということ

を信じているのかどうか、という点にあるのだ。精神分析の伝統では診断プロセスの一部として、組織に書面で問題点の精神動態的解釈を渡すことさえある。反対に、プロセス・コンサルテーションの原理においては、無意識の問題まで掘り下げて説明するかどうかは、クライアントだけが選択することができるものとするのである。(pp. 93-94)

繰り返しになるが、防衛機制としての様々な言動、また、グループの基本的想定は、不安への対処として存在することが多いため、それを闇雲に指摘したり、剥いだりするようなことは、クライアントを過度に脅威に晒すことになるため、避ける必要があるだろう。ファシリテーターやメンバーが自分たちが感じている不安といった感情も、相互作用の一部として見ていくことができるような配慮が求められる。

6. おわりに

本論考では、ラボラトリー方式の体験学習における精神力動的視点の変遷を辿った。『感受性訓練』では精神科医による精神力動的視点が明示的に示されていたものの、『人間関係トレーニング』では“粹”の提示で、精神力動的視点は顕在化されていなかったといえる。一方、シャインの『プロセス・コンサルテーション』に見られるように、精神力動的視点は脈々と存在し続けていた。シャイン自身が対人関係学派の精神分析の訓練を受け、その視点を援助関係やグループのなかで起こってくることの理解に応用していたことは、ラボラトリー方式の体験学習における精神力動的視点の系譜を考える上で重要であろう。『人間関係の学び方』では、こうした視点が再び明示的に紹介されることになった。

本論考では、フロイトからクライン、ビオンへと至る対象関係論とタビストック人間関係研究所の系譜について、深く紹介することができなかった。システム論と精神分析を統合したシステムズ精神力動 (systems psychodynamics) の理論と実践については、本論考との関係も含めて、別途論じることとしたい。

引用文献

- Allport, F. H. (1924). The group fallacy in relation to social science. *American Journal of Sociology*, 29(6), 688-706.
- Badham, R., & King, E. (2020). Mindfulness at Work: A Critical Review. *Organization*, 28(4), 531-554.
- Bion, W. R. (1959). Experiences in groups. Tavistock.
- Bradford, L. P., Gibb, J. R., & Benne, K. D. (1964). Two educational innovations. In L. P. Bradford, J. R. Gibb, & K. D. Benne (Eds.), *T-group theory and laboratory method: Innovation in re-education* (pp. 1-14). John Wiley & Sons. (三隅二不二(監訳) (1971). 教育における2つの技術革新. 『感受性訓練—Tグループの理論と方法—』 (pp. 1-19) 日本生産性本部)

- Brighton, D. (2015). Destroy the iceberg. Retrieved October 1, 2025, from <https://brightonleadership.com/2015/10/06/destroy-the-iceberg/>
- Frank, J. D. (1964). Training and therapy. In L. P. Bradford, J. R. Gibb, & K. D. Benne (Eds.), *T-group theory and laboratory method: Innovation in re-education* (pp. 442-451). John Wiley & Sons. (池田数好(訳) (1971). トレーニングと治療. 三隅二不二(監訳)『感受性訓練—Tグループの理論と方法—』(pp. 583-594) 日本生産性本部)
- 星野欣生 (2005). グループプロセスで何を見るか 津村俊充・山口真人(編)『人間関係トレーニング 第2版』(pp. 45-47) ナカニシヤ出版
- Fromm, E. (1941). *Escape from freedom*. New York: Henry Holt and Company. (日高六郎(訳)(1965). 自由からの逃走 東京創元社)
- 木村晴子 (2005). 成長するための"枠"—ラボラトリートレーニングのひとつの意味— 津村俊充・山口真人(編)『人間関係トレーニング 第2版』(pp. 17-20) ナカニシヤ出版
- 川畑直人 (2013). 精神分析, 対人関係論, そしてサリヴァンの思想. 心理相談センター年報, 8, 3-12.
- Knights, D., & Willmott, H. (2006). *Introducing organizational behaviour and management*. Thomson Learning.
- 楠本和彦 (2024). ラボラトリー方式の体験学習におけるカウンセリングの位置づけや影響. 土屋耕治・楠本和彦・中村和彦(編)『人間関係の学び方: 人間性豊かな関係を育む「ラボラトリー方式の体験学習」の理論と実践』(pp. 72-74) ナカニシヤ出版
- Minahan, M. (2014). Working with groups in organizations. In B. B. Jones & M. Brazzel (Eds.), *The NTL handbook of organizational development and change* (2nd ed., pp. 385-406). Wiley. (柴田郁夫・組織キャリア開発フォーラム(訳) (2018). 組織におけるグループでの協働. 『NTLハンドブック—組織開発(OD)と変革—』Next Publishing Authors Press)
- 日本精神分析協会 精神分析とはどのようなものでしょうか Retrieved from <https://www.jpas.jp/general/whats.html> (2025年1月閲覧)
- Obholzer, A., & Roberts, V. Z. (1994). *The unconscious at work: Individual and organizational stress in the human services*. Routledge. (武井麻子(監訳) 榊恵子他(訳) (2014). 『組織のストレスとコンサルテーション—対人援助サービスと職場の無意識—』金剛出版)
- Phillips, C. (2018). 日本語版出版に寄せて In W. B. Reddy, *Intervention skills: Process consultation for small groups and teams*. Jossey-Bass/Pfeiffer. (津村俊充(監訳) 林芳孝・岸田美穂・岡田衣津子(訳)『インターベンション・スキルズ—チームが動く、人が育つ、介入の理論と実践—』金子書房)
- Reddy, W. B. (1994). *Intervention skills: Process consultation for small groups and teams*. Jossey-Bass/Pfeiffer. (津村俊充(監訳) 林芳孝・岸田美穂・岡田衣津子(訳) (2018). 『インターベンション・スキルズ—チームが動く、人が育つ、介入の理論と実践—』金子書房)
- Schein, E. H. (1971). What to observe in a group. In L. P. Bradford, J. R. Gibb,

- & K. D. Benne (Eds.), *Reading book: Laboratories in human relation training*. National Training Laboratories.
- Schein, E. H. (1999). *Process consultation revisited: Building the helping relationship*. Addison-Wesley. (稲葉元吉・尾川丈一(訳) (2002).『プロセス・コンサルテーション: 援助関係を築くこと』白桃書房)
- Schein, E. H. (2009). *The Corporate Culture Survival Guide: New and Revised ed.* John Wiley & Sons, Inc. (尾川丈一(監訳) 松本美央(訳) (2016).『企業文化[改訂版]: ダイバーシティと文化の仕組み』白桃書房)
- Schein, E. H. (2010). *Organizational Culture and Leadership, 4th ed.* John Wiley & Sons, Inc. (梅津祐良・横山哲夫 (訳) (2012).『組織文化とリーダーシップ』白桃書房)
- Schein, E. H. (2009). *Organizational Therapy: Multiple Perspectives*. (尾川丈一・稲葉祐之・木村琢磨 (訳) (2014).『組織セラピー: 組織感情への臨床アプローチ』白桃書房)
- 鑑幹八郎 (2002). フリーダ・フロム-ライヒマン 小此木啓吾 (編) 精神分析事典 岩崎学術出版社
- 土屋耕治 (2020). 体験学習を通じた民主主義再学習の思想的背景: 民主主義・科学・プラグマティズム. 人間関係研究, 19, 22-33.
- 津村俊充 (2005). プロセスとは何か. 津村俊充・山口真人(編)『人間関係トレーニング 第2版』(pp. 42-44) ナカニシヤ出版
- 津村俊充 (2012).『プロセス・エデュケーション: 学びを支援するファシリテーションの理論と実践』金子書房
- 津村俊充 (2019).『改訂新版プロセス・エデュケーション: 学びを支援するファシリテーションの理論と実践』金子書房
- Whitman, R. M. (1964). Psychodynamic principles underlying T-group processes. In L. P. Bradford, J. R. Gibb, & K. D. Benne (Eds.), *T-group theory and laboratory method: Innovation in re-education* (pp. 310-335). John Wiley & Sons. (池田数好(訳) (1971). Tグループ過程の基礎にある精神力動的原理. 三隅二不二(監訳)『感受性訓練—Tグループの理論と方法—』(pp. 409-440) 日本生産性本部)
- Whitman, R. M. (with J. Frank, G. Bach, G. Watson, W. Bennis, & others). (1956). *The contribution of group dynamics to group psychotherapy*. Panel meeting, American Psychological Association, Chicago.

The Evolution of Psychodynamic Perspectives in Experiential Learning Using the Laboratory Method: Approaches to Individual and Group Unconscious

Koji Tsuchiya

*(Department of Psychology and Human Relations, Faculty of Humanities,
Nanzan University)*

This paper examines the evolution of psychodynamic perspectives in laboratory method experiential learning. While Sensitivity Training explicitly presented psychodynamic viewpoints from psychiatrists, Human Relations Training limited discussion to providing a "framework," leaving psychodynamic perspectives less explicit. However, Edgar Schein, trained in interpersonal psychoanalysis, incorporated these perspectives into Process Consultation. Influenced by Schein, iceberg diagrams were adopted to represent group processes, and Learning Human Relations reintroduced psychodynamic perspectives explicitly. The paper argues that psychodynamic perspectives enable deeper understanding of group phenomena and negative emotions through concepts like projection, basic assumptions, and defense mechanisms. However, their application requires caution, as premature interpretation may expose participants to excessive psychological threat. The choice to explore unconscious elements should ultimately belong to clients themselves.

Key words: Experiential Learning Using the Laboratory Method, Psychodynamics, Individual and Group Unconscious

ワークショップ形式によるプロテスタント教会の 修養会に関する実践報告と検討（その2） －CRCによる2009年修養会－

榊 原 康 成

（シティ リジョイス チャーチ）

楠 本 和 彦

（南山大学人文学部心理人間学科）

丹 羽 牧 代

（南山大学名誉教授）

要旨

CRC（シティ リジョイス チャーチ）の修養会の特徴として、ワークショップ形式で行われることが挙げられる。その一端を筆者らは報告し検討してきた。

本稿は、2009年に実施したCRCのワークショップ形式の修養会プログラムについて報告し、その内容や意味について検討することを目的とした。本稿で取り上げるプログラム「人生双六ゲーム」は、これまで報告してきたプログラムとはタイプが異なるため、CRCにおける修養会プログラムの多様さの一端を表すものとして、報告する意義があると考えた。

プログラム「人生双六ゲーム」について、①遊びの要素、②聖書に記された様々な出来事による喜びの追体験、③青年やノンクリスチャンの参加への考慮、④記録用紙記入やふりかえり用紙記入、わかちあいの意味や意図、などの観点から検討した。

キーワード

修養会、ワークショップ

1. はじめに

CRC¹（シティ リジョイス チャーチ）は2004年から1年に1～2回の修養会

¹ CRC（シティ リジョイス チャーチ）は、榊原康成牧師が、2004年に新しく教会を建て上げる開拓伝道の働きを始めて設立された教会である。2004年当時は、名古屋市の栄地域にはプロテスタント福音派に所属する教会がなかったことから、この地域での都市部伝道と次世代への伝道を目指して始まった。

当初は、牧師の自宅であるマンションの1室を礼拝場所として始まった。その後、都市部での伝道という目標のもとに礼拝堂を持たないという選択をし、様々な場所を日曜礼拝の場として使用している。ただし、金曜日の夜の礼拝や集会など少人数向けのものは、固定の牧師オフィスでおこなっている。

を実施してきた（資料1参照）。CRCの修養会の特徴として、ワークショップ形式で行われることが挙げられる。その一端を筆者らは報告し検討してきた（榎原・楠本・丹羽, 2024; 榎原・楠本・丹羽, 2023; 丹羽・楠本, 2021; 楠本・丹羽, 2008）。

本稿は、これまでの実践研究を踏まえて、2009年に実施したCRCのワークショップ形式の修養会プログラムについて報告し、その内容や意味について検討することを目的とする。本稿で取り上げるプログラム「人生双六ゲーム」は、これまで報告してきたプログラムとはタイプが異なるため、CRCにおける修養会プログラムの多様さの一端を表すものとして、報告する意義があると考え

る。

本稿で取り上げるプログラムは、まず、2009年の春の修養会で実施された後、2009年秋のミニ修養ミニ楽養会でも一部変形したプログラムとして行われた。本稿では、2で2009年春に実施されたプログラムを、3で2009年秋に実施されたプログラムを報告する。

2. 2009年春の修養会

2-1. 全体の概要

2009年5月4日（月・祝）～5日（火・祝）の1泊2日で、修養会は実施された。場所は愛知県豊田市の宿泊施設が選ばれた。宿泊も修養会会場も同一の施設で行われた。修養会プログラム参加者は榎原康成牧師を含め、18名(女性11名・男性7名、高校生1名、大学生3名、成人14名)であった。さらに、プログラムには参加しないが、参加者家族の児童2名も同行していた。

本修養会のテーマは「クリスチャンとしての喜び」であった。修養会全体とプログラム内容の企画・立案は榎原牧師が中心となって筆者らが行った。プログラムの実施・運営も榎原牧師がファシリテーターとして中心となり行い、一部のプログラムでは筆者らがコ・ファシリテーターを担当した。

5月4日（月・祝）の午後に会場に到着した。その後、14時から16時までは、聖研やスポーツなどの分科会を実施した。17時～18時まで、今後のプログラムに関するグループ分けとウォーミングアップのためのプログラムを実施した。夕食後、20時～22時30分に、「みことばTime①」として本プログラム「人生双六ゲーム」が実施された。

5月5日（火・祝）の9時～11時30分に、「みことばTime②」として、聖書箇所に関するロールプレイのプログラム「なりきり演技&追体験」を実施した。12時頃に修養会を終了し、12時30分頃に帰路についた。

2-2. 「みことばTime①」のプログラム「人生双六ゲーム」

本節で報告するプログラム「人生双六ゲーム」は、「みことばTime①」で実施された。そのプログラム内容について記す（資料2参照）。

1) 「人生双六ゲーム」の概要

「人生双六ゲーム」のねらいは、「①楽しみながら、聖書に記された様々な出来事を体験する。②体験を通して、クリスチャンとしての喜びを味わい、深める」であった。

「人生双六ゲーム」は次の手順で実施された。①賛美など：15分、②人生双六ゲーム：1時間、③ふりかえり用紙記入・わかちあい：1時間、④全体でのわかちあい：15分、であった。

プログラムの運営は主に榊原牧師が担当した。「人生双六ゲーム」の参加者は、16名であり、榊原牧師が各5～6名の3グループにグループ分けを行った。

2) 「人生双六ゲーム」のルールと記録用紙

「人生双六ゲーム」のルール（資料2参照）と記録用紙（資料6参照）は以下の通りであった。

2)－1. 全体のルール

「人生双六ゲーム」の「全体のルール」を記す。

- ・御国へ向かってコマを進める（資料4参照）。御国へ入った順番を確定する。
- ・各マスに書いてあるルールに従う。特別ルール等は、その都度、牧師から説明を受ける。
- ・御国へゴール後の、合計金額で、個人総合1位を決定する。
- ・御国へゴール後の、グループ合計金額で、3グループの総合1位を決定する。
- ・御国へ到着した時、

1位でゴールした人が10,000マナを獲得する（資料4参照）。

2～4位でゴールした人は、5,000マナを獲得する。

御国に凱旋した喜びを味わいましょう。

5位で最後にゴールした人には、特別ルールを適用する。この特別ルールは、「後の者が先になり、先の者が後になります」（マタイの福音書20章16節、ルカの福音書13章30節、マタイの福音書19章30節）という聖書のことばにちなんで、50,000マナを獲得する、というものであった。これらの聖書箇所本来の意味は、順序²に関するものであり、量に関するものではない。しかし、本ゲームでは、聖書箇所からの正しい適用というよりは、量的な部分が逆転し、順位（順序）も逆転するという、あくまで遊び的・ゲーム的な要素として、このようなルールを導入した。

² マタイの福音書19章30節「最初の者の多くが最後の者となり、最後の者〔の多く〕が最初の者となるであろう。」という聖句に関して『聖書名言辞典』（2004）では、「前の文脈（28～29節）からみると、この世の終末の時、神は、最初に神によって選ばれたと自負しているイスラエルの民をさばき、最後に召し出されたキリスト教徒が報いを受け、永遠の生命を継ぐであろう、の意」（p.424）と解説している。

2) - 2. サイコロのコマのルール

「サイコロ（バツとマルが出る）のコマ」（資料4）のルールを記す。

- ・サイコロを2回振る。

2回とも○の場合は、お菓子と1,000マナを獲得する。

1回、○の場合は、お菓子を獲得する。

2回とも×の場合は、なにも獲得できない。但し、「私たちの時代のサイコロ（最後のサイコロ）のみ、特別ルールを適用する。特別ルールの内容は「次項3）人生双六ゲームの盤とマスの内容」に記す。

2) - 3. クイズのルール

「クイズ」のルールを記す。

- ・牧師の所にあるクイズのカードを引く。
- ・カードに記されているクイズに答える。クイズの内容については、資料5に示す。特別ルール（クイズが難しいと感じた人は、牧師からヒントをもらうことができる）が記載されていれば、それに従う。
- ・クイズに正解すれば、1,000マナを獲得する。
- ・最後のクイズのみ、特別ルールを適用する（最初に到着した人が、牧師に申請する）。特別ルールの内容は「次項3）人生双六ゲームの盤とマスの内容」に記す。

2) - 4. 体験のマスの手順とカードの内容

2) - 4-1. 体験のマスの手順

「体験のマス」の手順を記す。

- ・チームで誰かがそれぞれの期の「体験」に進んだ人がいたら、そこで、それぞれの期の聖書に記されている人物のことをチーム全員が体験する。

以下のような手順で行う。

1. チームで最初に、「体験」に進んだ人が、牧師の所にあるカードを引く。
2. その人は、カードに記された人物が登場する聖書箇所を読む。
3. チームの全員は、自分がその登場人物になったつもりで、その聖書箇所を聞く。そこに記されていることをその人物として想像し、イメージで体験する。

2) - 4-2. 体験のマスのカード内容

2009年春修養会「人生双六ゲーム」における「喜びを追体験」するカードは以下の内容であった。

「旧約の時代」

- ・アビガイル：サウルから逃亡中でも荒野で羊飼いたちを守ってやり、誠実に接したダビデを、欲のため、愚弄した夫、ナバル。それを知り、急いで行動し、ダビデの怒りを抑えた上、ダビデが主に選ばれた人だと告白する

聡明な妻。 サムエル記第一 25章 2－3節、9－11節、23－35節

- ・ナタン：ダビデ王の恐ろしい罪を、王の部屋で一人で指摘した預言者。

サムエル記第二 12章 1－15節

- ・サウル：民衆みんなの前で王になる。背の高い美青年。サムエル記第一 10章 17－27節

「イエスの時代」

- ・持ち主：エルサレムに入城するイエスのために、ロバの子を渡す。 マルコの福音書 11章 1－7節
- ・食べた一人：丘の上での説教を聞いた後、奇蹟のパンと魚を食べた5,000人の群衆。 マタイの福音書 14章 15－21節
- ・ヤコブとヨハネ：急いでその場に網を捨て置き、父親も残してイエスの弟子となる。 マタイの福音書 4章 21－22節

「使徒の時代」

- ・シラス：パウロと一緒に捕えられた牢獄で賛美をした。 使徒の働き 16章 19－25節
- ・ドルカス：ペテロによって生き返らされた信仰の人。多くの仲間に信頼され、愛されていた。 使徒の働き 9章 36－42節

2)－5. 記録用紙

体験して、自分の心に湧き起こってきた思いを忘れてしまわないように、とまったマスごとに「記録用紙」（資料6）に記入した。メンバーは「記録用紙」に、自分の喜び度を★印の数で記すとともに、そのマスで起こった自分の気持ちや感じを簡単なキーワードでメモした。

3) 人生双六ゲームの盤とマスの内容

2009年春の修養会で使用した「人生双六ゲーム」の盤を資料3に掲載する。すごろく盤はA0サイズ（841ミリ×1189ミリ）に拡大した。メンバーはすごろく盤を取り囲むように座った。喜びやクイズのマスにお菓子を置いた。

その盤のマスは以下の通りである。なおここに記されたマスの内容の中には、出典が聖書ではあっても、やや異なる出来事や表現になっているものも含まれる。それらは「喜び」（あるいは悲しみや落胆）というテーマを疑似体験するというゲーム性に合わせるために、敢えて出来事の要素を部分的に変えたり省略したりしたものである。

「旧約の時代」のマスは以下の通りである。

1. アブラハム、牛と羊が増える。 3,000マナ受け取る。
2. ボアズに助けてもらう。 10,000マナ受け取る。

3. ダビデがサウルに追われる。 1,000マナ失う。
 4. サイコロ
 5. 話す（好きな旧約の人物）
 6. 喜び（カードを引く。喜びを追体験）
 7. クイズ（資料5参照）
 8. エリヤ、主にお菓子をもらう。 1,000マナ受け取る。
 9. エリシャがつばの油を満たす。 5,000マナ受け取る。
 10. ヨナが海に沈む。 1,000マナ失う。
- *全員一旦停止：カードを引く。（喜びを追体験）

「イエスの時代」のマスは以下の通りである。

1. 喜び（カードを引く。喜びを追体験）
 2. クイズ（資料5参照）
 3. イエス様が水をワインに変える。 10,000マナ受け取る。
 4. 話す（好きな新約の人物）
 5. イエス様に魚とパンをいただく。 1,000マナ受け取る。
 6. サイコロ
 7. ザアカイが返済してくれる。 1,000マナを受け取る。
 8. 喜び（カードを引く。喜びを追体験）
 9. 魚の口から銀貨が出てくる。 1,000マナを受け取る。
 10. 大金持ちの青年、持っている全マナを差し出す。³
- *全員一旦停止：カードを引く。（喜びを追体験）

「使徒の時代」のマスは以下の通りである。

1. プリスカが作ったテントが人気になる。 10,000マナ受け取る。
2. アポロが宣教に出発する。支援献金として、1,000マナ捧げる。
3. クイズ（資料5参照）
4. パートナー（自分のグループの右隣の人、次項4）を参照）のよい点を一つ褒める。

³ 次のような聖書箇所がある。永遠のいのちを得るためにはどんな良いことをすればよいかと尋ねる青年に対して、イエスが「完全になりたいのなら、帰って、あなたの財産を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つことになります。その上でわたしに従ってきなさい。」と告げる。すると、多くの財産を持っていた青年は悲しみながら立ち去った（マタイの福音書19章16-22節、聖書 新改訳2017）。この箇所が参加者の多くに知られていることを前提に、「人生双六ゲーム」では、この青年が、全財産＝全マナを差し出す設定になっている。ゲーム上は「損失」となるが、ゲーム外＝聖書原典を想起する参加者にとっては「宝」は天に保持され、マイナスではないという連想も働きうる。「マナを手放すこと」の意味合いがゲーム上では悲しみに、聖書の教えのレベルでは喜びにもなり得ることに気づきが起こるかどうかは、別途ここだけを取り出しても良いくらいの学びポイントであったかもしれない。

5. サイコロ
 6. ルデヤの紫布が売れる。 10,000マナ受け取る。
 7. 迫害にあう。 1回休み。
 8. 喜び（カードを引く。喜びを追体験）
 9. 話す（好きな弟子）
 10. パウロ、船が難破する。 1,000マナ失う。
- *全員一旦停止：カードを引く。（喜びを追体験）

「私たちの時代」のマスは以下の通りである。

1. 自分の著書が売れる。 10,000マナ受け取る。
2. 話す（私の好きなこと）
3. 喜び（自分の生活の中での喜びについて語る）
4. 素晴らしいパートナーと出会い結婚。 お祝い5,000マナを受け取る。
5. 悲しみ 持っていたラムネ、チョコ、キャンデー、サイコロのマスでゲットしたお菓子、そのすべてを失う。ただし、食べてしまった分は赦される。
6. 礼拝をサボル。資産が減る。10,000マナ失う。
7. 話す（一番の喜び）
8. クイズ(資料5参照)。特別ルール(最初に到着した人が、牧師に申請する) 50,000マナをゲット！
9. 子どもが誕生。お祝いに全員から一人1,000マナずつ受け取る。
10. サイコロ 特別ルール（最初に到着した人が、牧師に申請する）「受けるよりは、与える方が幸いである。」という聖書のことばに従い、サイコロの目が奇数ならばゲームの順番の自分の前の人に、偶数ならば後ろの人に、1,000マナを喜んでプレゼントする。

ゴール。御国へ凱旋！

4) フィードバックシステム

「人生双六ゲーム」では、同じ小グループの他のメンバーに対して、気づいたことを伝えること（フィードバック）が行われた。以下のような指示が榊原牧師からメンバーに伝えられた。

- ・このエクササイズでは、わかちあいの際に、自分だけではなく、他の人の様子や言動について気づいたこと、感じたことを伝えます（フィードバック）。
- ・そのため、すごろくをしている時、パートナー（自分のグループの右隣の人をパートナーとする）を中心に他のプレイヤーの様子・言動をしっかりと見守っててください。そして、他の人の様子・言動を見聞きして生まれた自分の気持ちや感じにも大事に留めておいてください。

5) ふりかえり用紙記入・わかちあい

「人生双六ゲーム」終了後、このプログラムのふりかえりとわかちあいを行った。まず、各自がふりかえり用紙（資料7）を記入し、「人生双六ゲーム」を行ったグループメンバー同士で、ふりかえり用紙に記入したことをわかちあった。ふりかえり用紙記入とわかちあいは合わせて、1時間で実施した。

ふりかえり用紙の項目は、以下のようであった。項目1では、「体験」のマスで、各自が体験した喜びに焦点を合わせた。項目2では、印象的だったマスを1～2個選び、そのマスに止まった時に生まれた気持ちや感じに焦点を合わせた。項目3では、自分以外の人の様子や言動で、印象に残ったことやその時、自分が感じたこと・気づいたことに焦点を合わせた。項目4では、このエクササイズ全体で、一番楽しかったことや悔しかったことに焦点を合わせた。項目5では、このエクササイズを通して、クリスチャンにとって、どのようなことが、どのような喜びだと思ったかに焦点を合わせた。

ふりかえり用紙記入後、「人生双六ゲーム」を行った小グループメンバーで、ふりかえり用紙に記入したことをわかちあった。そのわかちあいを通して、気づきが広がり、深まることや、相互理解が深まることを期待した。

3. 2009年秋のミニ修養ミニ楽養会

3-1. 全体の概要

2009年9月20日（日）に2009年秋のミニ修養ミニ楽養会は実施された。場所は名古屋市内のセミナールームであった。参加者は榊原康成牧師を含め、約28名であった。ノンクリスチャンの高校生が2～3名参加していた。

本ミニ修養ミニ楽養会のテーマは「イエスを信じた時に、聖書の中の出来事を身近に感じて、喜びを知る」であった。プログラム内容の企画・立案は榊原牧師が中心となって行った。プログラムの実施・運営は榊原牧師が行った。

3-2. 「人生双六ゲーム<JESUS GAME>」

1) 「人生双六ゲーム<JESUS GAME>」における「人生双六ゲーム」からの変更点

本節で報告するプログラム「人生双六ゲーム<JESUS GAME>」は2009年春の修養会で実施された「人生双六ゲーム」を基にして、内容変更がなされた。大きな変更は、次の点にあった。①2009春修養会のすごろく盤では、「旧約の時代」、「イエスの時代」、「使徒の時代」、「わたしたちの時代」の4期から構成されていたが、2009秋ミニ修養ミニ楽養会の盤では、「イエスの誕生」、「公生涯前半」、「公生涯後半」、「十字架から召天」とイエスに関する4期となっていた。②2009秋ミニ修養ミニ楽養会の盤では、「一人聖書クイズコース」が追加され、「ノーマルコース」と「一人聖書クイズコース」が選択できた。どちらのコースを選択するかは最初にサイコロを振る時に、参加者が自己申告した。そのた

め、同一小グループ内に、2つの異なるコースを選ぶメンバーが混在する場合があった。聖書箇所について深い知識がある人など、あるメンバーにとっては「一人、聖書クイズコース」の方が、聖書理解をさらに深く学ぶ喜びを感じることができるのではないかと考え、このコースも設定した。

2) 「人生双六ゲーム《JESUS GAME》」の概要・ルール・記録用紙

2)－1－1. 「人生双六ゲーム《JESUS GAME》」の概要とルール(資料9)

「人生双六ゲーム《JESUS GAME》」の概要とルールを以下に記す。

- ・各マスには、聖書のイエス物語が、イエス様が歩まれた順番に従って書かれているので、それを読みながら、ゲームを楽しみ、イエス様の生涯を味わう。
- ・双六を楽しみ、ゴール後にグループの全員でゲーム中に感じたことをシェアする。
- ・サイコロを振り、御国を目指してマスを進める。
- ・自分が止ったマスの所で、その時感じた「喜び」を「記録用紙」(資料10または資料11)に記入する。
- ・マスに書かれている指示に従う。その時の気持ちを「記録用紙」(資料10または資料11)に書き留める。
- ・最初の手持ち金額は、3,000マナである(資料4参照)。
- ・ゴール後に、ルールに従って、マナが優勝賞金として与えられる。
- ・各マスでは、マナやお菓子が受け取れる(失う場合もある)。たくさんゲットしてください。
- ・最終的に、一番の多くのマナを所有した人が優勝となる。
- ・御国へゴールした後で、みんなで喜びをシェアする。

2)－1－2. 記録用紙

体験して、自分の心に湧き起こってきた思いを忘れてしまわないように、とまったマスごとに「記録用紙」に記入した。メンバーは「記録用紙」に、自分の喜び度を★印の数で記すとともに、そのマスで起こった自分の気持ちや感じを簡単なキーワードでメモした。「ノーマルコース」の記録用紙は資料10に、「一人聖書クイズコース」の記録用紙は資料11に示した。

2)－2. コース選択

「人生双六ゲーム《JESUS GAME》」のコース選択(資料8参照)について記す。

- ・スタートの所では、「ノーマルコース」と「一人聖書クイズコース」が選択できる。
- ・一人聖書クイズコースは、ノーマルコースより、たくさんマナをゲットできるチャンスがある。
- ・ノーマルコースは8目のサイコロを使用するが、聖書クイズコースは、3目のサイコロを使用するので、ゴールが遅れる可能性が高くなる(資料4参照)。

2) - 3. 特別なマス

「人生双六ゲーム《JESUS GAME》」の特別なマスについて記す。

- ・『クイズ』ここに誰かが止ったら、問題の一つを選び、グループの全員で考える。誰か一人が正解すればグループ全員がお菓子を獲得できる。
- ・『喜び』1,000マナと、お菓子を一つ獲得できる。
- ・『サイコロ』『○×』のサイコロを二回振り、出た目によってマナを獲得できる(資料4参照)。
 - 2回：5,000マナ、○1回：1,000マナ、×2回：0マナ
- ・『サイコロ special』聖書のことばには「後の者が先になる」⁴とある。それを実践してマナを獲得できる。
 - 2回：自分が5,000マナをもらえる。
 - 1回：サイコロを振る順番が、自分の前の人が、5,000マナをもらえる。
 - ×2回：サイコロを振る順番が、自分の後ろの人が、10,000マナをもらえる。
- ・『東方の博士』遠くからイエスの誕生のお祝いに駆けつけた。喜びを表して、サイコロの数字×1,000マナを獲得できる。

2) - 4. 大事なマス『体験』

「人生双六ゲーム《JESUS GAME》」の大事なマスである『体験』について記す。

- ・イエスの誕生から十字架の死までの物語で、3ヶ所の体験をする。
- ・グループで最初の誰かが体験のマスを通過する時、何目が出ててもスルーせずに必ず止まる。その時、グループの全員がゲームを中断し、一緒に体験する。
- ・初めに、リーダーが指定された聖書の箇所を読む。
- ・一人一人、その物語の中心的な人物になりきって、その時の気持ちを想像し、書き留める。御国へゴールした後で、感じたことをシェアする。

⁴ このルールは「後の者が先になり、先の者が後になります」(マタイの福音書20章16節、ルカの福音書13章30節、マタイの福音書19章30節)という聖書のことばにちなんでいる。これらの聖書箇所の本来の意味は、脚注2に記したように、順序に関するものである。しかし、本ゲームでは、聖書箇所からの正しい適用というよりは、あくまで遊び的・ゲーム的な要素として、このようなルールを導入した。

3)「人生双六ゲーム《JESUS GAME》」の盤と項目

2009年秋の「ミニ修養ミニ楽養会」で実施した「人生双六ゲーム《JESUS GAME》」の盤を資料8に示した。2009年春の盤と2009年秋の盤では、マスの内容は異なっているが、すごろくとしてのおおまかな形としては類似している。

「人生双六ゲーム《JESUS GAME》」の盤のマスは以下の通りである。

3) - 1. ノーマルコース

イエス誕生

- | | |
|-------------------|------------------|
| 1. 天使がマリヤに告げる | +1,000マナ |
| 2. 馬小屋で生まれる | +10,000マナ |
| 3. サイコロ | |
| 4. 羊飼い、救い主の誕生を知る | +3,000マナ |
| 5. クイズ | グループで回答 |
| 6. 東方の博士たちからの贈り物 | サイコロのマス目×1,000マナ |
| 7. 喜び | お菓子をゲット |
| 8. イエス12才のお祝い | +12,000マナ |
| 9. 体験：カナの婚礼・最初の奇蹟 | |

公生涯前半

- | | |
|-------------------|-----------|
| 1. 百人隊長のしもべが癒される | +3,000マナ |
| 2. サイコロ | |
| 3. イエス、罪人たちと食事をする | +1,000マナ |
| 4. ヤイロの娘が生き返る | +12,000マナ |
| 5. クイズ | グループで回答 |
| 6. 2匹の魚と5つのパンの奇蹟 | +3,000マナ |
| 7. ベテロ、湖を歩くが沈みかける | -1,000マナ |
| 8. イエスの姿が変貌・輝く | +10,000マナ |
| 9. 体験：ザアカイ | |

公生涯後半

- | | |
|------------------|-----------|
| 1. 良いサマリヤ人、旅人を救助 | +5,000マナ |
| 2. クイズ | グループで回答 |
| 3. 盲人がイエスに癒される | +1,000マナ |
| 4. 羊飼い、迷子の羊を探し出す | +10,000マナ |
| 5. サイコロ | |
| 6. イエス、幼子を祝福する | +1,000マナ |

- 7. イエス、ロバの子の背に乗って入城 +10,000マナ
- 8. 果実のないいちじくを主が呪う -3,000マナ
- 9. 体験：十字架の下で見ていたマグダラのマリヤ

十字架から召天

- 1. イエス、十字架で処刑。死。 -10,000マナ
- 2. 悲しみの土曜日 全マナ放出
- 3. マリヤ空っぽの墓を発見 +10,000マナ
- 4. クイズ グループで回答
- 5. 喜び お菓子をゲット
- 6. サイコロ Special
- 7. イエス、弟子たちを祝福する +5,000マナ
- 8. イエス、弟子たちの前で、天に昇る！ +10,000マナ

3) -2. 一人、聖書クイズコース

「一人、聖書クイズコース」のマスはどれもクイズが出題された。各マスのクイズと解答を以下に挙げる。

a.

- ・ イエスが生まれた町の名前は？
答：ベツレヘム／ダビデの町（どちらでも正解とする。）
- ・ イエスが生まれたベツレヘムは、別名、何の町と呼ばれている？
答：ダビデの町
- ・ イエスは、イスラエルの何部族の出身？
答：ユダ部族

b.

- ・ イザヤ書9章では、イエスはどのような方として生まれると書いてある？
答：不思議な助言者。力ある神。永遠の父。平和の君。
- ・ イエスが生まれた時のイスラエルの王の名前は？
答：ヘロデ王
- ・ イエスの両親は何故？臨月に旅などしたのか？
答：住民登録の命令で、出身地へ行った。

サイコロクイズ.「難問奇問です！」

*サイコロを振ります。1なら、自分で答えます。2なら、同じグループの誰かを解答者に指名します。3なら、今日、参加している自分のグループ以外の誰かを解答者に指名します。

賞金は10,000マナです。2、3の場合は、解答者にも同額10,000マナが与えられます。

- ・住民登録をするように命じたのは、どこの国の皇帝か？

答：ローマ

- ・住民登録をするように命じた皇帝の名前は？

答：アウグスト

- ・マリヤに、イエスをみごもったと伝えた、御使いの名前は？

答：ガブリエル

- ・イエス誕生をマリヤに伝えたのは御使い、ガブリエルでした。他に新約聖書に登場する御使いの名前を上げてください。

答：ミカエル（ユダの手紙）

C.

- ・イエス誕生に駆けつけた東方の博士は、何に導かれて旅をしてきましたか？

答：星

- ・イエス誕生に駆けつけた東方の博士は、お祝いの贈り物に何を持ってきましたか？

答：黄金、乳香、没薬

- ・イエス誕生に駆けつけた東方の博士は、通常、何人だと言われていますか？

答：三人

グループクイズ.

*皆で答えてお菓子をゲット！ここは一人一個です！！

- ・イエスとは、ギリシャ語の読みをした名前です。では、ヘブル語の読みではどんな名前？

答：イエシュア／ヨシュア

- ・イエスはどこの国の人？

答：ユダヤ人。イスラエル人。

- ・イエスの家が代々引き継いでいる家業、お仕事は何？

答：大工

- ・イエスの地上での弟たちの中から一人、名前を言ってください？

答：ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダ

Dobon .

Dobon！ 悪名高きヘロデ王。イエスを殺そうとして国中で殺戦を始める。
：10,000マナを失う。

e.

* 次の文章は正しいか？間違っているか？答えよ。

・マルコ 8 章20節

「四千人に七つのパンを裂いて上げたときは、パン切れを取り集めて幾つのかごがいっぱいになりましたか。」彼らは答えた。「七つです。」

答：正しい。

・マタイ 14章21節

「食べた者は、男女と子ども合わせて、五千人ほどであった。」

答：間違い。

正：「食べた者は、女と子どもを除いて、男五千人ほどであった。」

・マタイ 14章17節

しかし、弟子たちはイエスに言った。

「ここには、パンが二つと魚が五匹よりほかありません。」

答：間違い。

正：しかし、弟子たちはイエスに言った。

「ここには、パンが五つと魚が二匹よりほかありません。」

f.

・イエスが生まれて八日後。両親はユダヤの律法に従ってあることをしました。それは何？

答：割礼

・イエスが生まれて最初にエルサレムの神殿に上った時。そこに二人の人がいました。その名は？

答：シメオン。女預言者アンナ。

・イエスが12歳の時、エルサレムへ巡礼に上った時に、イエスが居なくなっていました。どこに居たのでしょうか。

答：宮で、教師たちの真ん中にいた。

4) 体験のマス

体験のマスでは、イエスの誕生から十字架の死までの物語で、3ヶ所の体験をする。その物語の中心的人物になりきって、その時の気持ちを想像し、味わい、書き留める。御国へゴールした後で、感じたことをシェアする。以下の箇所が取り上げられた。

1. カナの婚礼・最初の奇蹟

ヨハネの福音書 2 章 1 - 11 節

体験：手伝いの者になる。

ぶどう酒が、足りなくなったことを知っていた。
水がめには、ただの水をかめ一杯に入れたことを目撃、手伝っている。
水が、美味しい上等の（水などの混ざり物じゃない）ぶどう酒になったことを知っている。

2. ザアカイ

ルカの福音書19章 1－10節

体験：取税人ザアカイ

取税人とは、イスラエル人でありながら、支配者であるローマ帝国のためにローマの税金を集める人のこと。人びとに敵対視され、嫌われている。

そればかりか職務を利用して、税金を誤魔化して、仲間であるイスラエル人から盗んで私腹を肥やしている。

背が低くて、イエスが見えなかった。

イエスが、彼の名前を知っていた。名前を親しく呼んでくれた。

3. 十字架の間近でイエスが十字架で死ぬのを目撃したマグダラのマリヤ

マタイの福音書 27章 27－61節

体験：マグダラのマリヤ

人びとに罵られ、裏切られる場面も目撃。

ムチ打たれ、既に瀕死の重傷のイエスを見守る。十字架で死ぬところを最後まで見ていた。

5) クイズのマス

クイズのマスのルールや内容について、以下に記す。

クイズのマスにグループメンバーが止ったら、問題を一つ選び、グループの全員で考える。誰か一人が正解すればグループ全員がお菓子を獲得できる。クイズには、それぞれ「簡単」・「普通」・「難しい」の三つがある。

「簡単」は、ヒント付きで、賞品のお菓子が一人1個。

「普通」は、賞品のお菓子が一人2個。

「難問」は、賞品のお菓子が一人3個。

1－1.

問：馬小屋で、生まれたばかりのイエス様が眠っていたのはどこの中だっ

たでしょう？

「簡単」：ヒント：「***おけ」の中。

答：かいばおけ

「普通」：ヒントなしで、同じクイズ。

答：かいばおけ

「難問」：生まれたばかりのイエス様が、寝かされていたのは、飼い葉桶だと言われます。さて、その材質は何ですか？ 何でできていましたか？

答：石（木材ではない）

1-2.

問：イエスを身ごもるとマリヤに伝えたのは誰？

「簡単」：ヒント：神様の使いのこと。

答：御使い

「普通」：ヒントなし。

答：御使い

「難問」：イエスの誕生をマリヤに告知したのは御使いです。その名前は？

答：ガブリエル

1-3.

問：イエスは、生まれてすぐにどこ国へ移り住んだか？

「簡単」：ヒント：昔、イスラエル人が脱出して来た国。

答：エジプト

「普通」：ヒントなし。

答：エジプト

「難問」：イエスが両親と共に住んでいた故郷は、ガリラヤの何という町？

答：ナザレ

2-1.

「簡単」：12年間病に苦しんでいたのは誰？

ヒント：女性？ 男性？

答：女性

「普通」：12年間病に苦しんでいた女性が癒されたのは、イエス様の何に触ったからですか？

答：着物のふさ

「難問」：イエス様の着物のふさに触って癒された女性がいます。この女性が病で苦しんでいたのは、何年間でしたか？

答：12年間

2-2.

「簡単」：イエスの家業は何？ 故郷の人びとはイエスを* *と呼んでいた。

ヒント：生活するのに必要な、大きなものを作る人。

答：大工

「普通」：イエスの家業は何？ 故郷の人びとはイエスを* *と呼んでいた。

答：大工

「難問」：イエスの弟たちの名前？ 二人答える。

答：ヤコブ。ヨセ。ユダ。シモン。

3-1.

「簡単」：イエス様が神が私たちをととても大切な存在として愛してくれていることを示すために語れたお話しで、比較された雀は、市場で5羽を幾らで売っていますか？

ヒント：二羽で、1 アサリオン。5羽目はおまけ。

答：2 アサリオン。

「普通」：イエス様が神が私たちをととても大切な存在として愛してくれていることを示すために語れたお話しで、比較された雀は、市場で5羽を幾らで売っていますか？ ヒントなし。

答：2 アサリオン。

「難問」：何故？ ルカ 11：6 で、2羽、1 アサリオンの雀を、5羽で、2 アサリオン（計算が合わない）で売っていたのか？ そのことは私にとってどのような意味がありますか？

答：おまけだから。おまけの雀さえ神様は大切に養ってくださるのだから、私たちはもっと大切に扱われている。と、教えてくれた。

3-2.

「簡単」：一人の女性が、イエスの頭に何かを注ぎました。それは葬儀、葬りの準備にもなりました。彼女は、何を注ぎましたか？

ヒント：良い香りのするもの。

答：高価なナルド油という香油

「普通」：一人の女性が、イエスの頭に何かを注ぎました。それは葬儀、葬りの準備にもなりました。彼女は、何を注ぎましたか？

ヒントなし。

答：高価なナルド油という香油

「難問」：女性がイエスに近づきました。涙を流して何をしました？ 彼女の髪の毛を使って何をしましたか？

答：涙でイエスの御足をぬらし、髪の毛で拭った。

4-1.

「簡単」：イエス様が墓からよみがえったのは、何曜日？

ヒント：十字架の処刑は金曜日。この日を記念して、私たちは礼拝をしています。

答：日曜日

「普通」：イエス様がよみがえったのは、日曜日。十字架で処刑されたのは、金曜日でした。三日目によみがえったと言うが、計算が合わないのは何故？

答：ユダヤでは、当日を一日目と数えるから。金、土、日で、三日目。計算は合ってる。

「難問」：イエスがよみがえられて、イエスの身体はなく、墓は空っぽでした。イエスがよみがえった証拠ともなった。墓の中に残されていた物は何でしたか？

答：イエスの身体に巻かれていた亜麻布。

4-2.

「簡単」：復活、十字架で処刑されたけれども、よみがえったイエスは弟子たちの所に来てくれました。その時、不思議な形でイエスは来ました。それは何？

ヒント：家の扉はどうなっていた。

答：戸が閉まっていたのに、家の中に現れた。

「普通」：復活したイエスは、弟子たちと何日間過ごして下さった。

答：40日

「難問」：復活したイエスと、お墓のところで再会したのはマリヤでした。二人はどんな会話をした。一言ずつ。

答：「マリヤ」「ラボニ」

6) ふりかえり用紙記入・わかちあい

「人生双六ゲーム《JESUS GAME》」終了後、このプログラムのふりかえりとわかちあいを行った。まず、各自がふりかえり用紙（資料12）を記入し、「人生双六ゲーム《JESUS GAME》」を行ったグループメンバー同士で、ふりかえり用紙に記入したことをわかちあった。ふりかえり用紙記入とわかちあいは合わせて、約30分で実施した。

ふりかえり用紙の項目は、以下のようであった。項目1では、「体験」（「カナの婚礼・最初の奇蹟」、「エリコの町のザアカイ」、「イエスの十字架の死」）のマスで、各自が体験した喜びに焦点を合わせた。項目2では、印象的だった

マス を 1 ～ 2 個 選 び、そ の マス に 止 ま っ た 時 に 生 ま れ た 気 持 ち や 感 じ に 焦 点 を 合 わ せ た。項 目 3 で は、自 分 以 外 の 人 の 様 子 や 言 動 で、印 象 に 残 っ た こ と や そ の 時、自 分 が 感 じ た こ と ・ 気 づ い た こ と に 焦 点 を 合 わ せ た。項 目 4 で は、「人 生 双 六 ゲー ム ≪ JESUS GAME ≫」全 体 で、一 番 楽 し か っ た こ と や 悔 し か っ た こ と に 焦 点 を 合 わ せ た。項 目 5 で は、こ の エ ク サ サ イ ズ を 通 し て、人 生 で 起 き る ど の よ う な こ と が、ど の よ う な 喜 び だ と 思 っ た か に 焦 点 を 合 わ せ た。

ふ り か え り 用 紙 に 記 入 と そ の わ か ち あ い を 通 し て、気 づ き が 深 ま り、広 が る こ と や、相 互 理 解 が 深 ま る こ と を 期 待 し た。

4. 検 討

2009 年 春 の 修 養 会 に お い て 実 施 し た 「人 生 双 六 ゲー ム」を 企 画 ・ 立 案 す る に あ た っ て 密 接 に 関 連 し て い る こ と は、2009 年 春 の 修 養 会 の テー マ 「キ リ ス チ ャ ン と し て の 喜 び」と、「人 生 双 六 ゲー ム」の ね ら い と 参 加 者 の 構 成 で あ る。「人 生 双 六 ゲー ム」の ね ら い は、「① 楽 し み な が ら、聖 書 に 記 さ れ た 様 々 な 出 来 事 を 体 験 す る。② 体 験 を 通 し て、キ リ ス チ ャ ン と し て の 喜 び を 味 わ い、深 め る」で あ っ た。ま た、高 校 生 や 大 学 生 が 参 加 す る こ と に な っ て い た。こ れ ら の 要 因 が 十 分 に 成 立 す る プ ロ グ ラ ム を 考 え て い く 上 で、本 プ ロ グ ラ ム が 考 案 さ れ た。「人 生 双 六 ゲー ム」は、参 加 者 全 員 が 楽 し み つ つ、体 験 を 通 し て キ リ ス チ ャ ン と し て の 喜 び を 味 わ い、深 め る こ と が で き る の で は な い か と、筆 者 ら は 考 え た。

ね ら い と プ ロ グ ラ ム 内 容 と の 関 連 に つ い て 記 す。ね ら い の 「聖 書 に 記 さ れ た 様 々 な 出 来 事 を 体 験 す る」を 実 現 す る た め に、「人 生 双 六 ゲー ム」の マ ス に は、聖 書 箇 所 が 取 り 上 げ ら れ て い る。ね ら い で あ る 「体 験 を 通 し て、キ リ ス チ ャ ン と し て の 喜 び を 味 わ い、深 め る」た め に、マ ス の 内 容 は 喜 び あ る い は そ の 逆 の 悲 し み に 関 す る 内 容 と な っ て い る。以 下 に よ り 詳 細 に 検 討 す る。

す ぐ ろ く と い う 遊 び の 要 素 は、ウォーミングアップ・プログラムの要素を含み、「人 生 双 六 ゲー ム」の ね ら い の 一 部 で あ る 「楽 し み な が ら」の 実 現 で あ り、参 加 者 が グ ル ー プ ワー ク に 没 入 し、そ の 体 験 か ら 学 ぶ た め の レ デ ィ ネ ス を 高 め る 効 果 が あ る と 考 え ら れ る。ワー ク シ ョ ッ プ や ラ ボ ラ ト リ ー 方 式 の 体 験 学 習 で は、プ ロ グ ラ ム の 冒 頭 に ウォーミングアップ・プログラムを実施することがある。ウォーミングアップ・プログラムを体験することによって、参加者は緊張感がほぐれ、心をオープンにしやすくなり、お互いの関係に親しみが生じやすくなる。

「人 生 双 六 ゲー ム」の ね ら い 「聖 書 に 記 さ れ た 様 々 な 出 来 事 を 体 験 す る」に 関 し て、追 体 験 と い う 観 点 か ら 検 討 す る。参 加 者 は、「人 生 双 六 ゲー ム」に お い て、ゴ ー ル で あ る 御 国 へ 向 か っ て、コ マ を 進 め て い く。そ の 過 程 で、参 加 者 は、マ ス に あ る 聖 書 に 記 さ れ た 様 々 な 出 来 事 に 止 ま り、「マ ナ」を 得 る と い う 体 験 を す る。こ の 体 験 は、「体 験 の マ ス」ほ ど に は じ っ く り と 喜 び を 味 わ う と い う こ と が で き な い と し て も、聖 書 に 記 さ れ た 様 々 な 出 来 事 に よ る 喜 び の 追 体

験という意味をもっていると考えることができる。聖書の場面を思い起こす・想像することを通して、参加者は聖書箇所のある出来事を疑似体験することができる。さらに、ゲーム仮想上の報酬であるマナを得るという嬉しさを通して、喜びの体験として想起できると考えた。

参加者は、2009年春の「人生双六ゲーム」では、「旧約の時代」から「わたしたちの時代」までの時代の流れを、2009年秋の「人生双六ゲーム《JESUS GAME》」ではイエスの誕生から召天までの流れを、追体験することになる。その追体験は、キリスト教のモチーフの絵画展で絵を順に観てまわるような体験、あるいはカトリック教会にある聖書箇所のステンドグラス⁵を順に観ていくような体験や、十字架の道行き (Way of the Cross, Stations of the Cross)⁶ (エルサレムでイエスが十字架を担って歩んだゴルゴダまでの順路に、その際受けたそれぞれの苦しみを記念して祈る場である留 (Station) を設け、それを徒歩で巡りながら祈るカトリックの礼拝形式の一つ。留は壁の上の十字架の標識と番号で示される場合と、それらに個々の場面を描写した絵や浮彫が添えられる場合がある。新カトリック大事典 第3巻, 2002, p.141; オックスフォード キリスト教美術・建築事典, 2013, pp.253-254) などと、いくぶん似た体験と言えるのかもしれない。「人生双六ゲーム」でマスに止まりマナをもらう体験は、絵画やステンドグラスなどを観ていく体験に比べれば、急ぎ足の体験とはなるものの、イメージによる追体験の一種と言えよう。絵画やステンドグラスを観ることを通して、あるいは「人生双六ゲーム」のマスに止まり、その聖書箇所を見聞きすることを通して、その人はその聖書箇所の出来事に思いをはせる内的体験をしていると考えることもできよう。

聖書箇所の追体験をもっとじっくり味わえるのが「体験のマス」における体験や「喜び」のマスにおける喜びの追体験である。「体験のマス」では、チーム全員は、自分が、その登場人物になったつもりで、その聖書箇所を聞き、記されていることを、その人物として体験する。「登場人物になったつもり」という指示があるように、ここで参加者は、その聖書箇所を過去の歴史的事実として第三者的に聞くのではなく、あたかも自分に起こったこととして体験することが求められている。水草 (2022) は、聖書啓示における真理の観念化によっ

⁵ 「ステンドグラスの図像構成は決して創意に富んだものではなく、文字の読めない人々のための、聖書や福音書や聖人の生涯伝などの生き生きとした表現として役立てられるものであった」(オックスフォードキリスト教美術・建築事典, 2013, p.302)

⁶ 留の数は、現在では、次の14に固定されている。①ピラトによる死刑の宣告、②十字架を担う、③初めて倒れる、④母マリアと会う、⑤キレネのシモンに助けられる、⑥ヴェロニカが布で顔をぬぐうとそこに顔が写る、⑦再び倒れる、⑧エルサレムの女性たちを慰める、⑨3度倒れる、⑩衣をはがされる、⑪釘で十字架につけられる、⑫十字架上で死ぬ、⑬十字架から降ろされる、⑭墓に葬られる。しかし、現代では、神学的・典礼的立場から、死に対する勝利を意味する主の復活の黙想が付加されるのが望ましいとされている(新カトリック大事典第3巻, 2002, p.141; オックスフォード キリスト教美術・建築事典, 2013, pp.253-254)。

て、生ける神への畏れと愛が欠ける危険性を指摘し、それを避けるための一方法として、「その教理の根拠である聖書本文に立ち返って、その教理が抽出された歴史的文脈において啓示の出来事を味わい直し、神の前でこれらを思いめぐらせること」を挙げる。そして、ある聖書箇所的具体状況やそこに記された人物の発言や行動に思いをめぐらせることを推奨している (pp.31-32)。「人生双六ゲーム」や「人生双六ゲーム《JESUS GAME》」における「体験のマス」は、彼の言う「啓示の出来事を味わい直し、神の前でこれらを思いめぐらせること」を実現しようとする一形態であると言える。

マスを進め、時には「喜び」のマスにおける喜びの追体験を行い、各期の区切りで「体験のマス」がある「人生双六ゲーム」と十字架の道行きを比較する時、十字架の道行きの場合留をたどるために使う身体部位は主に足と目となり、「人生双六ゲーム」では主に手と頭となる。身体性という意味での動きは十字架の道行きの方がはるかにダイナミックだと考えることができる。一方、内省的なイメージの喚起に関しては、十字架の道行きでは与えられた絵がすでにあるのに対して、「人生双六ゲーム」では自力で主体的に聖書箇所のイメージを生み出すことが求められるという意味で内的なダイナミズムが大きいと考えられることもできよう。

高校生や大学生が参加することになっていたことも、すごろくという遊びを基にしたプログラムを企画・立案した一要因であった。青年にとっても成人にとってもなじみのあるすごろくという遊びを用いたプログラムは、プログラムに参加する上での心理的なハードルを下げ、青年と成人が心理的にフラットな関係性を築き、体験から学ぶことを促すと考えた。

2009年秋のミニ修養ミニ楽養会では、より多くの高校生、それもノンクリスチャンの高校生が参加する予定になっており、彼ら彼女らにとっても普段から礼拝に出席しているクリスチャンにとっても、意義を見出せるプログラムにする必要があった。そのため、①ノンクリスチャンの高校生にとっても、内容が複雑になりすぎないように「人生双六ゲーム」に比べて、取り上げる期間をイエスの誕生から召天とシンプルにすると同時に、②ベテランのクリスチャンが自分の学びのためによりよい選択ができ、ノーマルコースでの道程等は既知のことも多いが、それをノンクリスチャンである参加者とともにたどる追体験的喜悦に加えて、より聖書理解を深める学びの喜びを感じることができるようにと、「一人、聖書クイズコース」が設定された。この設定からは、「異質な道を行く人の同時存在」がグループの中でもたらず影響が仮定できる。その影響や効果については、教育学的、グループダイナミクスの考察対象になると思われる。これについては、のちの論考に譲る。

記録用紙記入やふりかえり用紙記入、わかちあいについて検討する。「人生双六ゲーム」、「人生双六ゲーム《JESUS GAME》」では、自分がとまったマスにおける、喜び度を★の数とそのマスでの自分の気持ちや感じを記すことに

した。それは、ねらいを達成するためには、各マスにおける自分の気持ちや感じに目を向け、それを忘れてしまわないように記録しておくことが有効だと考えたためである。

さらに、ふりかえり用紙に記入することを通して、「人生双六ゲーム」のねらいが達成できることを目指した。「体験」のマスで、あなたがカードの登場人物であった時、どのような喜びがありましたか？」や「あなたが止まったマスの中で、印象的だったマスを1～2個選んでください。そのマスに止まった時に、あなたの中に生まれた気持ちや感じはどのようなものでしたか？」や「このエクササイズ全体の中で、一番楽しかったことや悔しかったことは…」というふりかえり用紙の項目を記入することを通して、参加者は、自分が体験した喜びの気持ちや感じを思い出し、それを拾い上げ、それらに目を向けることができる。さらに、最後に「クリスチャンにとって、どのようなことが、どのような喜びだと思いますか？」を記すことを通して、プログラムにおける体験や気づきを総合・統合して、クリスチャンにとっての喜びについて、より深く考えることを促せると考えられた。

2009年秋の「人生双六ゲーム《JESUS GAME》」の場合、ノンクリスチャンの参加者が少なくなかったため、ふりかえり用紙の最後の項目は「人生で起きる、どのようなことが、喜びとなり、それはどのような喜びだと思いますか？」とした。ノンクリスチャンでもクリスチャンでも、ふりかえる意味のある項目にするために、2009年春の項目「クリスチャンにとって、どのようなことが、どのような喜びだと思いますか？」から変更した。

ふりかえり用紙の項目「自分以外の人の様子や言動で、印象に残ったことはどのようなことでしたか？」を記し、それをわかちあうことを通して、お互いがフィードバックし合うことができるように工夫した。このフィードバックによって、「ジョハリの窓」における「盲点」の領域を狭め、「開放」の領域を広げることができると考えられた（大塚, 2024, pp.20-25）。つまり、グループメンバーから自分について気づいたことを伝えてもらうことを通して、自分では気づいていなかった自分の特徴や体験の内容について気づきを生むことができる可能性が高まると考えられた。フィードバックをもらうことによって、気づきが広がり、深まることはグループワークにおける学びにおいて重要な要素であるため、このような構造を準備した。

備考

「2. 2009年春の修養会」と「3. 2009年秋のミニ修養ミニ楽養会」は榊原康成牧師作成の資料を基に、楠本和彦が文章化した。それ以外の箇所は楠本が草稿を記した。本論全体を榊原牧師と丹羽牧代が確認し、その修正意見に沿って、加筆修正を行った。

本論文内の実習を使用する場合は、本論文の末尾にある南山大学人間関係研究センター「実習使用規定」に従ってください。

引用文献：

荒井献・池田裕（2004）. 聖書名言辞典 講談社.

楠本和彦・丹羽牧代（2008）. 実習「閉ざされた村」人間関係研究（南山大学人間関係研究センター）. 7.141-154.

水草修治（2022）. 新・神を愛するための神学講座 地引網出版.

Murray, P., & Murray, L. (1996). *The Oxford companion to Christian art and architecture* Oxford University Press.

（マレイ, p.・マレイ, L. 中森義宗（監訳）（2013）. オックスフォード キリスト教美術・建築事典 東信堂）

丹羽牧代・楠本和彦（2021）. ワークショップ形式の修養会の意義と課題に関する検討 ―2018年春の修養会の実践報告と検討を中心に― 人間関係研究（南山大学人間関係研究センター）. 20. 87-129.

大塚弥生（2024）. フィードバックと自己成長 土屋耕治・楠本和彦・中村和彦（編）人間関係の学び方 ―人間性豊かな関係を育む「ラボラトリー方式の体験学習」の理論と実践― ナカニシヤ出版.

榊原康成・楠本和彦・丹羽牧代（2023）. ワークショップ形式によるプロテスタント教会の修養会に関する実践報告と検討 人間関係研究（南山大学人間関係研究センター）. 23. 51-80.

榊原康成・楠本和彦・丹羽牧代（2024）. プロテスタント教会の修養会に関する実践報告 人間関係研究（南山大学人間関係研究センター）. 24. 85-106.

新カトリック大事典編纂委員会（2002）. 新カトリック大事典 第3巻 研究社.

新日本聖書刊行会（2017）. 聖書 新改訳2017. いのちのことば社.

資料 1

CRC修養会一覧（榊原・楠本・丹羽, 2024に追記・修正）

時期	長さ	テーマ・主な内容	学び方・実習のタイプ
2004 年秋	1泊2日	信徒自身の中にある聖書の言葉を探求する/赦し	聖書クイズ/ケーススタディ（事例を用いたディスカッション）/価値観の明確化/牧師の講解説教
2005 年秋	1泊2日	礼拝をすることの大切さ・礼拝の意味（日曜日の誘惑/無人島へ一つだけもっていくもの/何故、礼拝するのか？（礼拝のプログラムを一つだけ残すとしたら）/イエスと自分との距離	ロールプレイとディベート/図式化/価値観の明確化/牧師の講解説教
2006 年秋	1泊2日	祈り(聖書の中での祈り、実生活の中での自分の祈り)	個人への問いかけ・個人の気づきとわかちあい/祈りの必要性についてのディベート/牧師の講解説教
2007 年春	半日	日々のデヴォーション(祈り)の学び	平日と日曜日の祈りの時間の図式化とわかちあい/牧師の講解説教
2007 年秋	1泊2日	葬儀について考える、祈り、人や社会との約束について考える（実習「閉ざされた村」）	個人への問いかけ・個人の気づきとわかちあい/牧師の講解説教
2008 年秋	1泊2日	人生の最期の時どうする？（最後の食事、処刑される時？）	個人への問いかけ・個人の気づきとわかちあい/牧師の講解説教
2009 年春	1泊2日	聖書の出来事を知る/信徒としての喜びに気づく/聖書にある喜びの追体験	聖書すごろく/ロールプレイ/牧師の講解説教
2009 年秋	半日	イエス様を信じた時に、聖書の中の出来事を身近に感じて、喜びを知る	聖書すごろく/牧師の講解説教
2010 年春	1泊2日	聖書の中での出会いによって起こったこと、信徒としての出会いによって起こること（イエス（または教会）との出会いの現在・過去・未来/聖書の登場人々のイエスとの出会い）	小グループやペアにおける気づきの自己開示とフィードバック/牧師の講解説教
2010 年秋	半日	自分や他者の喜びやお互いの喜びの違いに気づく	カードへの記入・カードのわかちあい、個人の気づきとペアでのわかちあい/牧師の講解説教

2011 年春	1泊2日	賛美について理解を深める（賛美を聴いて、その気持ちを表す/新しい賛美(歌詞)を作る）	小グループにおける気づきの自己開示とフィードバック/賛美（歌詞）の創作/牧師の講解説教
2012 年春	1泊2日	神を知り自分を知る（自分たちの体験を基に、神や神と人の関わりについて考える）	KJ法的ワーク、気づきの自己開示とフィードバック/牧師の講解説教
2013 年春	1泊2日	神に従った聖書の人物の心を知る/なぞかけ（人物・物・オチ）/聖書の人物のなりきり演劇/自分(聖書の人物)ならどうする？	なぞがけ遊び/ロールプレイ/牧師の講解説教
2013 年秋	半日	自分の性質を知る、その自分がどのように神に仕えるのか（気質分析）	質問項目に答える、各自の気質の特徴を知る、わかちあい/牧師の講解説教
2014 年春	1日	自分の隠れた才能（賜物）を知る、その自分がどのように教会に仕えるのか（賜物発見）	質問項目に答える、わかちあい/牧師の講解説教
2014 年秋	半日	4コマまんが/友人のために何をするか	4コマまんがの吹き出しに言葉を創作する、そのまんがを演じる/牧師の講解説教
2015 年秋	半日	祈り/危機の時に何を期待し、何を祈るべきか	塩狩峠の各登場人物となって祈る内容を探る/牧師の講解説教
2016 年春	半日	喜びに思いをはせる	聖書の主人公や脇役の喜びについて想像し、ストーリーを創作する/牧師の講解説教
2017 年春	半日	飛び出す絵本/映像、仕掛け絵本によって自分に飛び込んでくる内容を受け止める	DVD：スーパーブックを鑑賞/牧師の講解説教
2018 年春	半日	神が作ってくださっている自分の理解を深める、実習「決断の時」	個人の選択、小グループにおける気づきの自己開示とフィードバック/牧師の講解説教
2022 年春	半日	実習「聖霊の働きについての学びとわかちあい」	個人の選択、KJ法的ワーク/小グループにおける経験のわかちあい（証）/牧師の講解説教
2024 年秋	半日	実習「礼拝のプログラムを一つだけ残すとしたら」	価値観の明確化/牧師の講解説教

資料2

人生双六ゲーム 手順書

ねらい：・楽しみながら、聖書に記された様々な出来事を体験する。
・体験を通して、クリスチャンとしての喜びを味わい、深める。

手順：

1. 進行

- 1) 賛美など：15分
- 2) 双六ゲーム：1時間
- 3) ふりかえり・わかちあい：1時間
- 4) 全体でのわかちあい：15分

2. 「人生双六ゲーム」のルール

<全体のルール>

- ・御国へ向かってコマを進める。御国へ入った順番を確定する。
- ・各マスに書いてあるルールに従う。特別ルール等は、その都度、牧師から説明を受ける。
- ・御国へゴール後の、合計金額で、個人総合1位を決定する。
- ・御国へゴール後の、グループ合計金額で、3グループの総合1位を決定する。
- ・御国へ到着した時、
 - 1位でゴールした人が10,000マナをゲット。
 - 2～4位でゴールした人は、5,000マナをゲット。御国に凱旋した喜びを味わいましょう。
 - 5位で最後にゴール。(特別ルールを適用する)

「サイコロ（バツとマルが出る）のコマのルール」を記す。

- ・サイコロを2回振る。
 - 2回とも○ →お菓子和1,000マナをゲット。
 - 1回、○ →お菓子ををゲット。
 - 2回とも× →ごーんねん。なにもなし！！
- ・私たちの時代のサイコロ（最後のサイコロ）のみ、特別ルールを適用。

<クイズのルール>

- ・牧師の所にあるクイズのカードをひいてくる。
- ・カードに記されているクイズに答える。特別ルールが記載されていれば、それに従う。
- ・クイズに正解すれば、1,000マナをゲット。

- ・最後のクイズのみ、特別ルールを適用。(最初に到着した人が、牧師に申請する)

＜体験のマス＞

- ・チームで誰かがそれぞれの期の「体験」に進んだ人がいたら、そこで、それぞれの期の聖書に記されている人物のことをチーム全員が体験します。

以下のような手順で行います。

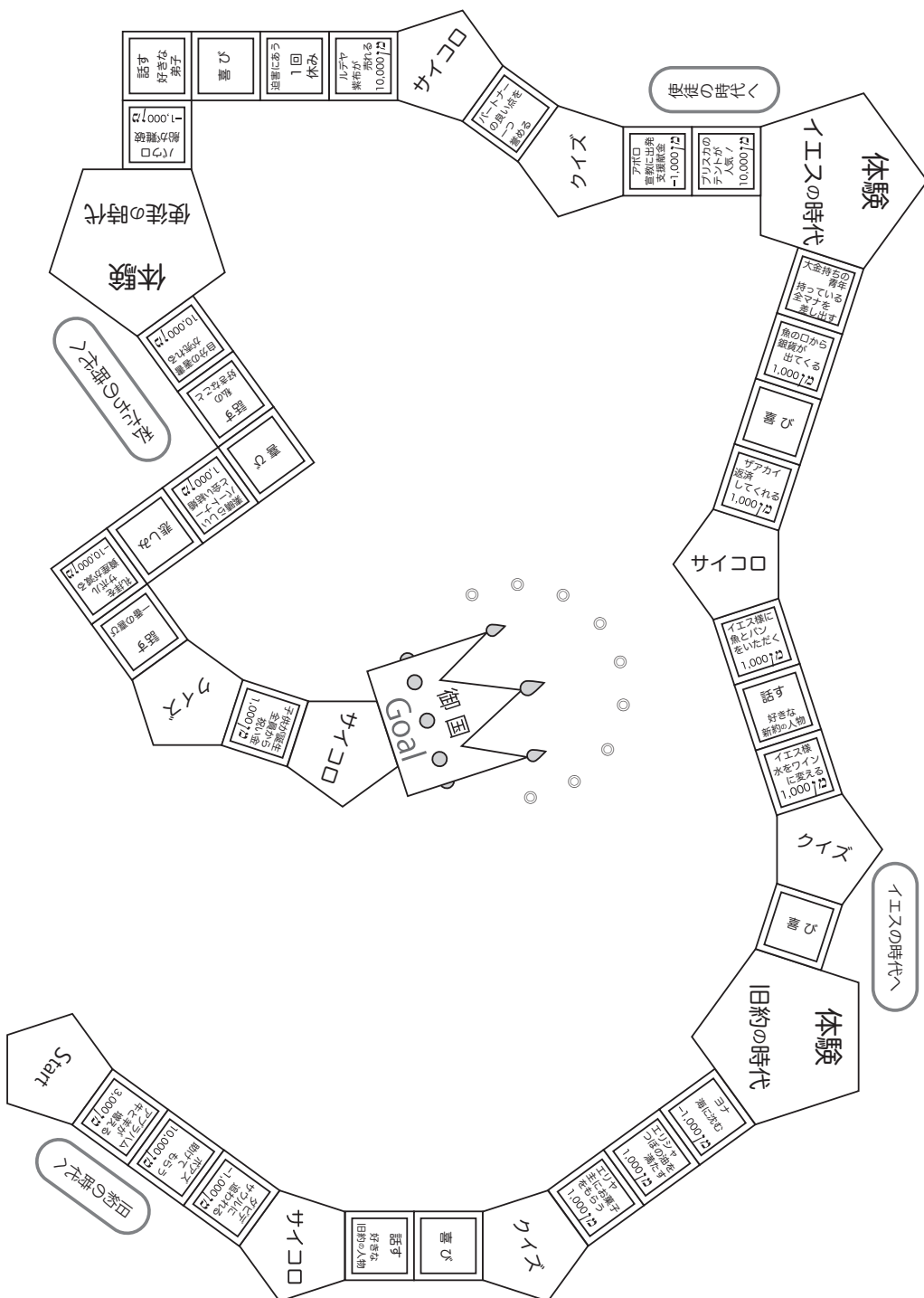
1. チームで最初に、「体験」に進んだ人が、牧師の所にあるカードをひきます。
2. その人は、カードに記された人物が登場する聖書箇所を、読みます。
3. チームの全員は、自分が、その登場人物になったつもりで、その聖書箇所を聞き、記されていることを、その人物として体験してください。

体験して、自分の心に湧き起こってきた思いを「記録紙」に★印と、簡単なキーワードでメモしてください。

3. フィードバックシステム

- ・このエクササイズでは、わかちあいの際に、他の人の様子や言動について気づいたこと、感じたことを伝えます（フィードバック）。
- ・そのため、すごろく中も他のプレーヤーの様子・言動をしっかり見守っててください。そして、また、相手の人の様子・言動を見聞きして生まれた自分の気持ちや感じにも大事に留めておいてください。

人生双六ゲームの盤（2009年春の修養会）

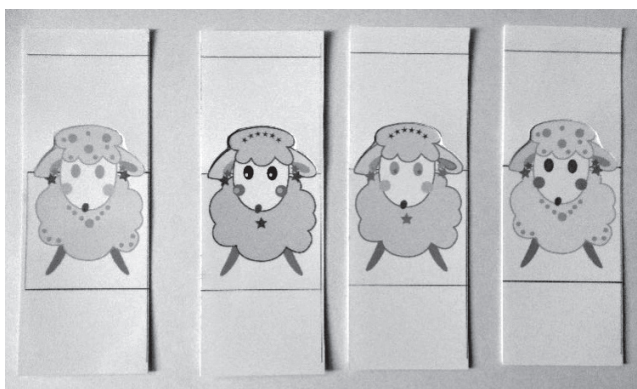


資料 4

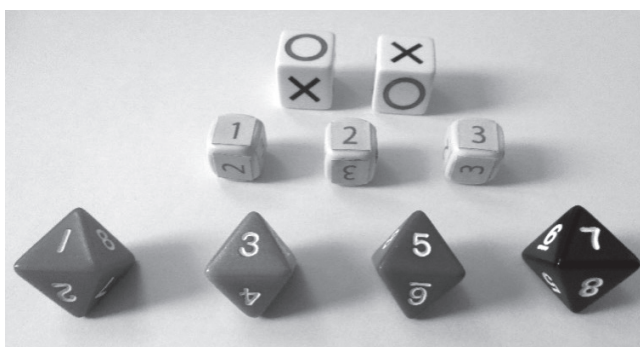
「人生双六ゲーム」と「人生双六ゲーム《JESUS GAME》」の
マナ紙幣・すごろくのコマ・サイコロ



マナ紙幣



すごろくのコマ



サイコロ

資料5

人生双六ゲームのクイズの問いと答え

クイズ！！ 喜びをテーマに絞る！

旧約期（旧約の時代）

- 1.詩篇 126 篇です。 何とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取る。 答え：涙
詩篇 126:5 涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取ろう。
- 2.立琴と笛のすべての奏者の先祖と呼ばれる賛美、奏楽、音楽の始祖は誰？ 答え：ユバル 創世記 4：21
- 3.アナが、荒野で発見したのは何ですか？ 答え：温泉 創世記 36：24
- 4.イサクが生まれた時、母のサラは嬉しくてどうしましたか？ 答え：笑った。
- 5.出エジプトで、海が二つに割れて、渡っていった後、アロンの姉ミリヤムは喜びながら賛美しました。その時、彼女が手に持っていたものは何ですか？ 答え：タンバリン
- 6.奪われていた契約の箱が再びイスラエルの町に戻って来た時、エポデを纏って力の限り踊った王様は誰ですか？ 答え：ダビデ
- 7.心に喜びがあれば*色を良くする。心に憂いがあれば気はふさぐ。 答え：顔色 箴言 15：13
- 8.ニネベの町が神に赦されたのを目撃して、不機嫌になったヨナですが、神が与えてくださったある物のおかげで喜びました。それは何？ 答え：とうごま
- 9.エズラたちが神殿を再建して、宮の基礎が完成した時、他の人たちが喜び叫びました。その時、老人たちは、大声を上げて***。 どうしました？ 答え：泣いた。
- 10.神が、洪水の後、ノアに契約のしるしとして架けてくださったのは何ですか？ 答え：虹
- 11.神が、洪水の後、ノアに契約のしるしとして架けてくださったものは、戦いのためのある道具を象徴的に現しています。それは何ですか？ 弓？ 槍？ 剣？ 答え：弓
- 12.ダビデ王は素晴らしい賛美もたくさん作っています。 彼の得意な楽器は何ですか？ 答え：立琴
- 13.イザヤ 35：1 「荒野と砂漠は楽しみ、荒地は喜び、***のように花を咲かせる。」 どんな花？ 答え：サフラン
- 14.エレミヤ 30：19 「彼らの中から、感謝と、喜び**声がわき出る。」 どんな声ですか？
答え：笑う
- 15.詩篇 119：16 「私は、あなたのお**を喜びとし、あなたのことばを忘れません。」
答え：おきて

新約期（イエスの時代）

- 1.イエスが「タリタ クミ」と、言葉をかけて生き返らせた少女は何歳？ 答え：12歳
- 2.イエスが、娘を生き返らせてくださった。その会堂管理者の男の名は？ 答え：ヤイロ

- 3.娘が死にそうです。癒してくださいと懇願した男の仕事は？ 答え：会堂管理者
- 4.しもべを癒して欲しい。しかし、主に自宅まで来ていただくような手間をかけるのは申し訳ないの
で、言葉をくださいと言った男の職業は？ 答え：兵士、百人隊長
- 5.大切な結婚式で、イエスが水を何に変えた？ 答え：ぶどう酒
- 6.十字架の上で悔い改め、イエスに赦された強盗は、どこに行ける（居る）と言われた。 答え：パ
ラダイス
- 7.イエスに名を呼ばれ、救いを得たザアカイは、だまし取った物を、何倍にして返すと言った。
答え：4倍
- 8.イエスのほめられた女性は、「**でも、主人の食卓から落ちるパンくずはいただきます。」と、言
いました。 何と言いましたか？ 答え：小犬
- 9.畑に宝物を見つけた人は、大喜びで帰り、持ち物を全部売りました。そのお金で何をしましたか？
答え：畑を買った。
- 10.迷子の 100 匹目の羊を見つけた羊飼いは、大喜びで、その羊を****。 かかえた？ かつい
だ？ つないだ？ 答え：かついだ。
- 11.イエスが一番たくさん捧げたと、喜ばれて、ほめたやもめが捧げたのは、二枚の***銅貨。
答え：レブタ
- 12.一人の罪人が悔い改めれば、喜びがどこに沸き起こる。 答え：天
- 13.一人の罪人が悔い改めれば、神の***たちに与路おこびがわき起こる。 答え：御使い
- 14.大急ぎで木から降りて来て、大喜びでイエスを自宅に迎えたのは誰ですか？ 答え：ザアカイ
- 15.持っていた、大麦のパンを五つと小さい魚を二匹を指し出し、それでイエスが大勢の人を満腹さ
せてくれました。差し出したのは誰ですか？ 答え：少年。

使徒期（使徒の時代）

- 1.ペテロとヨハネが、最初の奇蹟を行って癒し、歩けるようになった男が座っていたのは、何の門？
答え：美しの門
- 2.ビリポに聖書を解き明かしてもらい、バプテスマを受け、喜びながら国に帰って行った男は、どこ
の国の人？ 答え：エチオピア
- 3.ビリポに聖書を解き明かしてもらい、バプテスマを受け、喜びながら国に帰って行った男は、女王
の宦官でした。女王の名は？ 答え：カンダケ
- 4.ビリポに聖書を解き明かしてもらい、バプテスマを受け、喜びながら国に帰って行った男が読んで
いたのは聖書の何書？ 答え：イザヤ書
- 5.バルナバが、畑を売った代金を捧げて、皆の評判を得たのを見て、真似をしたものの、インチキを
して、一部の金を手元に残し、主に裁かれて死んだ夫婦の名前は？
アナニヤとサッピラ？アナニヤとチンピラ？アナゴヤとサッピラ？ 答え：アナニヤとサッピラ
- 6.パウロが使徒として認められるためにも助力し、多くの人を助けて、皆が彼のことを喜びました。

- その使徒の名前は？ バルナバ（訳すと）「****の子」 何の子？ 答え：慰めの子
- 7.ひどい嵐で船が難破したが、パウロのおかげで助かり、上陸した島の名は？ 答え：マルタ
- 8.ヨハネが捕えられ、島流しになった島の名は？ 答え：パトモス
- 9.パウロの同労者にもなったアクラとプリスキラですが、手紙の方では、パウロはプリスキラを別名で書いています。その名前は何ですか？ プリスカ？プースカ？プリクラ？ 答え：プリスカ
- 10.喜ぶ者といっしょに喜び、*く者といっしょに*きなさい。答え：泣く者といっしょに泣きなさい。
- 11.御霊の実は、愛、**、平安、**、親切、善意、誠実、**、自制です。 **埋めてください。 答え：愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。
- 12.パウロと激しい反目、喧嘩をして一緒に旅をしなかったのは、バルナバです。その原因を作ったのは誰ですか？ 答え：マルコ（ヨハネ）
- 13.パウロが書いたとされる手紙を三つ上げてください。第一第二は一つの書簡として数えます。
- 答え：ローマ人への手紙、コリント人への手紙第一（コリント人への手紙第二）、ガラテヤ人への手紙、エペソ人への手紙、ピリピ人への手紙、コロサイ人への手紙、テサロニケ人への手紙第一（テサロニケ人への手紙第二）、テモテへの手紙一第（テモテへの手紙第二）、テトスへの手紙、ピレモンへの手紙
- 14.パレスチナ地方に自生している植物で、苦痛、悲しみ、災害の象徴として用いられ、黙示録にも登場するのは、苦***。 答え：苦よもぎ
- 15.終末の時、七人の御使いによって吹き鳴らされるのは何ですか？ 答え：ラッパ

自分史期（私たちの時代）

- 1.「刑事ジョン・ブック 目撃者」で、知られるようになったキリスト教の教派は？ *ーミッシュ。 答え：アーミッシュ
- 2.アーミッシュの主な移動手段は馬車。 マルかバツか？ 答え：マル
- 3.宗教改革者として知られるのは、ドイツのルター他に、スイスの*ルヴァンと、*イングリ。
- 答え：カルヴァン、ツヴィングリ
- 4.シテリジョイスチャーチが礼拝をスタートさせたのは、2004年の****の礼拝から。
- 答え：イースター
- 5.アメイジング・グレイスを作詞したジョン・ニュートンが、悔い改める前の職業は何？ 奴隷船の船長。 マグロ船の船長。 フェリーの船長。 答え：奴隷船の船長。
- 6.日本では聖公会として知られる英国発のプロテスタント教派は、英国*教会という。 国？ 高？ 流？ 答え：英国国教会
- 7.英国の宗教改革の運動は、王が主導で始まりました。それは、王が実行したかったあることをローマカトリック教会が認めなかったからです。 王様がしたかったことは何？ 答え：離婚
- 8.お札の五千円券の肖像画にもなったクリスチャンは？ 新渡戸稲造？ 夏目漱石？ 聖徳太子？
- 答え：新渡戸稲造

9.「靴屋のマルチン」などの著作でも有名なのは誰？ トルストイ？ トウルニエ？ オットット？

答え：トルストイ

10.「ナルニア国物語」で知られているのは？ G・ルーカス？ C.S.ルイス？ K.トーマス？

答え：C.S.ルイス

11.今年のペンテコステは、何月何日？ 答え：5月31日

12.ウーピー・ゴールドバーグ主演で、日本でのゴスペルブームの火付け役ともなった映画の題名は何ですか？ 答え：天使にラブソングを」

13.南山大学（南山学園）の創立母体であるカトリック修道会の名称は何ですか？ 答え：神言会」

14.金城高校（金城学院）創立者、アニー・E・ランドルフは、米国***派の宣教師？ 答え：米国南長老派

15.名古屋高校の創立者の、フレデリック・チャールズ・クラインは、メソジストの宣教師ですが、名古屋高校の教壇にも立っていた不敬事件でも有名な「無教会主義」を唱えたのは誰ですか？

答え：内村鑑三

クイズ

旧約期

01	02	03
04	05	06
07	08	09
10	11	12
13	14	15

クイズ

新約期

01	02	03
04	05	06
07	08	09
10	11	12
13	14	15

クイズ

使徒期

01	02	03
04	05	06
07	08	09
10	11	12
13	14	15

クイズ

私たち時代期

01	02	03
04	05	06
07	08	09
10	11	12
13	14	15

資料6

人生双六ゲーム 記録用紙

- 1) 自分がとまったマスに○をつけてください。
- 2) そのマスのところに、以下のことを簡単にメモしてください。
 - ・自分の喜び度を、★の数で記してください。
 - 全くうれしくなかった（ように見えた） ★0個
 - 少しうれしかった（ように見えた） ★1個
 - かなりうれしかった（ように見えた） ★2個
 - とてもうれしかった（ように見えた） ★3個
 - ・「その時の、自分の気持ちや感じ」は簡単なメモで十分です。

マス	喜び度 ★★★★	その時の、自分の気持ちや感じ
旧約の時代		
アブラハム		
ボアズ		
ダビデ		
サイコロ		
話す/旧約人物		
喜び		
クイズ		
エリア		
エリシャ		
ヨナ		
体験		
イエスの時代		
喜び		
クイズ		
ワイン		
話す/新約人物		
魚とパン		
サイコロ		

ザアカイ		
喜び		
銀貨		
大金持ちの青年		
体験		
使徒の時代		
プリスカ		
アポロ		
クイズ		
話す/褒める		
サイコロ		
ルデア		
迫害		
喜び		
話す/弟子		
パウロ		
体験		
わたしたちの時代		
著書		
話す/好きなこと		
喜び		
結婚		
悲しみ		
礼拝をさぼる		
話す/一番の喜び		
クイズ		
子どもの誕生		
サイコロ		
御国		

資料 7

人生双六ゲーム ふりかえり用紙

このエクササイズを通して…

1. 「体験」のマスで、あなたがカードの登場人物であった時、どのような喜びがありましたか？登場人物の名前と、あなたの心に生まれた喜びについて記してください。

＜それぞれの期の人物＞	＜喜び＞
＜旧約の時代＞	
＜イエスの時代＞	
＜使徒の時代＞	

2. あなたが止まったマスの中で、印象的だったマスを1～2個選んでください。そのマスに止まった時に、あなたの中に生まれた気持ちや感じはどのようなものでしたか？

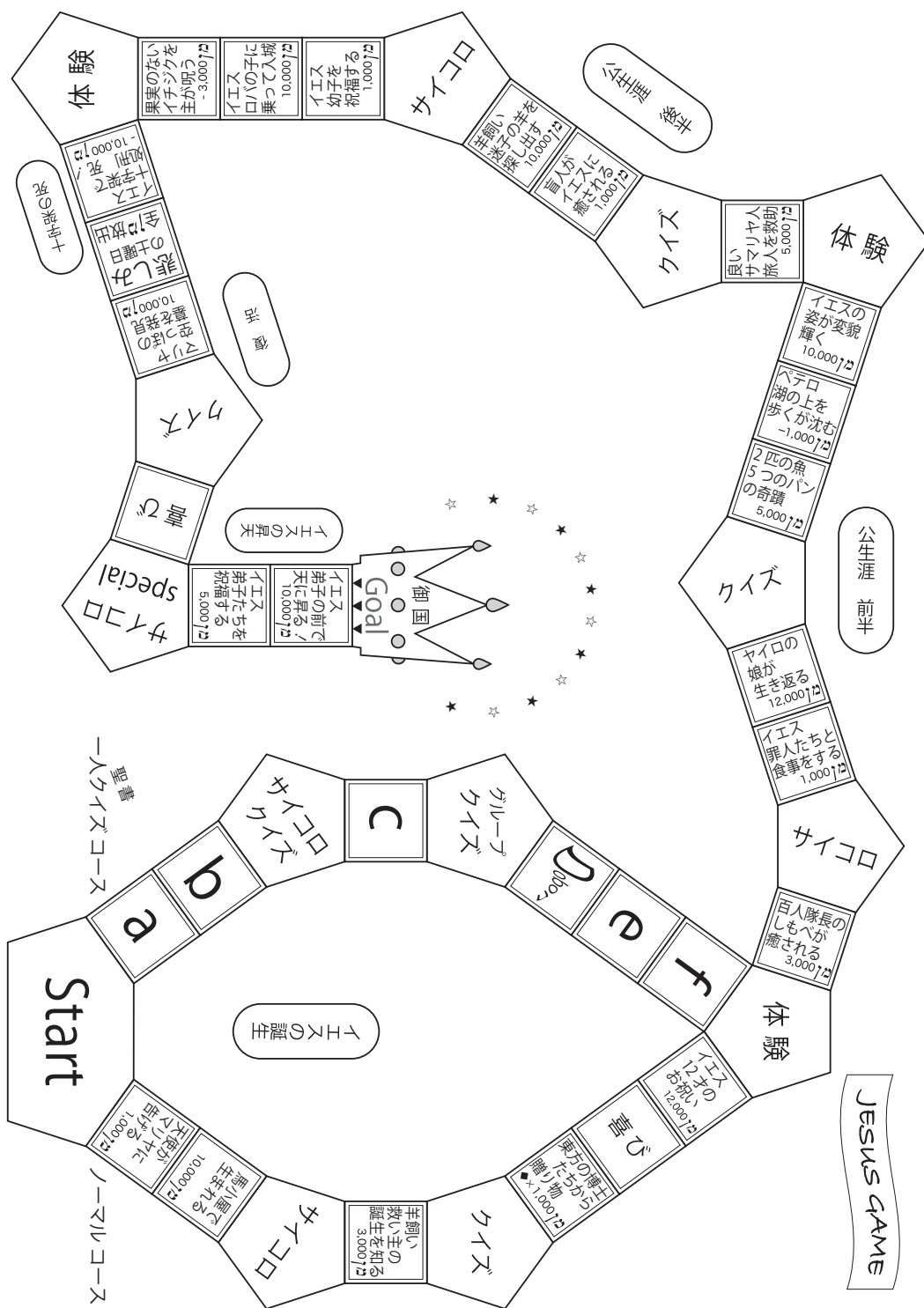
3. 自分以外の人の様子や言動で、印象に残ったことはどのようなことでしたか？
できるだけ具体的に記してください。
(相手の様子や言動) (その時、あなたが感じたこと・気づいたこと)

4. このエクササイズ全体の中で、一番楽しかったことや悔しかったことは…

5. クリスマンにとって、どのようなことが、どのような喜びだと思いますか？

資料 8

人生双六ゲーム《JESUS GAME》の盤 (2009年秋)



資料 9

人生双六ゲーム《JESUS GAME》 手順書

1. ルール説明

<全体のルール>

- ・御国へ向かってコマを進める。御国へ入った順番を確定する。
- ・各マスに書いてあるルールに従う。 特別ルール等は、その都度、牧師から説明を受ける。
- ・御国へゴール後の、合計金額で、個人総合 1 位を決定する。
- ・御国へゴール後の、グループ合計金額で、三グループの総合 1 位を決定する。
- ・御国へ到着した時。
 - 1 位でゴールした人が 10,000 マナをゲット。
 - 2～4 位でゴールした人は 5,000 マナをゲット。 御国に凱旋した喜びを味わいましょう。
 - 5 位で最後にゴール。(特別ルールを適用。)

<サイコロ（バツとマルが出るもの）のコマのルール>

- ・サイコロを 2 回振る。
 - 2 回とも○ → お菓子と 1,000 マナをゲット。
 - 1 回だけ○ → お菓子をゲット。
 - 2 回とも × → ざーんねん。なににもなし！！

<クイズのルール>

- ・牧師の所にあるクイズのカードをひいてくる。
- ・カードに記されているクイズに答える。 特別ルールが記載されていれば、それに従う。
- ・クイズに正解すれば、1,000 マナをゲット。
- ・最後のクイズのみ、特別ルールを適用。(最初に到着した人が、牧師に申請する。)

<体験のマス>

- ・グループで誰かがそれぞれの期の「体験」に進んだ人がいたら、そこで、それぞれの期の聖書に記されている人物のことをチーム全員が体験します。

以下のような手順で行います。

 1. グループで最初に、「体験」に進んだ人が、牧師の所にあるカードをひきます。
 2. その人は、カードに記された人物が登場する聖書箇所を、読みます。
 3. グループの全員は、自分が、その登場人物になったつもりで、その聖書箇所を聞き、記されていることを、その人物として体験してください。

体験して、自分の心に湧き起こってきた思いを「記録用紙」に★印と、簡単なキーワードでメモをしてください。

2. フィードバックシステム

- ・このエクササイズでは、わかちあいの際に、自分だけではなく、他の人の様子や言動について気づいたこと、感じたことを伝えます（フィードバック）。
- ・そのため、すごろく中も他のプレイヤーの様子・言動をしっかり見守っててください。そして、また、他の人の様子・言動を見聞きして生まれた自分の気持ちや感じにも大事に留めておいてください。

2009 年度 CRC ミニ修養ミニ楽養会 2009 年 9 月 20 日
矢場町 セミナールーム

資料10

人生双六ゲーム《JESUS GAME》 記録用紙《ノーマルコース》

1) 自分がとまったマスに○をつけてください。

2) そのマスのところに、以下のことを簡単にメモしてください。

・自分の喜び度を、★の数で記してください。

全くうれしくなかった ★0個 / 少しうれしかった ★1個

かなりうれしかった ★2個 / とてもうれしかった ★3個

「その時の、自分の気持ちや感じ」は簡単なメモで十分です。

マス	○	喜び度 ★★★	その時の、自分の気持ちや感じ
イエスの誕生			
天使が告げる			
馬小屋で誕生			
サイコロ			
羊飼が知る			
クイズ			
東方の博士			
喜び			
イエス 12 歳			
体験			
公生涯 前半			
百人隊長			
サイコロ			
罪人との宴会			
ヤイロの娘			
クイズ			
魚とパンの奇蹟			
ベテロ			
イエスの変貌			
体験			

2009 年度 CRC ミニ修養ミニ楽養会 2009 年 9 月 20 日
矢場町 セミナールーム

マス	○	喜び度 ★★★	その時の、自分の気持ちや感じ
公生涯 後半			
良いサマリア人			
クイズ			
盲人			
迷子の羊			
サイコロ			
幼子の祝福			
口バの子			
イチジクを呪う			
体験			
イエスの十字架			
十字架の死			
悲しみ			
空っぽの墓			
クイズ			
喜び			
サイコロ special			
弟子を祝福			
イエスの昇天			
御国			

資料11

人生双六ゲーム《JESUS GAME》
記録用紙《一人聖書クイズコース》

1) 自分がとまったマスに○をつけてください。

2) そのマスのところに、以下のことを簡単にメモしてください。

・自分の喜び度を、★の数で記してください。

全くうれしくなかった ★0個 / 少しうれしかった ★1個

かなりうれしかった ★2個 / とてもうれしかった ★3個

「その時の、自分の気持ちや感じ」は簡単なメモで十分です。

マス	○	喜び度 ★★★	その時の、自分の気持ちや感じ
イエスの誕生			
a			
b			
サイコロクイズ			
c			
グループクイズ			
Dobon			
e			
f			
体験			
公生涯 前半			
百人隊長			
サイコロ			
罪人との宴会			
ヤイロの娘			
クイズ			
魚とパンの奇蹟			
ペテロ			
イエスの変貌			
体験			

マス	○	喜び度 ★★★	その時の、自分の気持ちや感じ
公生涯 後半			
良いサマリア人			
クイズ			
盲人			
迷子の羊			
サイコロ			
幼子の祝福			
口バの子			
イチジクを呪う			
体験			
イエスの十字架			
十字架の死			
悲しみ			
空っぽの墓			
クイズ			
喜び			
サイコロ special			
弟子を祝福			
イエスの昇天			
御国			

資料12

人生双六ゲーム「JESUS GAME」 ふりかえり用紙

このエクササイズを通して...

1. 「体験」のマスで、あなたがカードの登場人物であった時、どのような喜びがありましたか？登場人物の名前と、あなたの心に生まれた喜びについて記してください。

＜それぞれの期の人物＞	＜喜び＞
＜カナの婚礼・最初の奇蹟＞	
＜エリコの町のザアカイ＞	
＜イエスの十字架の死＞	

2. あなたが止まったマスの中で、印象的だったマスを1～2個選んでください。そのマスに止まった時に、あなたの中に生まれた気持ちや感じはどのようなものでしたか？

3. 自分以外の人の様子や言動で、印象に残ったことはどのようなことでしたか？
できるだけ具体的に記してください。
(相手の様子や言動) (その時、あなたが感じたこと・気づいたこと)

4. この "JESUS GAME " 全体の中で、一番楽しかったことや悔しかったことは...

5. 人生で起きる、どのようなことが、喜びとなり、それは、どのような喜びだと思いますか？

実習使用規定

ラボラトリー方式の体験学習に関するツールを公開することで、ラボラトリー方式の体験学習が広く普及することを願って、第7号(2008)より「実習」を掲載しております。ここに掲載されている実習は、当センター研究員とその仲間によって開発され、これまでの教育実践で用いられてきたものです。使用の際には以下の留意事項をお守りください。

なお、ラボラトリー方式の体験学習を実施する際には、まずはご自身がラボラトリー方式の体験学習を体験されることをお勧めします。当センターではラボラトリー方式の体験学習を用いた公開講座を開催しております（詳しくは当センターの Web ページ <http://www.nanzan-u.ac.jp/NINKAN/> をご参照ください）。体験学習のファシリテーションを学んだ上でご使用ください。

実習を使用する際の留意事項

1. 著作権は著者に属します。実習を販売することや、営利目的の発行物などに転載することは禁止します。なお、教育目的での無料の発行物などに転載を希望される場合は、当センター事務局にお問い合わせください。
2. ラボラトリー方式の体験学習として教育・研修などに使用される場合には、各実習の課題シート（実習の指示書）に出典を明記してください。使用の際に当センターや著者に許可を得る必要はありません。また、使用料も発生しません。

【出典の記入例】

出典：大塚弥生（2008）「グループ エントランス」

南山大学人間関係研究センター 人間関係研究, 第 7 号より

3. 課題シート（実習の指示書）をそのまま使用するのではなく、プログラムの実施状況に合わせて適宜修正・変更した上で使用する場合は、「参考」として出典を明記してください。
4. ラボラトリー方式の体験学習で大切にされている教育観（学習者中心の教育、非操作の教育、学習者が自らの人間的成長に取り組む教育）に反する使用は禁止します。たとえば、営利目的で学習者を操作する自己啓発セミナーなどでの使用は一切禁じます。

実習使用規定

ラボラトリー方式の体験学習に関するツールを公開することで、ラボラトリー方式の体験学習が広く普及することを願って、第7号(2008)より「実習」を掲載しております。ここに掲載されている実習は、当センター研究員とその仲間によって開発され、これまでの教育実践で用いられてきたものです。使用の際には以下の留意事項をお守りください。

なお、ラボラトリー方式の体験学習を実施する際には、まずはご自身がラボラトリー方式の体験学習を体験されることをお勧めします。当センターではラボラトリー方式の体験学習を用いた公開講座を開催しております（詳しくは当センターの Web ページ <http://www.nanzan-u.ac.jp/NINKAN/> をご参照ください）。体験学習のファシリテーションを学んだ上でご使用ください。

実習を使用する際の留意事項

1. 著作権は著者に属します。実習を販売することや、営利目的の発行物などに転載することは禁止します。なお、教育目的での無料の発行物などに転載を希望される場合は、当センター事務局にお問い合わせください。
2. ラボラトリー方式の体験学習として教育・研修などに使用される場合には、各実習の課題シート（実習の指示書）に出典を明記してください。使用の際に当センターや著者に許可を得る必要はありません。また、使用料も発生しません。

【出典の記入例】

出典：大塚弥生（2008）「グループ エントランス」

南山大学人間関係研究センター 人間関係研究, 第 7 号より

3. 課題シート（実習の指示書）をそのまま使用するのではなく、プログラムの実施状況に合わせて適宜修正・変更した上で使用する場合は、「参考」として出典を明記してください。
4. ラボラトリー方式の体験学習で大切にされている教育観（学習者中心の教育、非操作の教育、学習者が自らの人間的成長に取り組む教育）に反する使用は禁止します。たとえば、営利目的で学習者を操作する自己啓発セミナーなどでの使用は一切禁じます。

■ 実習

実習「借り人競争」

中磯重鈴鈴高
尾崎岡木木原
陽未紬 昂
子來杏舜樹希
(南山大学経営学部)

ねらいの例

- ・自分らしさを大切にしながらも、これまでの関わりを一步超え、相手をより深く知ることに取り組む。
- ・メンバーとの関わりの中で、自分自身やお互いの間に起こっていること（プロセス）に気づく。

（上記のねらいは、参加者の状況やその他の実習とのつながりに合わせて、表現を変えていくとよい。）

グループサイズ

15名以上で実施できるとよい。

所要時間

20～30分（取り組むお題の数で、所用時間を調整できる）

準備物

お題を書いたカード

会場の設定

メンバー全員がゆったりと動ける広さであることが望ましい。机や椅子は特に必要ない。

手順

1. 導入：実習タイトルとねらいを伝える。
2. グループ分け：何らかの方法でグループ分けを行い、グループの場所に集まる。1グループの人数は5～6名程度だと進めやすい。お互いに初めて会う場合は、簡単に自己紹介の時間を設ける。
3. 課題の導入：グループへの課題を説明する。その際、以下の点について伝える。
 - ・グループから一人ずつ前へ出てきて、お題カードを一つ引く。
 - ・合図からの2分間で、そのお題に当てはまる人を一人でも多く集める。2分経過した時に集まっている人数が、そのグループのポイントとなる。
 - ・お題に当てはまるかどうかを判断する際は、必ず一人一人に対して個別で声をかける。全体に向けて大きな声で「○○な人いますか？」というような声かけは禁止。
 - ・お題に当てはまる人が見つかった際には、その人のことをより深く知ることができるような深掘り質問を一つ以上する。難しく考える必要はなく、自分がその人についてもう少し知りたいことを質問してみるとよい。1ラウンド終了する毎に、どのようなお題に対してどのような深掘り質問をし、どのような回答をもらったのか、進行役（ファシリテーター）がランダムにインタビューをする。このインタビューに答えられなかった場合は、その人が集めたポイントをチームの合計ポイントからマイナスするので、深掘り質問の内容とその回答を覚えておくかメモしておくこと。
 - ・お題に当てはまった人は、そのままお題を持った人と一緒に動く。別のお題を持っている人は、一旦どこかのお題に当てはまった人に対して声をかけてはいけない。
 - ・声をかけるのは早いもの順とする。誰かが話しかけている人に対して、横から質問を被せることは禁止。もし同じタイミングで話しかけてしまった場合は、相談や譲り合いをしながら、一対一で話ができるようにする。
 - ・お題カードを持っている人は、当てはまる人を探すことに専念する。別のお題カードを持っている人から声をかけられても、対象外であることを伝え、回答しないこと。
4. グループ内で順番決め：グループメンバーで相談し、お題に当てはまる人を探す順番を決める。グループ間で人数が不均衡な場合は、2回実施す

る人も決めておく。

＜手順1～4までで約10分＞

5. 課題の実施 ＜15分～30分＞

（6. ふりかえり用紙記入 ＜10分＞）

（7. わかちあい ＜15分＞）

ファシリテーションのポイント

進行役（ファシリテーター）は、時間管理をしながら以下を実施する。1 ラウンドに実施する内容は、

- ①全グループのメンバーにお題カードを引いてもらう
- ②全グループがお題を引いたことを確認し、お題に当てはまる人探しスタートの合図
- ③2分経ったら、人探し終了の合図
- ④各グループの獲得ポイント確認と記録
- ⑤インタビュー

となるため、4－5分程度である。②の際は、楽しい雰囲気が損なわれない程度に、ルール違反のチェックもしていく。また⑤のインタビューは全体シェアにもつながるので、参加メンバー一人ひとりのことを全体に知ってもらえるよう、できるだけ多様なメンバーについて答えてもらうようにするとよい。

お題の例

* 以下は大学生を対象に実施した際の例。参加者に合わせた内容を考えるとよいだろう。

- ・ アクセサリーつけている人
- ・ 半年以内に髪を染めた人
- ・ 動物を飼っている人
- ・ 3年以上習い事をしたことがある人
- ・ 高校時代に自転車通学をしていた人
- ・ MBTIの〇〇の人
- ・ 自分より上／下の兄弟がいる人
- ・ 〇〇オタクの人
- ・ 外部活動経験がある人
- ・ 漫画〇〇（ex.何でもよいので、現在も続いている長編ものの具体名を入れる）の最新を追っている人
- ・ 雑誌〇〇（ex.何でもよいので、参加者の様子に合った具体名を入れる）を

- 読んだことある人
- ・ 海外へ行った経験のある人
 - ・ 骨折した経験のある人
 - ・ ○○（ex.飲食店、塾など何でもよいので具体名を入れる）でアルバイトした経験のある人
 - ・ 名古屋市外に住んでいる人
 - ・ これまでに受賞経験のある人
 - ・ 引越したことのあった人
 - ・ 今年に入って「夏と言えば！」な体験をした人
 - ・ 献血経験のある人
 - ・ リーダー経験（クラス委員・生徒会長・部長・バイトリーダーなど何でもよい）のある人
 - ・ お酒で失敗したことがある人
 - ・ スマートフォンにゲームアプリが入っている人
 - ・ 何かにむけて身体づくりしたことがある人

備考

- ・ ある程度お互いを知り合った参加者同士のアイスブレイクとして適切な実習だと考えられる。この場合、手順6と7にあたるふりかえり用紙の記入とわかちあいは実施しなくてもよいだろう。
- ・ ふりかえりを実施する場合は、ねらいとのつながりを考えながら、資料1のようなふりかえり用紙を使い、ふりかえり・わかちあいを実施するのも一つだろう。

（本実習は、筆者の磯崎未来・重岡紬杏・鈴木 舜・鈴木 樹・高原昂希の5名により考案され、2025年度のゼミ活動において実施された内容に、中尾が微修正を加え、ふりかえりの内容を付してまとめたものである。）

資料1

実習 借り人競走 ふりかえり用紙

1. あなたは、どのくらい自分らしく、この実習に参加できていたと感じますか？（どのような点から、そのように感じますか？）

1	2	3	4	5
-----			-----	
できなかった			充分できた	

2. 実習の中で起きていたメンバーとの関わりをふりかえってみて、気づいたことや感じたことは？（ex. 自分の中で起きていた気持ちや考えは？ 自分自身の動き方や関わり方は？ メンバーとの関わり中で起きていたことは？それは誰とのどのような場面で？ など）

3. この実習を通して、他のメンバーについて気づいたことは？
〈誰の〉〈どのようなことから？ 気づいたこと・感じたこと・考えたことは...〉

4. その他、気づいたことや感じたことなど、なんでも。

■ 実習

実習「NGワード × おしゃべり大会」

中 尾 陽 子
新 野 春 日
玉 越 田 響
富 田 真 鈴
横 田 翔
(南山大学経営学部)

ねらいの例

- ・ お互いに知り合う。
- ・ 自己開示と他者理解を通して、お互いが自然体で関われるような関係づくりを目指す。

(上記のねらいは、参加者の状況やその他の実習とのつながりに合わせて、表現を変えていくとよい。)

グループサイズ

10名以上で実施できるとよい。また、偶数の参加者数であることが望ましいため、奇数の場合はファシリテーターなどが参加し、人数調整できるとよい。

所要時間

30～40分（何ラウンド実施するかによって、所用時間を調整できる）

準備物

A5サイズ程度の白紙（参加者数×ラウンド数）、マジックペン

会場の設定

- ・椅子使用、立った状態、床に座った状態のどれでも実施できるので、参加者の状況や、場の雰囲気を選ぶとよい。
- ・かなり賑やかになる可能性があるので、隣のペアの声が気にならない程度の広さであることが望ましい。

手順

1. 導入：実習タイトルとねらいを伝える。
2. 場所づくり：何らかの方法でグループを2つに分け、2列に並んでもらう。その列をそれぞれ円形にして、二重円を作る(図1参照)。実習の際は、内側と外側の参加者がペアとなり、お互いが向かい合って実施する。
3. 課題の導入：課題の説明をする。その際、以下の点について伝える。
 - ・円の内側と外側の人ペアになって実施する。
 - ・実習では、ファシリテーターが示すお題に沿って、ペアで3分間おしゃべりをする。
 - ・ペアの相手とお題を確認したら、おしゃべりを始める前に、相手が言いそうなことを考え、NGワード（これを言ったらその人が負けとなるワード）を1つ決める。そのNGワードを配布された紙に書き、見えないようにして相手に渡す。
 - ・NGワードを言ったら負けとなるので、相手にそれを言わせるようにしながら、また自分自身はNGワードを言わないようにしながら、おしゃべりを楽しむ。
 - ・1ラウンド（3分間）が終わったら、内側円の人が時計回りに一人分動き、新しいペアを作る。
 - ・新しいペアで、2ラウンド目のおしゃべりをする。

＜手順1～3までで10分弱＞

 - ・全ラウンドが終わった後で、実習を通して気づいたことや感じたことを数名にインタビューし、全体シェアすることも、予め伝えておくとよい。
4. 全員手順を理解したことが確認できたら、NGワード記入用の紙とペンを配布する。その後、1ラウンド目のお題を示し、各自NGワードを記入してもらう。
5. 課題の実施3分間のおしゃべりタイムをスタートする。それぞれのペアは、NGワードを意識しながら3分間のおしゃべりを楽しむ。先にNGワードを言ってしまった方が負けとなるが、言ってしまった後も、時間内は続けておしゃべりを楽しむ。　＜15分～20分＞
6. 全体シェア　＜5分＞

ファシリテーションのポイント

- ・あまり知り合っていない人同士で話ができるよう、円の内側と外側のメンバーを予め工夫できるとよい（例えば、異学年のメンバーが合同で活動するような場合、内側がX年生、外側がY年生の円とすると、普段関わりの少ないメンバー同士で話ができる）。
- ・お題は、ねらいや参加者の年齢層などに合わせて工夫しておく。
- ・話が盛り上がり次に移れないペアも出てくるので、ベルやラッパなど楽しい音の出るものを使って交代の合図を出すと、楽しい雰囲気のままテンポよく進めることができる。
- ・全体シェアでは、数名にインタビューし、自分や他者について気づいたこと・感じたことを伝えてもらう。その際、他者について伝える場合は、相手のプライバシーに配慮して伝えてもらうように、予め注意喚起しておくとういだろう。

お題の例

* 以下は大学生を対象にした際の例。参加者にあわせた内容を考えるとよいだろう。

- ・最近食べて美味しかったもの
- ・最近行った旅行
- ・今年の夏の予定
- ・今、買いたいもの
- ・今、欲しいもの
- ・今、やってみたいこと
- ・大学生のうちにやりたいこと
- ・高校時代の一番の思い出
- ・自分の自慢
- ・最近のちょっとした悩み
- ・人には言にくいささやかな秘密

備考

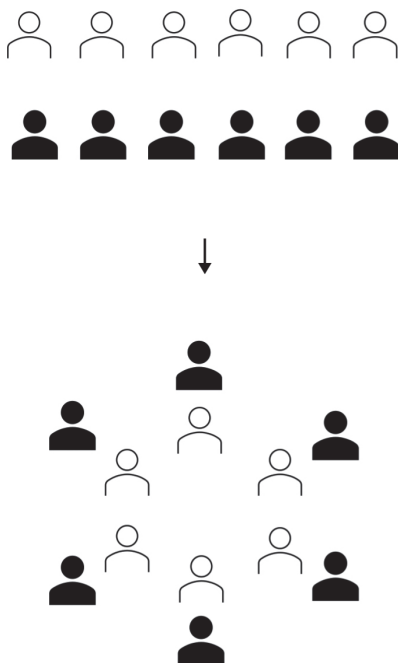
- ・まだ深く知り合っていない参加者同士のアイスブレイクとして適切な実習だと考えられる。初めて出会ったメンバー同士の緊張をほぐし、自然体で関わられるような場を創っていくためには、お互いが話しやすく、楽しいお題を準備することも大切になるだろう。

- ・私とあなた（総当たりインタビュー）（津村・星野，1996）に類似した、変形版の実習であるが、予め提示されたお題を様々に工夫することで、初めての人とでも話しやすくなるというよさがある。また、NGワードを設けることで、ゲーム性が高まり、場の雰囲気が温まりやすくなる。
- ・本実習は、筆者の新野春日・玉越 響・富田真鈴・横田 翔の4名により考案され、2025年度のゼミ活動において実施された内容に、中尾が微修正を加えまとめたものである。

参考文献

津村俊充・星野欣生（1996）． 16. 私とあなた（総当たりインタビュー）
Creative Human Relations vol Ⅷ， 197-209.

図1．



「よるべない100人のそばに居る。」 ：救護施設での出会いと人間関係

日時：2024年12月7日（土）13:00～14:30

場所：南山大学Q棟1階 Q104教室

講師：御代田太一氏

司会（池田）：

改めまして皆さま、本日はご多用の中、また寒い中、南山大学人間関係研究センター公開講演会にご出席くださりましてありがとうございます。本日の司会を務めさせていただきます、センター研究員の池田と申します。よろしくお願いいたします。

本日の講演会では、社会福祉法人グローが運営している救護施設ひのたに園で生活支援員として勤務していらっしゃいました御代田太一先生をお招きしまして、『「よるべない100人のそばに居る。」—救護施設での出会いと人間関係—』という演題で、現代社会における孤独・孤立、そして回復の過程などについて皆さまと一緒に考えていく、そういった場にしたいと思っております。本研究センターでは、人間の尊厳のために、豊かな人間関係をつくり上げていくために、ということで、さまざまな研究活動とともに、こういった、年に1～2回程度の公開講演会、また、社会人の方向けのさまざまな公開講座を開いております。そうしたご案内につきましては受付のほうに本研究センターの研究紀要、プログラムの案内等がございますので、お帰りの際にご覧いただければと思います。

では、本日の講師の御代田太一さんを改めてご紹介させていただきます。御代田さんは1994年、神奈川県生まれです。先ほどお話を伺っていましたら横浜市ということで、私は隣の川崎市出身で、住んでいた地名のことで少し話題が盛り上がりました。高校を卒業された後、東京大学教養学部をご卒業され、その後、ホームレスや刑務所出所者を受け入れる最後のセーフティネットという、書籍のほうにもあります救護施設にて生活支援員としてお仕事をされていらっしゃいました。そちらで支援員として働いていらっしゃる中で、聞き書きを通して、そういった施設に来るさまざまな「よるべない人たち」のそれまでの生き立ちであるとか生活について聞かれたことをまとめられ『よるべない

100人のそばに居る。〈救護施設ひのたに園〉とほく』という書籍をお書きになりました。本日、後ろのほうで書籍の販売も行っておりますので、よろしければ後ほど手に取っていただければと思います。

それでは御代田先生、よろしくお願いいたします。

御代田：

御代田太一と申します。今日はお越しいただいてありがとうございます。よろしく申し上げます。治りかけの風邪をこじらせていまして、あめ玉をなめながらで恐縮なのですけれども、お話をさせていただきます。

今回「よるべない100人のそばに居る。」というのは後ろでも販売させてもらっている本のタイトルなのですけれども、副題として「救護施設での出会いと人間関係」というテーマをいただきましたので、ちょっとそんなところにフォーカスしながらお話しできればと思っています。

自己紹介はご紹介していただいたとおりなのですが、横浜で生まれまして、ちょうど再来週30歳になります。高校を卒業した時点では、こういう福祉とか障害のある人のことには全く知識も関心もなかったような人間だったのですが、大学のときにある出会いがありまして、こういう分野に興味を持って、今、ここでお話をさせていただいているというような経緯になります。5年半滋賀県の救護施設で仕事をしまして、今は東京に戻ってきてサラリーマン生活をしているのですけれども、ゆくゆくは福祉のほうで仕事をしたいと思っています。

今日のタイトルにもあるように、救護施設の話をもっとさせていただくつもりなのですけれども、まず皆さんにお伺いしたいのですが、今日この講演のチラシを見る前の時点で、救護施設をご存じだったという方はどのぐらいいらっしゃるでしょうか。

1人いる。

ほかにいないですか。

分かりました。そうですね。なかなかマイナーな施設かなと思います。

救護施設はどんな施設かという、法律上はこうなっています。生活保護法第38条第2項です。「救護施設は、身体上又は精神上著しい障害があるため日常生活を営むことが困難な要保護者を入所させて、生活扶助を行うことを目的とする施設とする」ということが書いてあります。

これを読んで、皆さんはどうですか。何か施設に対してイメージはわきますか。なかなかわからないですね、これはいったい何だと。「身体上又は精神上著しい障害があるために日常生活を営むことが困難な要保護者」と、何かすごくそんな人、とんでもない人が入る施設なんだなみたいに、法律上の文言だけ読むと思ってしまいます。福祉の勉強とかを一定されている方も、お仕事をされている方も含めて、今日はもしかしたら結構いらっしゃるかなと思うのですが、救護施設という言葉自体はどこかで見たことがあるとか、教科書に何となく書いてあったなという方はいらっしゃるかもしれませんが、この文言だけを読

まされて「これが救護施設です。はい、次」みたいな形で、いったい何のことやら分からないまま今にきてしまったみたいな人が、福祉の仕事をしている人も多いのではないかなと思います。

実態を見てみると、どんな施設かというと、生活保護法に基づいて運営されている保護施設の1つです。保護施設にはほかにも婦人保護施設¹とか更生保護施設とかいろいろありますが、そのうちの1つの施設です。数としては全国に約180カ所あります。これを多いと見るか少ないと見るかは人それぞれですが、介護施設は例えば特別養護老人ホームは全国に何万カ所とありますし、障害者施設も何千カ所とありますが、そういう施設と比べるとかなり少ない施設数です。180カ所あれば都道府県に大体4～5カ所ですかね。来る途中に調べてきたのですが、名古屋市にも2カ所あるみたいです。東京にも5カ所ぐらいですが、23区にはないので結構みんな知らなかったりするという、そんな施設です。

どんな方が利用できるのか。さっき難しい文言が並んでいましたが、基本的な条件は生活保護を受給していること、この1点になります。ですから、18歳以上なら生活保護を受給できるので利用可能ということです。基本的に生活保護で皆さんがイメージするのは、生活保護費を1カ月に1回か2カ月に1回もらいに行き、現金をもらって、それで家賃とか食費とか日用品に払って地域で暮らしていくみたいなイメージだと思うのですが、そういうこともなかなか難しい状態にある人たちとか緊急で保護が必要な人たちが生活保護法の中でやってくるような施設になります。どんな人がやってくるかというと、基本的には住まいがない、お仕事がない、身寄りがないという、無い無い尽くしの方がやってくるというところで、こういう方を即日受け止められる、こういう方が即日入所できるような唯一の公的な福祉施設という位置付けになっています。法律上はすごくざっくりとした位置付けになっていることもあって、介護保険とか障害者福祉サービスとかいろいろなサービスがありますよね。介護保険もデイサービスがあったり施設があったり、障害者福祉サービスも働くことを支える場所があったり子どもの障害のある方を支える場所があったりといういろいろ細分化されていますが、そういった縦割りになったいろいろな仕組みでは支え切れないような、仕組みの中でこぼれ落ちてしまうような人を受け止める役割を担ってきたというところで、最後のセーフティネットといわれたりもするような施設です。いろいろなところで話していると、日本有数のマイナーな福祉施設なのではないかなと思いますので、今日ご存じの方がほとんどいなかったというのも納得できるかなというような施設です。

こんなマイナーな救護施設という存在が最近、最近といっても少し前なので

¹ 女性自立支援施設

すが、実はテレビデビューすることがありました。2019年ですから5年前、京都市で救護施設を新しくつくろうとし、それに対して住民がいわゆる反対運動、行政に説明を求めるような運動を起こしたというようなことがニュースになりました。ちょっと画像を見てもらうと、右上の子連れの女性は「誰も納得していないのに無理やり税金を投入して」という発言が紹介されていたり、左下の「住民は反発」というところとか、右下は「京都市の説明ではホームレスや刑務所を出所した人が入所する可能性も」というような、右下のところは昼間のワイドショーなので結構いろいろな人を見る番組ですけれども、最近唯一取り上げられたのがこういう形で取り上げられたニュースという形になります。これはいろいろ調べてみると、行政側の説明がすごく足りていなかったり、近くに保育園とか小学校があったりして、トラブルになりそうな種はたくさんあるので、準備不足だったというのもあるのですけれども、どうしても地域の一般の人からするとこういう目で見られるような施設、というのが現実かなと思います。

右下のように「ホームレスとか刑務所出所者が入所する可能性も」と。「本当にそんな人が入所するんですか」「本当にそんな人が入所するんです」という感じで、救護施設にやってくる人は具体的には大体こんな人がやってきます。ホームレス生活を長くしていた人もいますし、1日2日ホームレス状態になって緊急で保護が必要な人もやってきたり、刑務所を出所したが行くあてのない人、派遣切りになって住まいと収入を失った人、病院、主に精神科病院を退院した人、あとは依存症。依存症の種類はさまざまで、お酒だったりドラッグだったりギャンブルだったりですが、生活が破綻した人、ドメスティック・バイオレンスから逃げてきた人、長期の引きこもり状態にあった人、といったような形で、さまざまな状態で生活が大きくつまづいてしまった人がやってくる施設です。これはもう完全に事実で、おそらくどの救護施設へ行ってもこういう人たちがいると思います。でも、確かにこういう施設が近所に建つと聞いたらびっくりしますよね。どんな人が生活するのか、まず建てる前にちょっと話を聞かせてくれと、悪いことは言わないから建てるんだったらもうちょっと小学校から離れたところにしろという気持ちになるのは自然なことかもしれないし、お子さんがいたらそういう不安はなおさら強くなるんだろうなと思います。

こんな施設に、僕は大学を卒業してすぐ就職して働くようになったので、その働いている中で出会った人の話とか考えたことをこれから共有できればなと思っているのですが、その前に、なぜそもそもおまえはこんなところで働くことを決めたのかというところを話さないと、たぶんあまりモヤモヤが取れないままお話をすることになると思うので、最初にそこだけ簡単にご説明できればと思っています。どうして救護施設かというところですよ。

先ほどもちょっと申し上げたとおり、私は高校を卒業するまでは、本当にただの元気な高校生という感じで、順風満帆な高校生でした。中・高は運動部に

入って、文化祭もリーダーをやったりして、何とかぎりぎりの成績で東大に入ったという中で、東大でももっと頑張るぞという感じで、国際交流に参加したり、いろいろ積極的に課外活動をしていました。このように、自分の興味が赴くままに高いエネルギーを持っていろいろ頑張れば、その先にいろいろな企業とか官公庁とか、そういう先輩たちが行っているようなところに行くことになるんだろうと、何となく思いながら過ごしていたような1年生でした。ここまではありきたりな東大生、と言ってはちょっと語弊があるかもしれませんが、よくいるような東大生の1人だったかなと思います。

しかし、2年生のときに、人生を初めて考えるようなタイミングがやってきて、生きている意味って何だろうと考え込んでしまった時期が突然やってきたわけです。個人的には、小学校とか中学校とか高校でやってくるような思春期みたいなものがちょっと遅れて、僕の場合は大学のときにやってきたのかなというふうに振り返っているのですが、そんな時期がやってきてしまって、今までみたいにむやみに目の前のことを頑張って、期待される役割を頑張っていけばその先に明るい未来が見えるみたいなことが急にちょっと信じられなくなってしまって、一歩立ち止まって、自分って何で生きてるんだろう、どうやって生きていくんだろう、何が大事なんだろうみたいなことを「うーん」と考えるような時期が来てしまったわけです。

その頃に受講したのが、この右側の写真にも写っているように「障害者のリアルに迫る」ゼミというゼミで、今も東大で活動をしているゼミですが、障害の当事者とかさまざまなマイノリティの当事者ご本人をゲストに招いた授業で、ALSの当事者の方とか、盲聾という目が見えなくて耳も聞こえない方とか、精神障害を患っている方とか、医療的ケア児という重度の障害がある子を育てているお母さんとお子さんとか、そういういろいろな障害とかマイノリティといわれているようなご本人を呼ぶ授業だったわけです。通り一遍のバリアフリー論とかどういう支援が必要かという話ではなくて、私たちはどう生きてきたかとか日常そもそもどういうふうに住んでいるのかとか、そういうことを話してくれる授業だったので個人的にはとても面白くて、こういう世界があるんだと、こういう人たちが世の中に生きていたんだということを初めて知ったのです。僕自身、中高一貫校の男子校で中学受験をして入った学校だったので、もちろん障害のある同級生、分かりやすい障害のある同級生なんていないですね。基本的にみんなある程度均質性、同質性の高い集団の中で、3人に1人は東大へ入るみたいな学校だったので、そういう環境で生きていた自分にとっては、世の中ってというのはこういう場所だったんだみたいなことを初めて知るような時間でした。小学校以来初めて出会うことになった障害のある人の話を聞く中で、この人たちが生きている人生のほうが自分の人生より生き生きとしているなとか、本当にできないことがたくさんあって人のサポートを必要としているところもたくさんあるのですけれども、もっと人生って自

由だし可能性に満ちているなみたいなことを、こういう悩みを持っていた時期だったということもあって、すごくそういうことを思ったわけです。

このゼミにどっぷりはまってしましまして、このゼミを通じて障害とか福祉という世界にどっぷりはまってしまって受講を続けるのですが、毎回授業の後に飲み会がありまして、近所の渋谷の飲み屋に繰り出して、講師も一緒にお酒を飲むということを毎回続けていました。この左側の笑っている、ちょっとおでこの薄いおじさんは、全盲聾の東大教授の福島智さんという方です。もしかしたらご存じの方もいるかもしれませんが、目が全く見えなくて耳が全く聞こえない、中途の方で高校生のときに全く見えなくて全く聞こえなくなったという方なのですけれども、全くインプットがない状態で、話せはするのですがインプットは「指点字」といって、点字の要領で五十音を指に打っていくわけです。通訳者の方がピアノみたいに指に重ねて周りの人の言葉とか雰囲気伝えていく。そういう全くインプットのない、見えなくて聞こえないという真っ暗闇の中に生きている人です。話を聞いているときはどうやって生きているんですか、そんなんでも生きていて楽しいですかと正直思ってしまうような人と飲み会に一緒に行くと、げらげら笑って酒を飲んでいるわけです。コミュニケーションも指点字で「御代田君のビールが減ってます」と通訳者の方がこっそり教えて、「御代田君、もっとビールを飲みなさい」と言ってきて、「福島先生、見えてないでしょう」みたいなツッコミをしたり、そんな形で一緒に楽しく宴席をとものにできて、自分と全然違う体の状態の人、人生を送ってきた人と、こんなに楽しい時間をともにできるんだみたいな新鮮さもあって、これがまた各回いろいろな障害の人が来ますから、各回それぞれ発見があって、夢中になって活動をしていたわけです。

こういうテーマに出会ってしまっていて、いっそ大学時代にきちんとこういうことを突き詰めて考えてみようと思って、大学を1年休学したのです。福祉の現場へ行ってみようと思って1年間休学して、いろいろな現場を回りました。訪問介護のバイトをしたり、精神科病院も2週間ぐらいインターンで行ったり、北海道のべてるの家という有名な、精神障害の方が地域で生きているところとか、いろいろ行きました。実際、教室の中では見られないような、分からなかったような現場のリアリティにも触れて、自分自身福祉の現場で働こうなんていうことはゼミを受講しているときには思っていなかったのですが、ちょっとずつ、働いて実際に責任のある立場に身を置いて初めて見える、傍観者のままではいつまでもたどり着けないすごく面白いものがあるんじゃないかという気がしてきて、もう勢いで福祉の現場で働こう、卒業後の俺の進路は福祉だ、と1人で決めて、社会福祉法人への就職を決意しました、というのが大まかな経緯になります。

ただ、よくある質問として、周りは反対しなかったのかというところですが、反対だったり疑問が当然いろいろな方から聞かれて、大学の友人なんかは「福

社の現場に行くわ」と言うのと、「介護士になるの？」みたいなことを言われました。高齢者介護というイメージが強いのかもしれません。「介護士資格を取るの？」みたいなことを言われたり、一応企業就活も何となくやっていたのですが、企業の内定先の人事の方からも、土日でボランティアで関わればいいんじゃないのみたいな、「うちへ来てちゃんと給料をもらって仕事をしていろいろ成長したほうが、後々福祉へ戻ったときに役に立つんじゃない？」みたいなことをいろいろ言われたりしました。母に至っては「福祉に興味があるのは分かるけど、せめて厚労省にしてくれ」と、ここは笑っていただきたいところなのですが、親の気持ちってこういう感じなんだなという感じです。せめて現場ではなく、意思決定をする上流のところに行ってほしいという思いがあるんでしょうね。そういう声がありましたが、反対は振り切ってというかもう決めていたので、ごめんよと言って滋賀県の施設へ行きました。

数ある福祉施設の中で滋賀県の救護施設という場所を選んだのには理由がありまして、私もいろいろ見学したのです。障害の福祉施設も見ましたし、児童の施設も見ましたし、介護の施設も見て、結構いろいろ福祉といわれるようなところを全般的に、1年暇だったので練り歩いたのですが、救護施設が一番面白かったのです。なぜ一番面白かったのかというと、福祉のお仕事をされている方だったらよく分かると思うのですが、福祉というのはそもそも高齢者とか障害者とか児童とか生活困窮者とかと、大きくごっこり分野が分かれています。その中でも、高齢者だったら特に介護度の高い人が入る施設、介護度の軽い人が入る施設、介護度が軽いから自宅で暮らす人が受けるサービスとか、サービスにもいろいろあります。障害も、障害の程度とか種類とか年齢とか目標とかによってサービスがいろいろ縦割りに区分されて、それ自体の仕組みはとても合理的だなと思いますし、専門性を蓄積させていいサービスを提供するということは理にかなっているっぽい。いろいろ知りたい、いろいろ出会いたいという気持ちだった僕にとっては、1つの施設で1つのカテゴライズされた人たちとしか出会えないというのはちょっと退屈だなと思っていたところがあって、それを壊してくれたのが救護施設だったのです。唯一ごちゃ混ぜな、先ほどちょっとご紹介したように、18歳以上は誰でも入れるし、昨日路上で寝ていた人もいればDVから逃げてきた人もいるみたいな、いろいろな背景の人がいるというところで、救護施設で初めて福祉サービスと出会うという人も多いということを聞いて、福祉サービスというものを知らない人に支援者として初めて出会うというその緊張感みたいなところも味わえるんじゃないかなみたいなことの期待感を持って救護施設へ行きました。

いざ救護施設ということで、私が働いていたのはひのたに園という救護施設です。名前のとおり、滋賀県の日野町というところにあります。場所としてはここです。滋賀県の南のほうで、人口2万人ぐらいの町です。本当に田んぼだらけで、ずっと大学時代を東京で過ごした僕にとっては、田んぼってこんなに

たくさんあるんだという感じだったのですが、そんな場所へ就職を決めました。

結構古い施設です。1970年に開設されて、今も変わらないのですが僕が就職した2018年当時は定員100人だったので、常に100人の方が暮らしていました。救護施設は出入りがある「通過型」ともいわれる施設なので、1年間に約70人の入退所があるということです。ですから、年間日数で割ると大体1週間に1人か2人、新しく入ってくる人がいて地域へと出て行く人がいるという、結構慌ただしい施設です。その100人の年齢構成で言うと、本当にバラバラですけれども、大体平均50歳から60歳ぐらいです。中には90代の人もいれば、就職した時点の僕より若い人もいました。男性のほうが比較的多くて、7対3ぐらいでした。入所期間としては定めがないので、後でもうちょっと詳しくお話ししますが、数日間しかいない人もいれば数十年暮らす方もいるというような施設でした。

これは施設の入り口です。1970年代に建てられた大規模施設で、ほかのいろいろな障害者施設なども同様だと思いますが、ちょっと人里離れた、坂を100メートルぐらい上っていった先の、山を切り崩したところにある施設なので、看板は「救護施設 ひのたに園」とドカンとあるものの、この坂の上にはいったいどんな人が暮らしているんだろうとか、救護施設と書いてあるけどいったいそれはどういう施設なのか、というような感じで見られているような施設でした。

いざここに就職して社会人デビューを飾ったわけですが、期待がものすごく、アパートを借りて一人暮らしをしてという感じだったのですが、やってきたのはドタバタの日々でした。初日に内定式を終えて、着慣れないスーツを脱いで動きやすい服に着替えて現場に行ったとき、最初に目にしたのは事務所の机に置かれたお菓子の山でした。大きいビニール袋にかっぱえびせんとかあめ玉とかおまんじゅうとかがいっぱい入った袋があって、「これ、御代田君、1つぐらい持って行く？」と言われて、「あっ、いいんですか。これ何ですか、誰かの差し入れですか」と聞いたら、「いやいや、実はこれはうちの利用者が昨日コンビニからとってきちゃってさ、うちが買い取ったのよ。だから、職員で分けようと思って」というのが最初でした。万引きってこんなにたくさん起こっているんだ、日常の世間話みたいな感じで万引きの話が出てくるんだという感じで。ちょうど僕が初日出会った、お菓子を盗んできた人がなかなかの常習犯というか何度も施設の外に出てお金を払わずにお店から物をとってきってしまうという癖のある人で、僕が就職してから大体1週間に1回ぐらい、基本的にはその人は外出禁止ということになっているのですが、職員の目が届かないときにふらっといなくなってしまうわけです。その人がいなくなったということは、ほぼイコールどこかのコンビニが万引き被害に遭うということなのです。ですから、いなくなったとたんに、ピンポンパンポーン、職員の皆さんでお手すきの方は支援室に集まってください、と呼ばれて、空いている人から近くの

コンビニを1つずつ回ってきてと言って。「私はこっちを回るから、御代田君、こっちを回って」と言って、1つずつ車で回って、トイレも確認して、たまに見つけて「ああ、まだ盗んでないんですね」と言って一緒に帰ったり、そんな日々が続きました。それはほんの1エピソードですが、そんなドタバタの日々でした。

加えて、中には介助が必要な人もたくさんいるので、普段は入浴の介助、排泄の介助、食事の介助といういわゆる三大介助に結構追われているような日々なのです。職員も日中、100人に対して実際現場で直接ケアをする職員は9人、10人なのです。地域に出て万引きするぐらい元気な人もいる状況ですから、全員が全員介助が必要というわけではないのですけれども、なかなか介助にも手が追われるという日々で、加えて先ほどお伝えしたように、1週間に1人入ってきて1人出て行く。出て行くときも準備が必要ですし、入ってくる人を受け入れるのにも、昨日まで路上で寝ていたみたいなのもいますから、受け入れるだけでそれなりの時間とケアが必要な方の受け止めとか、100人が1つ屋根の下に、いろいろな人が住みますので、けんかもトラブルも絶えないのです。ですから、介助に追われながらも、こっちではけんかを止め、こっちでは新しい入所が決まったのでベッドの受け入れをし、と思ったらちょっとこの人がいないから探してきてほしいと言われたりしてみたいな、そんなバタバタな日々が始まりました。こんなにバタバタなんだと、自分が働いて、こういう施設でいろいろな人のいろいろな生い立ちとか生きづらさにもうちちょっと近く触れたいなと思っていたけど、忙しくてそんな余裕はないなというのが正直なところでした。

そのような中で1カ月ほど過ごしたのですが、働き始めのときにある印象的な方がいらっしゃいました。日野さんという方です。この方は記憶喪失でやってきた方でした。記憶を失っているので当然名前も分からない状態で、日野町だから「日野さん」と仮名で呼ばれていたのです。実際は別の名前なのですけれども、そういう形で市町村の名前になぞらえて仮名を付けて呼んでいました。記憶喪失状態とはどういうことだと、日本でそんな人がいるのかということを疑問に思われる方もいると思います。当時の僕もそれはいったいどういうことですかと、身元証明書とかがあるでしょうみたいな、この社会でそんなことが起こり得るんですかみたいに聞いたのですが、本当にそうみたいで、記憶喪失状態で交番で保護された方です。最初、何にも分からなくなってしまって交番に行ったのです。名前も分からないから助けてほしいと言っても、おまわりさんもそれは酔っぱらいと勘違いして、こいつどうしたと、頭を冷やしてからまた来いと言って追い返したらしいのですが、また同じような訴えを翌朝もしてきて、ちょっとこれはおかしいということで、市役所を経由してひのたに園にやってきたという方で、持っていたのがSuica1枚です。しかも無記名のSuica、ただお金がチャージできるだけの。そのSuicaの乗車履歴を照会しても、

20分ぐらい離れた駅から乗ってきたということしか分からず、名前も分からないし、住所も分からないし、何の仕事をしているのかも、親戚とか知り合いの連絡先も、一切何も分からない。もう人間であるということだけが分かるという状態でやってきたので、やむを得ず仮名で呼ばれていて、仮名でいろいろ行政手続きも進めていたという方でした。そもそも、いつ、なぜ記憶喪失になったのかもよく分からないと。でも、結構この方はガタイも良く、コミュニケーションは全く問題なく取れて、口数は少ない寡黙な男性だったのですけれども、温和でコミュニケーションスキルも高い人でした。ひのたに園では作業班というのがあって、仕事を含めた社会復帰を目指している方が生活リズムを整えたり仕事で基本的なリズムに慣れていくための活動として作業班というのをやって、平日の大体10時から4時ぐらいの4時間ぐらいこういう作業をするという、わずかですが工賃を稼いで還元していくというようなことをやっていて、こういう班に所属していました。僕もちょうどこの班を仕切ることになりまして、おまえもここの班の担当だと言われて、10人弱のおじさま・おばさまたちの中に弱冠22歳の大学出たてのペーパーの僕が、一応指導員として前に立って、皆さんラジオ体操を始めましょうとか、誰々さんは何番の作業に、誰々さんは何番の作業にと言っ指示を出しながらやっていくわけです。不慣れながらも緊張しながらやっていたわけですが、ちょうど日野さんもそこに参加していて、日野さんは比較のお行儀よく参加してくれていたのですが、結構やんちゃな方もたくさんいるのです。こんな若い小僧なんかに仕切られてたまるかという雰囲気をつつおじさんたちもいて、それは分かっていたのですが、やはり僕も職員だからと思って、いろいろと口を出したり作業の手順を変えたり、こっちのほうが絶対効率的なのと思って勝手に変えて、誰々さん実は変えておきましたとかということが続けていたら、ある日、何にも分からんやつが手を出すじゃねえ！というふうに、やんちゃなおじさまにパチンと言われてしまいました。職員は僕1人だけでみんな利用者、みんな50代、60代で年上、怒られて僕はもう縮こまってしまって、ああ、すみませんとかと言って、ほかの利用者の人はみんな関わりたくないから知らんぷりという逃げ出したくなるような状況がありました。最終的には解決したのですが、そのときに日野さんから一言、みんなが解散した後、「おまえはちょっと真面目過ぎやで。肩の力を抜くんだべ」と、ポンポンと肩をたたいてくれたのです。当時、東京から1人滋賀県にやってきて、誰も知らない施設に飛び込んで、自分の意思ではもちろんあるのですが、何かせわしない日々で、ずっと緊張していた自分の緊張の糸がぷつんと切れるようなタイミングが来ました。

救護施設は「救って護る」と書くじゃないですか。さっき言ったような無い無い尽くしの方、日野さんなんて名前も分からない、もう無い無い尽くしの頂点みたいな人がやってくる施設ですから、利用者は基本的に無力で、一方的にケアをしなければいけない存在だと、就職したときはどこか思っていたのです

けれども、日野さんからそういうふうになんか声をかけられて、いろいろ失った人が他人を配慮する心や余裕を持っているんだなという、何かすごいことを発見したような気になって、生きる力を本当のところ教えてくれたり肯定してくれているのは利用者のほうなんだなというのを感じるような出来事でした。

そんな就職したての日々でした。最終的に日野さんはどうなったかという、施設内にカレンダーが貼ってあって、そこに東北の山の写真が載っていたのですが、それを見て、この山知っているといい出したのです。「本当ですか」と。「知っている」と。たまたま東北の同郷の職員がいて、「誰々さんこの山知っている？どこらへん？」と。「ああ、そこや」といい出して、結局そういうのでしょとずっと記憶が戻って行って、高校の名称が分かったので、高校に照会をかけました。この顔の、たぶんこのぐらいに卒業した卒業生で、名前は分からないけれどもこの顔になりそうな学生さんはいましたかみたいな照会をしたら、名前が分かってご家族と連絡が取れて実家に戻られたというような形で戻られていきました。そんな形で無い無い尽くしの方が入って、日野さんの場合はすごくストーリーが完成されている感じがありますけれども、そういう形で一定期間、体と心と、いろいろな行政手続きや社会復帰に向けた準備をして出て行くと、そんな施設です。

職員さんのことをちょっとご紹介したいと思うのですが、職員は利用者100人に対して総勢35人ぐらいです。園長、副園長、入退所を担う相談員という役割の人、看護師さんもいらっしゃいます。僕がしていたのは生活支援員という、現場のいわゆる介護施設で言う介護士さんとか、そういうような立場の職種です。基本シフト業務で週1回の泊まりをして、夜間は職員2人で100人の見守りです。事件が起こると大変です。担当利用者というのもしまして、大体1人につき7〜8人、これは1年目の職員もベテランの職員もみんな変わらず7〜8名付いて、救護施設を利用するにあたっての支援計画、どういう目的でこの施設を利用してどういう状態になりたいのか、そのためにどんな支援が必要なのかみたいなところを、責任を持って考えていく立場です。加えて、行政手続きとか救護施設内での生活とか金銭面でのサポートもしたり、日々の相談相手とか愚痴聞き役にもなったりという感じで、園内生活の相棒みたいな感じで、担当利用者と担当支援員、「担当」と呼び合ったりするのですが、そういうのが位置付いて支援をしています。

僕にも8人の男性担当利用者が付きまして、その1人でとても印象的だったのがマルヤマさん（仮名）という方でした。この方は小柄な60代の男性で、救護施設に僕が就職したときには5年ぐらい暮らしているという方でした。担当は毎年変わるので、次は誰が自分の担当支援員になるかと。学校のクラス替えで次の担当の先生は誰だろうみたいな感じで、みんな結構気にしているのです。3月31日にバーンと貼り出されると、みんなそこにワッと駆け寄って、ああ、またこいつかよとか、こいつは新人か、大丈夫かとか言いながらみんなや

るのですけれども、僕は新人だったので、「御代田君、ワシの担当になったんだからな、毎日あいさつせなあかんで」というような感じで、ずっと言うてくるようなおじさんでした。お金の管理がちょっと苦手だったので、毎月の貯金額とかおこづかいとかを僕のほうで管理させてもらいながらサポートさせていただいた方で、もともとこの方は滋賀県内で6年ホームレスをされていた方でした。その後ひのたに園に来たという方で、ホームレスになる前は派遣の仕事を続けていたのですけれども、不景気で職がなくなって路上で生活せざるを得なくなったという方です。

ホームレスといったら皆さんイメージがつくと思いますが、実際路上の生活ってどういうことなんだろうと自分でも疑問がありまして、関係が築けてきた頃に、どんなふうに食事とかをしていたんですかというふうに聞いたら、「コンビニで弁当をもらって食べていたんや、ローソンってあるやろ、そこの店長さんが裏に來いって呼んでくれんねん」と言って、コンビニで弁当をもらっていたりとか。お金はどうしたんですかと聞いたら、缶拾いをしていたと。いわゆる缶拾いです。缶拾いにも縄張りがあるらしくて、「自分の縄張りではないところの缶を拾うと、誰のを拾ってんねんと怒鳴られることもあるわ」と。「千円もうけようと思ったら大変なこっちゃ、1日ばかりで缶をつぶして足がむくんでしまうわ」というような形で、ホームレス時代のことを教えてくれたり。こういうふうに明るく教えてくれるのですが、これを6年続けてきたというわけですからなかなか大変な日々ですね。大変なことはなかったんですかと聞いたら、やっぱり寝床を探すのが大変だったと。寒いときは暖をとるためにお店の駐車場とかで寝ていたそうなのですけれども、「若いやつなんか横を通ると、ひそひそ、おい、寝とるでとかかわいそうにとかと言いよるんやわ」と。「そりゃそうやろ、知らないおっさんが寝とったらびっくりするがな」というふうに、すごく明るくしゃべってくれるのですが、そういう1日を6年間過ごしてきたということを、その人と何回かに重ねて会話を取るうちに僕もようやく理解できてきたのです。

ホームレス生活を送っていた人は、救護施設に本当に何人もいます。一人一人のケースファイル、支援室に100人分のケースファイルがあって、そこに一人一人の簡単な生い立ちが最初のページに載っているのです。大体ホームレスをした人は、平成何年から平成何年にホームレス生活、大体このへんでみたい入った、この人はホームレス生活3カ月ぐらいたとか、この人は長いな、10年かとか、この人は数日ぐらいたとか、結構僕らも見慣れているのでそういうふうに簡単にあっさり受け止めてしまっていたのですけれども、やはりいろいろ考えてみると、どこで寝るのかとか今日食事がとれるのかとか、道行く人にどう思われるのかとか、予測がつくこととか頼れるものがない、まさに本当によるべがない状態で1日1日を過ごすことを6年間続けていたんだなということを、改めて感じるような出会いでした。「生活歴」というふうに

簡単にまとめられた中のホームレス生活何年というような数字の奥、ホームレス生活だけではないですけども、そういうざっくりまとめられた、サマライズされた、要約された人生歴というものの奥をやはり想像する必要があるなというのは、この人との出会いもそうでしたが、働きながらすごく感じていたことです。

この人はホームレス生活をなぜ6年も続けていたんだろうというのも気になっていました。生活保護があるじゃん。何で生活保護に頼らなかったんですかと聞いたら、生活保護を知らなかったと言うのです。そんなことがあるのかというふうに僕もちょっと思ってしまったのですけれども、じゃあどうやって知ったんですかと聞いたら、若いホームレスの方が教えてくれたそうです。「マルヤマさん、生活保護っちゅうのを知っとるか」というふうに聞いて、マルヤマさんは軽い知的障害がある方なので、たぶん片仮名で「セイカツホゴ」という言葉の響きとして受け止めて、何かそういうのがあるんやというふうに聞いて、その若いホームレスが「生活保護っちゅうのはワシらの権利やねん。マルヤマさん、市役所行ってみい。でも、洗いざらいほんまのことを話さなアカんで」というふうに言われて、マルヤマさんも年齢も50代後半になってきてちょっとこのまま路上で過ごしていくのはしんどいなと思っていた時期だったみたいで、ちょっとそいつの言うことを信じて行ってみようと思って市役所に行ってみたらいいです。そのまま自分の状況を話して、路上生活を続けてきた、派遣の仕事をしていたが辞めざるを得なくなったというところとか、ご家族の状況とか、いろいろ洗いざらい話して、その窓口担当者の判断で救護施設に行きましょうということでひのたに園にやってきたのです。生活保護という名前や存在さえ知らない人が、急に市役所に行ってもそのまま救護施設に連れて行かれるというようなところで、マルヤマさんの「ひのたに園」というところがありますねん。ここしかありませんからね」と、「いきなり何にも言わずに連れてきはったわ、殺されると思うたわ」と言っていました。殺されると思うのも仕方ないなと。マルヤマさんの的には刑務所みたいなのに連れて行かれると思っていたみたいです。まあ、でも衣食住があって雨露をしのげるんだったらいいかという思いでいらっしゃったみたいなのですけども、実際本当に人生につまづいて体も心もヘトヘトの状態の人が救護施設にやってくる道中は、生活保護を申請して洗いざらいのことを話して、突然知らない土地の知らない山奥の施設に連れて行かれるというのは、やはり相当ストレスフルな体験ですし、来る人たちというのはそういう感覚で来ているんだなということを、受け止める側はもう何人も、1週間に1回受け止めているのでどこか機械的になっているところがあるのですが、そういうことをきちんと想像して対応しないとというのも、このマルヤマさんから学んだことでした。

生活保護に関してまとめると、当たり前の権利という形で位置付けられていますけれども、生活保護を受給するために必要なこととしてマルヤマさんから

教えてもらったのは、生活保護の存在をそもそも知っているということです。その上で申請場所とか申請方法を知っていて、窓口に行って自分の状況を客観的に説明できると。窓口で説明した後のさらなるハードルとして、資産調査、自分がどれくらいお金を持っていて、お金や不動産とかの資産だったり就労の可能性、本当に仕事ができないのかというところ、できないことを証明するために、病気を持っていますとかちょっとけがをしていますとか、場合によっては医師の診断書が必要になったりという手続きがあります。扶養照会は、最近一部緩和されましたが、本当に頼れる家族がいなかったのかを最終的に確認するのです。頼れる家族がいるんだったらわざわざ税金から出さないで家族に頼りなさいという判断になるので。ちょっと前までは、窓口で家族の連絡先を窓口担当者が聞いて、その場でポチポチと電話をかけて、誰々さんのお兄さんですかと言って、マルヤマさんの場合もお兄さんに電話をかけたそうなのですが、こうこうこういう状態でいらしたんですけどちょっとサポートは難しいですかなみたいな形で聞くのです。こういうのってどうですか。自分が生活保護を受給する状況になってしまったということ、窓口に来ているということが、親やきょうだいに基本的にはやはり知られたい情報ではないですよ。知らせたかったら事前に言っていますよね。これで実際にサポートを頼めるような家族に出くわすことはほぼないのですけれども、そういう手続きが儀式的に残っていて、こういう資産調査とか扶養照会というものが、いろいろな困った人たちがSOSを出すときに結構ハードルになってしまって、そもそも生活保護や救護施設自体にたどり着かない人もたくさんいるということは現実かなと思います。

これに関して、最初に言ったようにニュースでも取り上げられていましたが、「刑務所から出てきた人もいますか」と。「います」というところなのですが、刑務所と救護施設は切っても切り離せない関係にあるのです。刑務所から来る人たち、罪状はいろいろです。万引きとか窃盗とか軽い犯罪が比較的多いのですけれども、特殊詐欺とか、中には強盗とか傷害致死という方もいらっしゃいました。数年、数十年の刑期を終えて、救護施設を経て地域に戻っていくという方です。比較的多いのは、少額の窃盗を繰り返して複数回受刑する人です。反省してないじゃないかという気になるのですけれども、実は反省とかということは本人はあまり関係がなくて、地域で生きていても仕事がないし頼れる人もいないから、半分わざと、困ったら捕まってもいいやという思いで窃盗をして、刑務所に行けたら衣食住は保障されているしとりあえずここで暮らすかということをやっと繰り返す。そうすると刑期はどんどん延びていきます。おにぎり1個でも、最初は数カ月というのが3年とかになるのですけれども、何十年と刑務所歴・受刑歴を繰り返す人が多いです。受刑者の約4割が軽い知的障害を持つということもいわれたりしていて、現実を見渡すと、やはり救護施設から見える刑務所というのは、この今の社会の中では刑務所自体が疑似的なセーフ

ティネットとなってしまうのです。「福祉はやくざと風俗に負けた」と、ある有名な福祉実践家が言っているのですが、本当に言い得て妙だなという感じで、本当は福祉が衣食住を提供しなければいけない。あとは生きがいですね、自分が有用だ、役割を持っていると思えるような瞬間とか体験を与えなければいけないところなのにできていない、ないしはSOSを出しやすい仕組みができていない。その結果、男性はやくざに、女性は風俗に流れていく。風俗は反対ですね、お金ももらえるし、自分の容姿を褒めてもらえる。やくざもそうです。衣食住を保障してもらえるし、何か組織の役に立つことをしたらシンプルに褒めてもらえる。自分には小さくても役割があるんだと、誰かのためになっているんだということが実感できる場所に、人はどんどん流れていくのです。ですから、救護施設が本当は担わなければいけないところをこういう場所が担っている現状があるということは現実かなと思います。

一方で、犯罪被害を負われた方もたくさんいて、あるとき不思議だったのが、オレオレ詐欺で1千万とられてしまって一文無しになってしまった女性と、恐喝で2500万円を脅し取って受刑した人が、一緒にテーブルで楽しそうにご飯を食べていたのです。もちろんお互いのプロフィールは共有していません。職員はそれはプライバシーに関わることなのであけすけにはしゃべらないので、もちろんお互いは知らないと思いますけれども、そういう形で最後のセーフティネットというのは、極端な加害も極端な被害もどちらもひっくるめて共存しているような場所なんだと、本当に日々働いていて感じる場所でした。

今までは新しく入ってくる人のことをお話ししていたのですが、実は先ほど、最初に数十年間暮らしている人もいますとお伝えしたと思うのですが、実際に本当にいらっしゃいます。今もいらっしゃいます。一番印象的だったのがこのヤスエさん（仮名）という方で、入所番号が7番だったのです。入所番号は延べ番号なので、今はもう2000番とか3000番とかになっているのですが、7番ということは7人目の入所者で、初日にたぶん30人ぐらい入所しているのです、そのうちの1人だったわけです。ひのたに園で一番の古株。1970年に入所しているわけですから、僕が働いていた時点でもう50年ぐらい、まだたぶんお元気に暮らしているのです55年ぐらい暮らしている方でした。口癖は「この人何ちゅう名前」と、この人って、目の前の人に向かって「この人」と言ってくるのです。「この人何ちゅう名前」と。「あなたは何ていう名前ですか」と言っても「この人何ちゅう名前」と言ってくるようなおばあちゃんです。

こういう人がどのぐらいいるかというと、ちょっと古いですが、2019年のひのたに園の在籍期間をマッピングしたグラフになります。ちょっと見ていただきますね。

一番多いのが、この上の四角で囲った「3年未満」のところで、大体合計で50人、半分ぐらいが3年未満の方です。比較的最近入ってきた方。5年未満とか10年未満とかもたくさんいる一方で、35年以上となるとドッと増えて、13人

います。これが開設当初に入ってきた方たちで、この1人がさっきのヤスエさんという方になります。

開設当初はどんな施設だったのかというと、1970年の6月に開設したわけですが、まだ障害のある人を受け止める福祉サービスが世の中にほとんどなかった時代です。ほとんど何もなく、基本的には家族が受け止めなければいけないし、何らかの手当も基本的にはないので、家族が何とかぎりぎりの状態で世話をしているというような時代で、そういった障害のある人を受け止める施設が世の中にたくさん、どんどんできてきた時代です。その中の1つとして救護施設もできて、基本的には一生を過ごす場所、一生面倒を見てもらいなさいねという形で20代前半とか10代後半の若い障害のある方たちがドッと100人入所したような始まり方の施設になります。

当時、50年前に開設に携わった職員さんというのも実はまだご存命の方もたくさんいらっしゃって、お話を聞いたことがあったのですが、そういう方いわく、「障害のある人は当時は家族の1人に数えへんと。要するに座敷牢という人もいはった」と言っていたり、家族からはこんな連絡があったということで紹介してもらったのがこれです。きょうだいが結婚することになって、でも相手方には隠しているんで急いで入所させてほしいと。だから面会の通知や行事のお知らせを送らないでください、という感じで、家族の中でも隠していて、もうどうしようもないから施設に入れてくださいという形で入ってきた方もいらっしゃいました。これ以外にもびっくりしたのが、いわゆる座敷牢で暮らしていて、基本的には外を出歩かないでずっと暮らしているので足腰の筋肉が弱ってしまって、基本ハイハイというかずり歩きみたいなのでできない筋力で過ごしていた方が、本来はもっと栄養をとって活動・運動すれば普通の人並みの体力が持てる人たちなので、施設に入ってからぐんぐん体力を取り戻していつて歩くようになっていくみたいなの、「そういう人が何人もいはったわ」、みたいなことを言っていたのが印象的でした。こういう時代に入った1人が、さっきのヤスエさんになります。今も暮らしている人です。

ヤスエさんにインタビューをさせていただいたのがこちらです。お生まれはどちらですかと言うと「びわ町、川道」と、もう今は合併してなくなってしまった町なのですが、入所する前に暮らしていた、日野からはだいぶ遠い町のことを言っていました。いろいろご家族のことを聞いていいですかと聞いたら「男の子いはるわ、大津にはるわ、預けてあるわ」と。「赤ちゃん生まれはった。大津病院、大きな病院」と、こんなしゃべり方なのですが、男の子いはるわと言い出したのです。男の子いはるわってどういうことですか。「えっ、赤ちゃんがいるの？お子さんいるの？」と聞いたら、本当にお子さんがいるみたいなのです。入所されたのが22歳ごろだったので、入所する前にお子さんを授かって産んで、でも、このヤスエさん1人では育て切れない、父親がどこにいるか分からないという状態で、息子さんは乳児院に預けられてヤス

エさんだけ救護施設に来たというような形でいらっしゃった方だということが、インタビューで初めて分かりました。お名前は何ですかと聞いたら「ソウキチって名前。男の子で役場の人が付けてくれた。大きくなってはるわ、働いてはるわ」と言っていました。もう50年前の話なので、50歳なのでそれなりに大きくなっているんだろうなと思うのですけれども、でも実際ヤスエさんは、この施設に入ってから一度もお子さんとはたぶん会っていないのです。ちょくちょく、ここで暮らしているよとかこんな仕事をしているよというのは市役所を通じて本人に連絡は行っているんでしょうけれども、たぶん会ったことはない。こうやって息子と離れて、親とも離れて、1人知らない町からやってきて、救護施設で50年暮らしてきた人がいたと。今ご家族のことはどうですかと聞いても、昨日息子を産んだかのような「大津病院」というような感じで言って、今も息子を思い続けているような日々を暮らしている方もいらっしゃいます。この方だけではないです。皆さんが家族と離れて、さっきのマルヤマさんではないのですけれども、ここはどこなんだろうという状態で暮らし始めて、何とか自分の慣れた生活のルーティンやリズムを身に付けて過ごしてきている。この人なんかはもう全職員を見ているわけですから。70年に開設しているわけですから、全職員と全利用者を見続けて見送り続けて今も暮らしている。そういう人たちがいるんだということも改めて感じたところです。

こういうことをいろいろ知っていくと、本当に当たり前なのですから、どの利用者にも救護施設に入るまでの人生があるなということをつくづくと感じて、ただ一方で、日々バタバタしていて、どんな人生を送ってきたのかなてなかなか余裕を持って聞けないです。基本的には支援をする立場で、根拠に基づいた適切な支援をするのが私たちの仕事なので、どうやって関わればいいのかということで、支援が必要な部分とか入所に至った暗い過去を聞くことが必要です。ですから、入所に至った直前の、なかなか暗い過去ばかりが強調されて、支援者と利用者の関係性が固定化してくるような感じがあったり、施設に入ったときに地域での生活の履歴が抹消されて、とたんに「救護施設利用者」と、さっきワイドショーで取り上げられていたような「救護施設に住んでいる人」みたいなかつ書きの人になってしまうようなところがあるかなと思っていました。そんなときに出会ったのが「聞き書き」という取り組みです。もともとはこの六車由実さんの『驚きの介護民俗学』という本と出会いまして、民俗学者だった六車由実さんが介護施設で高齢者に聞き書きを通じて利用者の生い立ちとか地域の歴史とかを再発見していくような物語なのですけれども、これは面白いと思って、救護施設でもやってみようと思ったのです。レコーダーとペンとバイNDERを持って、いろいろな方にインタビューをさせていただきました。

ちょっと時間がないので駆け足になりますが、特に印象的だったのがこの方です。一度自死を決意されて、山に登られたけれども死に切れずにやってきた

ご夫婦がいました。派遣会社で2人で働いていたみたいなのですけども、旦那さんのほうが仕事のいわゆるパワハラでちょっとうつ状態になってしまって「死ぬわ」と。「じゃあ、あんたが死ぬなら私も死ぬわ」と、山に2人で登って、細かい経緯は分からないのですけれども、でも山から下りてきたのです。交番にちょっともう行くあてがないんですよと言って救護施設にやってきた2人で、本当に見た目は普通の2人です。コンビニで缶酎ハイを買っていきそうな、本当に普通の40代中間ぐらいの2人です。どうでしたか、どんな気分だったんですかといういろいろ聞きました。奥様のほうにお話を聞いたのですけれども、「私1人でよう生きてかんし、だったらもういいよ、一緒に死んじゃおうって、そういうふうになったの。もう駄目だね」と。いろいろあって施設に來たわけですけども、この施設はどうですか、ぶっちゃけ暮らしやすいですかと聞いたら「いろんな人がおるよね。でも、声小さくなっちゃうけど、内心は一緒に入れられたくないと思ってたよ」というふうに言ってくれたり。この方はお2人とも、さっき言った作業班に参加されたり地域で就労、アルバイトをしたり、園内の作業も積極的にサポートしてくれたりして、徐々に体力も気力も取り戻して、大体半年ぐらいで、いい社長さんに巡り合えて仕事に戻っていくことになって、退所する2日前ぐらいにいろいろ話を聞いたら、こういうふうに答えてくださいました。施設での生活はどうでしたかと聞くと、「もうね、死ぬっていうことは考えないで、やっぱり笑って普通に暮らしたい、過ごしたい。子どももないし、向こうもうちも親と疎遠なもんやで、だから本当に2人だけなの。だから余計に、2人で笑って過ごしたい。で、たまに焼肉食べたりおすし食べたり、そういうふうにしたいけどね。でも、一番の望みは笑って過ごしたいっていうだけ。笑えるようになったから、ここで」というふうに、本当にうれしい言葉を言ってくれました。

救護施設は100人の利用者と30人の職員の、130人の大所帯です。人口密度もかなり高いですし、決して暮らしやすい場所とは言えないと思います。僕もあそこで暮らせと言われたら、ちょっと自分は難しいなと思うのが正直なところですよ。一方で、人間に囲まれて、職員は出勤したらすれ違う利用者の皆さんに「おはようございます、何々さん元気ですか」と声をかけるわけですし、利用者同士でもそういう声のかけ合いがある中で、人は時間をかけて回復していくんだなというのを感じさせられた2人でした。

ほかにもいろいろ聞き書きをさせていただきました。ちょっと詳細は省かざるを得ないのですが、ブラジルからやってきた人、この人は保険証も持っていなかったのですけれども、山でイノシシとかサルを食べて生きてきたおじさんとか、コロナ禍でパチンコ屋が最初に休業したじゃないですか。パチプロが収入を失ったとって生活保護で来たらしいのですが、そういう方とか、あとはHey! Say! JUMPのマネージャーをしていたと語る男性、結局これはうそだったということが分かったのですけれども。いろいろな方に聞き書きをさせてい

ただきました。聞き書きは、その人が生きてきた分厚い歴史とか生い立ちとかを改めて感じられて、こういう施設に来るような人なので自分の知らなかったいろいろな暮らしの形とか社会の側面にも気付かせてくれますし、支援してあげる立場というところから聞かせてもらうという立場に一瞬逆転することで、ちょっと関係性に風が吹くというか、お互いが心地良い関係になるというような、ポジティブな効果が自分にはあったかなと思いました。

最後に「救護施設から地域へ」というところで、どんなところへ皆さんは出て行くのかというところですが、最終的には皆さん、年間70人出て行かれますが、アパートとか寮付きの派遣の仕事とか、ご自宅に戻られる方もいますし、介護福祉サービスとか障害福祉サービスを利用して施設に行かれる方もいらっしゃると思います。ひのたに園ではそのためのサポートもしていて、物件探しとか1人暮らしの体験とか。体験用の1人暮らしの学生用ワンルームみたいなのも施設外にあって、そこで1カ月練習して送り出すみたいなことをやったりしています。金銭管理の練習、大体食事にはどれぐらいのお金が使えるのかみたいな相場観を。施設の中では基本的に給食が出てきてしまい、地域で1人で暮らす生活のシミュレーションというのがなかなかできないので、そこを知ってもらったり。退所した後もアフターサポートを充実化させているのが最近です。電話連絡をしたり、定期的に訪問したり、ひのたに園の活動に定期的に足を運んでもらったりという形でしています。

これまでひのたに園も、刑務所と同じように、送り出すときにもう二度と来ないように頑張りなさいみたいな感じで送り出していたのですが、そうはいつでも何度も来る人もいます。冬になったらもう寒くなったからちょっと来てしまいましたとか、またちょっとやらかしてしまいましたとか、またお金がなくなっちゃいましたとかという人もいますので、また来てもいいから何か困ったらすぐその場で連絡をくれと、困ったら行くからというような形で、また困ったらいつでもどうぞというスタンスに変えることで、むしろ逆に最悪の事態を未然に防げるようなスタンス、良い結果も生まれてきました。

地域に送り出して日野町内でアパートを探す人もたくさんいるので、地域との関係というところもすごく大事になってきます。最近ではこの右下のところ、地域の畑を借りた農業活動とか、日野町は信楽という町が近くにあって信楽の陶芸家さんが住んでいたりするので、その方を講師に招いて利用者の方の陶芸活動をやったり、いろいろ地域の方を巻き込んだ活動・取り組みというのを進めています。徐々に、得体の知れない迷惑施設から、にぎやかな近所さんという、地域の目がシフトチェンジしているのかなというところです。

広報誌も、僕が就職した当時の広報誌はこんな感じだったのです。何となく福祉施設の広報誌ってこんな感じだよなとみんな思うのでしょうかけれども、なかなか利用者の顔は見えないですね。100人住んでいて職員が30人いて、僕がしゃべってきたようなこれだけのドラマとトラブルが日々生まれているよう

な施設で、習字とか生け花とか、ちょっとこれは味気ないだろうと。地域の人
も、理解を促進しようと思ってもこれを見たら分からないよと僕も思っていた
ので、いろいろと提案してアップデートして、最近の広報誌がこれです。顔を
ドンと出したり「人生いろいろ」というコーナーを設けて、聞き書きで聞かせ
てもらったような内容をすごくぎゅっと短くして実名で紹介したりして、地域
に顔が見えるような施設・利用者になってもらえるような取り組みもしたりし
ています。

最近、子ども食堂も始めたのです。「つどえば」です。子どもに限らず地域
のどなたでも参加可能という形にして、子どもは無料、大人は1食100円です。
食材は農作業でとれた野菜を使って、準備・調理・おもてなしは利用者も元気
な人は積極的に関わってもらおうというようなところなんです。こんな感じでサラダ
をつくっているところですけども、これは、真ん中は地域のボランティアの
方ですが、両サイドは利用者の方です。今まで活動がなくて、ジーンと施設で
閉じこもって、時々やってくる塗り絵の先生みたいな人と一緒に塗り絵をして、
ボーッと自分の役割はないなと思ってもんもんと暮らしていた人たちも、どん
どん地域に出て子どもたちのご飯をつくるような役割を任せると、皆さん本当
にいろいろなご経験をされてきた方なので、本当に手際よくやってくれますし、
子どもの扱いも下手な職員なんかよりよっぽど上手ですし、そうやって救護施
設利用者ということを意識せず救護施設の中の人と外の人が絡んでいく、接点
をつくっていくような感じです。子どもたちもいますし、この左がお父さんら
しいです。この姿はやはり大事だなと思います。

さっきのこの住民説明会の姿は誰の顔も見えていない。誰の顔も見えていな
くて、基本的には一方的にケアすべき、税金を投入して支えてあげなければな
らない人、何でそんな人のために税金を使わなきゃいけないのというような、
こういう世界観からこういう世界観にどんどん変えていかなければいけないな
というのは思います。最近はバリアフリー演劇といって、劇団を呼んで、壇上
に上がってもいいというすごいバリアフリーな演劇なのですけども、地域の
子どもたちとかいろいろな市民の方も呼びして、壇上にひのたに園の利用者
さんとか地域のフリースクールの子どもたちとかが上がって交流しているとい
うようなことも続けている状況です。

こんな形で、厄介な人が集まる施設から地域のケアの、どんな状態の人でも、
困ったらひのたに園が手を差し伸べてくれる、救護施設が手を差し伸べてくれ
るというような、地域のケアのハブにどんどんしていかなければいけないなと
いうのと、今の社会でどんどん不可視化されているというか、見えない場所に
どうしても閉じこもってしまいがちなケアの営みというものとは自然な形
で出会えるようなチャンネルを増やしていくということが、これからの救護施
設の役割なのかなと思います。

これが最後にお見せしようと思った写真で、こんな方が暮らしています。こ

れは運動会の様子で、みんな白組の鉢巻を巻いていて、真ん中にちょこんと座っているおばあちゃん、この方も入所して50年ぐらい経っている方です。本当にいろいろな表情を持った一人一人の方が暮らしているということを伝えていくことが大事かなと思いますし、もし今日ご紹介できなかった方のことも知りたいという意欲的な方がいらっしゃいましたら、本の中にも詳しく書いてあるので、お手にとってもらえればと思います。

すみません、ちょっと長くなってしまいました、ご清聴ありがとうございました。

池田：

御代田先生、ありがとうございました。

限られた時間にはなりますが、もしよろしければフロアのほうから何かご質問等ございましたら、せっかくの機会ですので声を出していただければと思います。いかがでしょうか。

御代田：

すみません、長くなってしまいました。何でも大丈夫です。下世話な質問でもいいです。

池田：

たぶん味わって考えてくださっているかと思いますので、その間に。

先ほちょっと実は控え室でも少しお話しさせていただいたのですが、私としてすごく気になるのは、御代田さんがこの道に入ろうと思った最初のきっかけで、いったい何が。「障害者のリアルに迫る」ゼミというのは結構その道では知られたものだとは私は思っていて、何度か耳にはしたことがあって。詳しくは知らないのですが、そういうものが目の前にあったとしても、全くそこに視線が向かない。特に大学で教員をしていると、御代田さんの今日の講演会のポスターもキャンパス中あちらこちらに貼っているのに、来ている学生の姿は本当にごく限られているということを見ると、いったいそこにふっと目が留まったというのは、留まらない人との違いは何だと思われますか。本当に、個人のお考えを聞くしかないかなと思うのですが。

御代田：

ありがとうございます。

人によっての違いというよりは、どういう入り口で出会うかのほうが重要かなとは思っていて、僕はやはり一言で言ってしまうと好奇心だったのです。自分が悩んでいて、この答えが知りたい、何かヒントが欲しい。そのときに、障害がある人の話だったら何かヒントになるかもしれない、何か別の切り口のアイデアがもらえるかもしれないと思って、フットワークが軽いほうだったというのもあると思いますけれども、ふらっと行ってみたというのがきっかけ。

やはり最初に感じたのは、面白いということだったのです。この人たち面白い、この人たちの話を聞いていると何か元気になると。飲み会も行って、毎回

お酒もおいしいし、ゲラゲラ笑いながら、人間ってやっぱ面白いなということを感じられる、そういう入り口の出会い方というのは、もっと増やしてもいいかなとは思います。

例えば、車いす体験とかってあるじゃないですか。あれって面白いのかなというのが正直なところで、やらされ感がどこかあるとやはり教えられる側は引いていってしまうし、自分で能動的に学ぶとか面白さをつかみ取るみたいなのが難しくなってしまうなと思います。

本当に障害の世界、福祉の世界は、もっといろいろな面白さとか切り取り方がある中で、やはりもっと学生の好奇心を刺激するような、興味を持って何となくのぞいてみたくなっちゃうみたいな形で発信をしていく、理解を深めていくというアプローチが大事かなと思います。

池田：

ありがとうございます。

はい、後ろから。

フロア（A）：

トワイライトスクールの基幹専門員をしまして、今日午前中仕事があって、そこから来ました。子どもの施設で、非常勤で仕事をさせていただいた経験もあります。ささやかですが、不安定ながら全部子どもの仕事でやっています。

ずいぶんいろいろな人をオーケーにしてくれる救護施設なんだなと思いました。でも、どうやってやっているんだろうというふうに、すごく難しいだろうなと思いました。

私なんかはある養護施設で子どもたちの宿題を教えるというのをやって、それがすごい転機になったのですが、でもこれはすごいなと思って。少し個人的ではあるのですが、いろいろな人がオーケーになる中で、例えばギャンブルのようなことがやめられなくてやってくる人と記憶障害の人がみえたということですけれども、子どものある施設でやったときも記憶が戻る瞬間があって、そういうときは割とちょっと危険なことが起こりそうだったのです。記憶障害の人やギャンブル、これも依存症なんだろうなと思うのですが、そういう非常にメンタル的な、心理寄りの、例えばうつとかきちんとした診断名がばっちり付くのではなくて、ちょっとそういう人たちについてはどうやってやってみえるのでしょうか。

御代田：

そうですね。本当におっしゃるとおりで、誰も断らないと言うと聞こえはいいのですが、本当に大変です。ダイバーシティは行き過ぎるとただのカオスになってくるので。僕が就職した当時は本当にカオスで、刑務所出所者が10人近くいて、結構やんちゃな人たちなのです。やんちゃな人たちというのは、やんちゃな人が隣にいると呼応してしまってもっとやんちゃになるのです。そ

して、ちょっとずつグループ化みたいのが始まって、抗争みたいのが始まって、もうしっちゃんめっちゃかになっていたりしました。

いろいろな難しさを抱えた人たちですね。ギャンブル依存の方は僕も担当利用者の方にいましたし、パチンコに行っちゃ駄目と言ってもいなくなってパチンコで大負けして怒鳴り込んで帰ってくるとか、精神障害の方、急性期の方はいらっしやらないですけども、施設で暮らす中で統合失調症の症状がバーッと再発してしまう人なんかもいたりしました。

そこは職員だけ頑張ればいいという問題ではないし、カオスになればなるほどほかの利用者の過ごしにくさは増していくわけですから、そこは施設としてコントロールしなければいけないところかなと思います。うちの施設でも性犯罪歴のある人はやはりちょっと受け止めは慎重になっていました。女性棟と男性棟が、本当に何のセキュリティもなく入れてしまうところだったので、それはそれでいいことだとは思うのですけれども、そういう細かい調整はしたりしながら、何とか多様性とカオスのぎりぎりのところで均衡を保っていたようなところがありました。

すみません、質問の答えになっているかが。どうですか。

フロア (A) :

大体分かります。ありがとうございます。

池田 :

ありがとうございます。

そのほかいかがでしょうか。せっかくの機会ですので、どうぞご自由にご発言いただければと思います。

フロア (B) :

今日は貴重なお話をありがとうございました。

最初の先生のご質問とちょっと重なるところがあるのですけれども、関東の大学で教員をしております、学生たちのキャリア教育というのが今、非常に重視されています。その中で、お話くださったような形、自分の生きがいを見つめて、収入とか肩書きとかそういうことに捉われずに自分の行く先を決めるということが一番本当は大事だと思うのですけれども、大学としてはやはり就職率であるとかメジャーなところに就職させようというような。ですから、いくら学生たちに興味・関心を、福祉の世界に導くようなことをせっかく入れ込んでも、結局大学全体として、あるいは社会全体として、経済合理性といったところの価値がすごく強い中でどうしたら、まあ似たような質問になってしまうのですけれども、本当に自分の人生にとって価値があると思うことと向き合って、周りのそういった雑音に捉われず、興味があっても結局土日だけやったらいいんじゃないかとかそういうことになってしまわないような、そこでキャリアをちゃんと切り開いていくことができるように、私たちに何ができるんだろうという。

すみません、ちょっとまとまりのない質問なのですが、よろしくお願いいたします。

御代田：

そうですね。僕にお答えする権利があるのか分からないですけども、1つ、僕自身よかったと思うのは、大学でじっくり自分が何をしたいかと考える時間と余裕があったということは大きかったです。卒業後のことに追われて、1年生、2年生の頃から何かをしなければいけない、就職の準備をしなければいけない、資格の勉強をしなければいけないとなったら、たぶんこういう出会いはない、新しい出会いは開かれないと思うので、それがまず大事だなと。最近就職の準備のスタートが早過ぎて学生も大変だなと思いますけれども、何かそういう就職活動とは別の軸で社会と出会うという時間とか機会はまず大事だなと。なかなか福祉は、やはりお給料もそんなに高い職種ではないし、最近特に一般的な企業との差がどんどん開いている中で、やはりこちら側でできること、福祉サイドができることとしては、働いて面白いんだというモデルをどんどんつくっていくことだなと思います。単に資格が取れて、安定的にお金が稼げるよというところだけではなくて、キャリアアップができて、自分のこんな力が身に付いて、こんな役割を背負っていける、何年でこのぐらいになれるというようなモデルをどんどん示してあげるとか、そういうことが必要なと思います。学生のせいばかりにしていってもなかなか物事は進まないで、そういうことが大事かなと思いました。

フロア（B）：

ありがとうございます。

池田：

ありがとうございました。

ほか、いかがでしょうか。

フロア（C）：

ご講演ありがとうございました。南山大学人文学部3年生の学生です。

感想になってしまうのですが、利用者さんそれぞれの歴史的な背景だったり今までの生き様を見ていくというので、すごく大事だなと思ったのがあって。昨日僕は大阪に行って、いろいろなところを歩いていたのです。そうしたらホームレスの方々が出て、最初僕がそのとき思った印象は「怖っ」なのです。僕から見たらその人たちはただのホームレスの人という認識でしかなくて、だから見えている状態、僕の見えている目線で言うと、その人たちはホームレスという情報しかなくて、だから怖くなってしまうのですけれども、こういった救護施設の中でホームレスのAさん、ホームレスのBさんというので、今まで生きてきたその人のヒストリーというか、そういうところが分かってきて初めて、その人はただのホームレスの人とか厄介な人とかだけではなくて、Aさん、Bさんというそれぞれのその人自身が形を帯びて見えてくるのかなと思ってい

て。最初のニュースのところでもあったのですけれども、あの情報だけだとホームレスの人ってちょっと怖いよねとか、刑務所出所者はちょっと怖いよねという、その刑務所出所者というカテゴライズでしか見られないと思うのですけれども、実際に関わっていく中で、刑務所出所者の人ではなくてAさん、Bさんという感じで、その人自身が見えてくるのかなと思って、すごく重要な知見を得られたのかなと思いました。ありがとうございました。

御代田：

ありがとうございます。

ぜひ誰か気になる人がいたら、聞き書きをしてみることをお勧めします。書き起こすのは大変ですけれども。

池田：

彼は卒業論文でやろうとしていますよね。少年のインタビューを。

フロア（C）：

トー横の人たちの。

御代田：

そうですか。

フロア（C）：

はい、背景に迫ろうと思っています。

御代田：

そうなんですね。とてもいいと思います。じゃあ、東京に行って、歌舞伎町に行って、フィールドワークしているのですね。

フロア（C）：

インタビューしに行きます。

御代田：

おお、素晴らしい。

池田：

ほか、いかがでしょうか。

最後、お2人いらっしゃったので、Dさん、お願いします。一番後ろの方。

フロア（D）：

本日は大変貴重なお話をありがとうございました。私は名古屋市内で障害者施設を運営している者です。かつ、現在こちらの大学の学生さんのフィールドワーク、新人の方を毎年受け入れている実習担当でもございます。

お話を聞いて、私も障害者施設を運営している立場の者として同じようなことを体験し、非常に共感と関心を持ち、聞かせていただきました。新たな施設をつくるときの、その地域での反対というところは私どもも同じようにありました。そういうことから、私どもも「施設の見える化」というところに現在も取り組んでいるのですけれども、やはり結論、そういった障害を持った方なりいろいろな方を知らないことが差別・偏見を生んで、そういったことになって

いくということから、本当にインクルーシブ、ダイバーシティの社会をつくっていくためにどのように取り組んでいくかというところが私たちの今の課題でもあって、私も地域サロンとかいろいろ始めたりはしているのですが、それでもなかなか地域へのアプローチの仕方、広報活動というところでも行き詰まったりして、今、多様な活動が地域にあふれているということとか、つながりというのもそれなりの個々に始まっている中で、なかなかそこに関心を持って来ていただける方が限られるというところの、ちょっと今、さらにどういう形で広報をしていくかというところで苦戦しております。そこで、何か別な視点でご意見なりアドバイスをいただけたらと思います。お願いします。

御代田：

ありがとうございます。

そうですね。直接的なアイデアは分らないですけども、例えばこの広報誌。広報誌なんてただ紙を刷って地域に配っているだけなので大した取り組みではないのですが、これは僕が2年目のときに広報誌の担当をもらって提案して、デザインを全部変えさせてもらったのです。こういうのをやってみたいんですと園長に相談したら、園長はオーケーしてくれて「やったー」と。僕はしめしめと思って実際につくっていたら、1年目の後輩の子が言ってきたのです。その子は福祉の専門学校で4年勉強してきて救護施設で実習もしてきたという子で、仕事はすぐできる。「御代田さん見てると、僕だったらこんな絶対つくろうと思わないです。部下がこれつくって言ったら絶対反対しちゃいますわ」と言っていました。基本、個人情報保護する、施設の人を守る、個人情報は外に出さないということを教室で教えられてきた身としては、こんなのは絶対思い付かないし、ネガティブに反応しちゃいます、と正直に言ってくれたのですが、それは本当にそうだなと思います。僕自身はそういう福祉の勉強は一切してこなかったもので、こういう福祉の勉強をしている人が見たらギョッとするようなことも自然とアイデアとして出てきたりするし、でも自分自身が働き続けていると、やはり施設の色に染まっていく感じもあるので、常にほかの人の、外部の風とか外部の視点を入れるというのは大事なかなと思います。やはり自分たちが気付かない施設の魅力とか切り取り方とか接点のつくり方とか、そういうアイデアをフレッシュにしていくためにも、施設でジーンと考えているよりは外とつながるのが突破口になるかなという気はしました。

池田：

ありがとうございました。

最後に、前の方。

フロア(E)：

本日はお話をありがとうございました。1点お聞きしたいことがあります。

お話の中で、救護施設の中で子ども食堂であったり地域の方の畑を借りた活動があったとお聞きして、そういったことが印象に残っているのですが、

利用者の方の生きる活力であったり希望であったり、やりがいをもどのように育んでいるのか、またどのように育まれている仕組みがあるのかを教えてください。

御代田：

ありがとうございます。

そうですね。やはり一言「役割をつくる」ということに終始するかなと思います。救護施設にはいろいろヘトヘトになった人が来る場所なので、それをまずケアするというのが一番なのですけれども、そこからもう一歩、元気を出して自分で生きていくぞと、サポートを受けながら一人で生きていくぞというところにいくまでには、やはり何か自分の役割を持って活動するとか誰かに感謝されるとか、施設を越えて自分が一市民として何か貢献しているとか、そういう感覚が持てることがすごく大事で、でも、それは別に救護施設がしなければいけないことではないのです、法律で決まっていることではないので。ですから、そこは施設としてきちんと意識的に取り組んでいく必要があると思うし、学生さんならたぶんいろいろな施設をこれから、もしかしたらこういう施設だけではなくて学校とかを見るのかもしれないですけれども、決まり切ったことではないこと、決められていないことをたくさんやっているところのほうが多ぶん良いところだと思うので、決められていないことも含めて役割をつくっていく、いろいろな形でいろいろな役割をつくって、いろいろな人がどこかにフィットするような間口を開いていくということが大事かなと思っています。

フロア（E）：

ありがとうございます。

池田：

ありがとうございました。

まだまだいろいろ伺いたいお話はあるかと思いますが、いったんこちらで終わらせていただきます。御代田先生、本当に今日はありがとうございました。

改めまして、本日は寒い中、お集まりいただきましてありがとうございます。これにて閉会とさせていただきます。

ありがとうございます。

■ 2024年度人間関係研究センター事業報告

(2024年4月～2025年3月)

I. センター員構成

[センター員]

中尾陽子	(経営学部経営学科准教授・人間関係研究センター長)
青木 剛	(人文学部心理人間学科講師)
畑山知子	(体育教育センター准教授)
池田 満	(人文学部心理人間学科准教授)
伊東留美	(人文学部心理人間学科准教授)
楠本和彦	(人文学部心理人間学科教授)
森泉 哲	(国際教養学部国際教養学科教授)
中村和彦	(人文学部心理人間学科教授)
中西美和	(人文学部心理人間学科教授)
大塚弥生	(教職センター准教授)
土屋耕治	(人文学部心理人間学科准教授)
宇田 光	(教職センター教授)

[公開講座担当者及び外部講師]

加藤敬介	(堀クリニック)
永野浩二	(追手門学院大学教授)
並木崇浩	(愛知淑徳大学学生相談室 助教)
大島利伸	(南山大学附属小学校教諭)
竹田悦子	(労働衛生コンサルタント事務所オークス メンタルヘルス室)
山根倫也	(関西医科大学精神神経科学講座研究員)

[事務局]

藤田嘉子 深澤美樹 大月紗夜 滝川暢子 山本佐知子 脇阪聖子

II. 活動報告

①人間関係研究センター定例研究会

開催なし

②人間関係研究センター公開講演会

日 時：2024年12月7日（土）13：00～14：30

場 所：南山大学 Q棟

講 師：御代田 太一氏

題 目：「よるべない100人のそばに居る。」

：救護施設での出会いと人間関係

参加者：30名

③人間関係研究センター公開講座

【ラボラトリー方式の体験学習の講座】

第10回人間関係講座〈ベーシック〉

開催期間：2024年5月18日（土）10：00～17：00

場 所：南山大学 D棟

参 加 者：25名

担 当 者：中尾陽子、大塚弥生

第124回人間関係講座（グループ）

開講期間：2024年6月22日（土）10：00～18：00

2024年6月23日（日）9：00～17：00

場 所：南山大学 D棟

参 加 者：18名

担 当 者：伊東留美、大塚弥生

第125回人間関係講座（コミュニケーション）

開講期間：2024年10月26日（土）10：00～18：00

2024年10月27日（日）9：00～17：00

場 所：南山大学 D棟

参 加 者：16名

担 当 者：森泉 哲、中尾陽子

第2回人間関係講座（オンライン）

開講期間：2024年6月6日（木）9：30～12：30

2024年6月20日（木）9：30～12：30

2024年7月4日（木）9：30～12：30

2024年7月18日（木）9：30～12：30

2024年8月2日（木）9：30～12：30

2024年9月19日（木）9：30～12：30

場 所：オンライン（Zoom）開催

参 加 者：14名

担 当 者：池田 満、中村和彦

Tグループ【人間関係トレーニング】

開講期間：2025年3月8日（土）～3月13日（木） 5泊6日

フォローアップ 2025年7月6日（日） 南山大学 D棟

場 所：（財）KEEP協会・清泉寮

参 加 者：16名

担 当 者：楠本和彦、中西美和、植平 修、小笠原晶

【人や人との関わりに関する講座】

ポジティブ生徒指導入門

開講期間：2024年8月3日（土）9：00～12：00

場 所：南山大学 D棟

参 加 者：4名

担 当 者：宇田 光

パーソンセンタード・アプローチ・ワークショップ ＜ベーシック＞

開講期間：2024年6月29日（土）10：00～17：00

2024年6月30日（日）9：30～17：00

場 所：南山大学 D棟

参 加 者：27名

担 当 者：青木 剛、永野浩二、山根倫也

パーソンセンタード・アプローチ・ワークショップ

<アドバンス>パーソンセンタード・リスニング・トレーニング

開講期間：2024年10月5日（土）10：00～17：00

2024年10月6日（日） 9：30～17：00

場 所：南山大学 D棟

参 加 者：22名

担 当 者：青木 剛、並木崇浩、大島利伸

パーソンセンタード・アプローチ・ワークショップ

<フォーカシング>

開講期間：2024年11月9日（土）10：00～17：00

2024年11月10日（日） 9：30～17：00

場 所：南山大学 D棟

参 加 者：24名

担 当 者：青木 剛、加藤敬介、竹田悦子

パーソンセンタード・アプローチ・ワークショップ

ベーシック・エンカウンター・グループ

開講期間：2024年11月2日（土）13：00～

11月4日（月）16：00 2泊3日

場 所：（財）名古屋市民休暇村管理公社・おんたけ休暇村

参 加 者：14名

担 当 者：青木 剛、楠本和彦、永野浩二、大島利伸

■社会人公開講座／参加者統計(2024年度)

講座名		場所	担当者	期間	時間	曜日	参加者数	年代				
								20代	30代	40代	50代以上	無回答
前年度までの総計							9,477	1,932	2,359	2,886	2,094	206
ラボラトリー方式の体験学習の講座	第10回人間関係講座（ベーシック）	南山大学	中尾・大塚	2024/5/18	10：00～17：00	土	25	7	3	8	7	0
	第124回人間関係講座（グループ）	南山大学	伊東・大塚	2024/6/22、23	10：00～18：00 9：00～17：00	土日	18	2	4	4	8	0
	第125回人間関係講座（コミュニケーション）	南山大学	森泉・中尾	2024/10/26、27	10：00～18：00 9：00～17：00	土日	16	2	3	3	8	0
	第2回人間関係講座（オンライン）	オンライン	池田・中村	2024/6/6、6/20、7/4、7/18、8/2、9/19	9：30～12：30	木	14	0	4	3	7	0
	Tグループ 〔人間関係トレーニング〕	清泉寮	楠本・中西 植平・小笠原	2025/3/8～13	5泊6日		16	1	0	7	8	0
人や人との関わりに関する講座	ポジティブ生徒指導入門	南山大学	宇田	2024/8/3	9：00～12：00	土	4	0	0	3	1	0
	パーソンセンタード・アプローチ・ワークショップ〈ベーシック〉	南山大学	青木・永野・山根	2024/6/29、30	10：00～17：00 9：30～17：00	土日	27	0	2	10	15	0
	パーソンセンタード・アプローチ・ワークショップ〈アドバンス〉 パーソンセンタード・リスニング・トレーニング	南山大学	青木・並木・大島	2024/10/5、6	10：00～17：00 9：30～17：00	土日	22	0	0	5	17	0
	パーソンセンタード・アプローチ・ワークショップ〈フォーカシング〉	南山大学	青木・加藤・竹田	2024/11/9、10	10：00～17：00 9：30～17：00	土日	24	0	0	5	19	0
	パーソンセンタード・アプローチ・ワークショップ ベーシック・エンカウンター・グループ	おんたけ休暇村	青木・楠本 永野・大島	2024/11/2～4	2泊3日		14	1	0	2	11	0
2024年度合計							180	13	16	50	101	0
総計							9,657	1,945	2,375	2,936	2,195	206

※参加者総数は、前身である南山短期大学人間関係研究センター公開講座（1977年～）参加者との累計で表示されています（人数は修了者数）。

2022～2024年度 社会貢献（受託事業・コンサルテーション等）（順不同）

研修・講座・企画名等	委託者・主催者
2022年度	
子育て支援グループ	南山大学附属小学校
PCA Network カンファレンス	PCA Network
PCA Network 東海	PCA Network
南山大学フォーカシング研究会	南山大学フォーカシング研究会
子どもとかかわる専門職のための フォーカシング研究会	子どもとかかわる専門職のための フォーカシング研究会
フォーカシングの心理臨床の未来への貢献 －身体とプロセスへの注目をめぐって－	日本心理臨床学会第41回大会
PCA乗鞍	人間関係研究会
パーソンセンタード・アプローチの 学びに関する研究会	パーソンセンタード・アプローチの 学びに関する研究会
ヤンセン国際寮インクルージョン ワークショップ	南山大学 ヤンセン国際寮
ヤンセン国際寮インクルージョン ワークショップ「リーダーシップ」	南山大学 ヤンセン国際寮
教育相談基礎講座「グループアプローチ演習」	名古屋市教育センター
学級・学年づくりに生かす教育相談講座 「人間関係づくりトレーニング」	愛知県総合教育センター
愛知県看護協会認定看護管理者教育課程 セカンドレベル	愛知県看護協会
組織管理論Ⅱ 組織マネジメントの実際	
名古屋大学教育学部附属中・高等学校 PTA向けワークショップ	名古屋大学教育学部附属中・高等学校 PTA
経営力再構築 伴走支援シンポジウム	中小企業庁
2023年度	
子育て支援グループ	南山大学附属小学校
フォーカシング・リスナートレーニング	フォーカシング研究会
子どもとかかわる専門職のための フォーカシング研究会	子どもとかかわる専門職のための フォーカシング研究会
パーソンセンタード・アプローチの 学びに関する研究会	パーソンセンタード・アプローチの 学びに関する研究会
教育相談基礎講座「グループアプローチ演習」	名古屋市教育センター
学級・学年づくりに生かす教育相談講座 「人間関係づくりトレーニング」	愛知県総合教育センター

研修・講座・企画名等	委託者・主催者
現職研修「ハイポイントインタビュー」 教師のためのカウンセリング講座 「ナラティブアプローチを生かした教育相談」 愛知県看護協会認定看護管理者教育課程 セカンドレベル 組織管理論Ⅱ 組織マネジメントの実際	六ッ美西部小学校 日本学校教育相談学会愛知支部 愛知県看護協会
2024年度 子育て支援グループ フォーカシング・リスナートレーニング 子どもとかかわる専門職のための フォーカシング研究会 パーソンセンタード・アプローチの 学びに関する研究会 学校事務職員研修会 教育相談基礎講座「グループアプローチ演習」 愛知県看護協会認定看護管理者教育課程 セカンドレベル 組織管理論Ⅱ 組織マネジメントの実際	南山大学附属小学校 フォーカシング研究会 子どもとかかわる専門職のための フォーカシング研究会 パーソンセンタード・アプローチの 学びに関する研究会 名古屋市教育センター 名古屋市教育センター 愛知県看護協会

南山大学人間関係研究センター規程

第1条 本学に南山大学人間関係研究センター〔Center for the Study of Human Relations〕（以下「センター」という）を置く。

（目 的）

第2条 センターは、広く学際的視野にたった人間関係研究を行い、その成果を積極的に公表するとともに、公開講座などの実践を通して、人間性豊かな社会の実現に貢献することを目的とする。

（事 業）

第3条 前条の目的を達成するために、次の各号の事業を行う。

- 1 本学における人間関係研究の推進と調整
- 2 本学における人間関係研究分野の教育の推進
- 3 センターと目的を共通する学外の研究機関ならびに研究者・実務家との協力
- 4 研究会、公開講座、公開講演会等の開催
- 5 文献、資料の収集と利用
- 6 研究成果等の編集と刊行
- 7 その他センターの目的を達成するために必要と認める事業

（組 織）

第4条 センターに研究員を置き、そのうち1名をセンター長とする。

② センター長は、研究員のうちから学長の推薦する候補者について、大学評議会の議を経て、学長が委嘱する。

③ 研究員は、本学専任教育職員のうちから、学長が推薦する候補者について、大学評議会の議を経て、学長が委嘱する。その任期は2年とし、再任を妨げない。

④ 必要に応じて、客員研究員を置くことができる。この採用については、別に定める。

第5条 センター長は、センターの事業を掌理し、センターを代表する。

（センター会議）

第6条 センターにセンター会議を設け、センターの運営に関する重要事項を協議決定する。

第7条 センター会議は、次の者をもって組織する。

- 1 センター長
- 2 研究員のうちからセンター長の指名する者若干名

第8条 センター会議は、センター長が招集する。

② センター会議は、構成員の3分の2以上の出席がなければ議事を行うことができない。

③ 議事は、出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

（事 務）

第9条 センターに事務職員を置く。事務職員は、センター長の指示をうけてセンターの事務を担当する。

（規程の改廃）

第10条 この規程の改廃は、センター会議および大学評議会の議を経て、学長の承認を得なければならない。

附 則

この規程は、平成12年4月1日から施行する。

附 則

この規程の改正は、2006年4月1日から施行する。

附 則

この規程の改正は、2015年4月1日から施行する。

附 則

この規程の改正は、2016年10月1日から施行する。

附 則

この規程の改正は、2021年4月1日から施行する。

編集規程

1. 本誌「人間関係研究」は、南山大学人間関係研究センター（以下、本センターと略記する）が編集し刊行する紀要であり、当面の間、1年に1号を発行する。本誌の英文表記は、“The Nanzan Journal of Human Relations”とする。
2. 本誌は、本センターの研究成果等を広く一般に紹介することを目的とする。
3. 本誌には、特集論文、Article、研究ノート、実践報告、実習集、資料の他、研究会・講演会等の報告などを掲載する。
4. 特集論文、Article、研究ノート、実践報告、実習集、資料は、本センターから寄稿を依頼する依頼論文と、本センター研究員からの投稿論文から構成される。Article、研究ノート、実践報告に関しては、本センター研究員以外の国内外の大学、公的機関または民間の組織に所属する研究者（大学院生も含む）も投稿することができる。
5. 本センター研究員以外の者が本誌に投稿する場合は、本センターの依頼した審査者2名による審査を経て掲載の可否を決定する。ただし、依頼論文はこの限りではない。
6. 本センター研究員からの特集論文及びArticleに対する投稿論文に、「査読あり」と「査読なし」の2つのカテゴリーを設ける。投稿の際にいずれかを選択し、「査読あり」の論文は査読対象とし、本センターの依頼した審査者2名による審査を経て掲載の可否を決定する。
7. 審査が必要な投稿論文は発行年度の5月末日を締め切りとする。提出は本センター事務局とする。依頼論文ならびに査読を行わない論文は発行年度の8月31日を締め切りとする。
8. 審査が必要な投稿論文の筆頭著者としての投稿数は、原則として1号に対し1人1件とする。ただし、本センター研究員はこの限りではない。
9. 本誌に掲載する論文等は、原則として未公開のものとする。
10. 社会通念としての倫理に抵触するような内容、表現を含むものは、これの掲載を認めない。
11. 本誌に掲載された論文等の著作権は、本センターに帰属する。
12. 本誌はオープンアクセス誌として、掲載記事は「南山大学オープンアクセス方針実施要領」に規定されたクリエイティブ・コモンズ・ライセンスの条件の下で掲載される。
13. この規程の改正は、センター会議の議を経て行う。

附 則

この規程は、2009年10月14日から施行する。

附 則

この規程の改正は、2015年4月1日から施行する。

附 則

この規程の改正は、2016年7月21日から施行する。

附 則

この規程の改正は、2018年10月18日から施行する。

附 則

この規程の改正は、2022年4月13日から施行する。

附 則

この規程の改正は、2023年11月24日から施行する。

南山大学人間関係研究センター紀要「人間関係研究」執筆要項

【2024年1月作成】

投稿にあたっては、下記の執筆要領を参照して原稿を作成してください（実習集，資料，講演録は該当しません）。完成原稿は，南山大学人間関係研究センターまで，e-mailに添付して送付してください。

＜原稿送付先＞

南山大学人間関係研究センター

ninkan-c@nanzan-u.ac.jp

I. 原稿の構成

1. 表題（日本語・英語）
2. 氏名，所属
3. 要約（日本語の場合は500文字程度，英語の場合は175語程度）
4. キーワード（3～5つ，日本語もしくは英語）
5. 本文

II. 原稿の体裁

1. 1ページ目に，表題，氏名所属，要約，キーワードを記載し，本文は続けて1ページ目から開始する。
2. 日本語の場合，A4版縦置き横書きで，上下左右に適切な余白を設ける。1ページの文字数は，30字×40行（1200文字）程度を目安とする。
3. 書体については，本文は明朝体，見出しはゴシック体を使用する。
4. 各ページにページ番号を記載する。
5. カタカナは，原則として日本語化した外国語（例：ストレス）を記述するときのみ使用する。したがって，引用の際の外国人著者名はカタカナではなく，原語で表記することを原則とする。
6. 図表は本文に含める。図表にはそれぞれ通し番号をつけ，図の表題は「Figure 1. ○○○」のように図の上に，表の表題は「Table 1. ○○○」のように表の上に書く。
7. 脚注は通し番号を付け，本文中の該当部分に対応する番号を付す。
8. 見出しは，大見出し，中見出し，小見出しの3種類程度を目安とする。すべてゴシック体を用い，本文は改行して始める。見出しには適切な見出し番号を付してもよい。

III. 引用文献は，原稿の最終ページに，著者の姓のアルファベット順に一括して記載する。

引用文献リストの作成にあたっては，「執筆・投稿の手びき（日本心理学会）」等，関係する学会，団体等の手引きを参照し，統一的に表記する。

編 集 委 員 土屋耕治・中西美和・畑山知子
表紙デザイン 濱本博司

人間関係研究 第25号
2025年10月31日 発行

発 行 所 南山大学人間関係研究センター
代表者 中 尾 陽 子
〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18番地
電 話 (052) 832-5002
FAX (052) 832-3202
印 刷 所 ウサミ印刷株式会社
名古屋市西区児玉一丁目10番7号
電 話 (052) 522-2361 (代表)